
塾の先生

高野敢太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塾の先生

【Zコード】

N6798A

【作者名】

高野敢太

【あらすじ】

塾の講師・岸和田浩は、同僚や生徒達と共に忙しいながらも楽しい?日々を送っている。ある日、浩は一人の女性の名を耳にした。それは、浩にいやが応でも学生時代を思い出させると同時に、今でも浩の心を揺さぶる名だった・・・・。浩の恋愛を中心に、過去と現在、笑いと涙が入り混じった、日記形式の小説です。

第1章 ～ 浩（前書き）

ジャンルは「恋愛」とさせていただきました。なかなか「恋愛」が出てきませんが（第2章以降です）ご容赦を。

3月1-8日

「しらをきり通せ。絶対何も言つな。いいか、森中」
「…………先生、『しらをきり通せ』ってどうこいつ意味？」
「お前、『しらをきる』知らないのか…………。『知らない顔をする』ってことだよ」

「へえー。じゃあ、知らないふりをしておけばこいつことだね」「顔は見られてないんだろ。そうしろ、安心しろ」

中学2年生の森中が1時間も遅刻して塾にやつて來た。いきなり職員室に姿を現したかと思うとまっすぐに俺のところに來た。顔面蒼白で、ブルブルと震えている。ただごとではない様子だ。が、ストレートに「何があつたのか」と尋ねるのも風情がない。

「どうした森中、寒いのか？」

「違うよ先生、まずいよ。捕まるよ」

「鬼ごっこでもしてゐるのか？お前14歳だろ、いい加減に…………」

・

「警察だよ。もう、真面目に聞いてよ」

森中の話はこうだ。学校帰りにキーがついたままになつてゐるオートバイを見つけた。川の土手まで持つて行つて乗り回してゐるところを警官に見つかり、追いかけられたが何とか逃げて來た。オートバイは乗り捨てた。顔は見られていないし持ち物も残していない。が、怖くなつて家には帰らずそのまま塾に來た。どうしようか、と。

確かに森中のやつたことは悪い。窃盗、無免許運転だ。14歳とはいえ、捕まると相当まずいのではなかろうか。経歴に傷が付く。もしたしたら高校に入るときにかなり不利になるのでは。頭の中で

はすばやく考へがまつた。で、さつきの「しらをきれ」だ。

授業が終わる頃には森中もすいぶん元気になつた。いつもの「とぼけた奴」に戻つてみんなを和ませている。先生の「安心しろ」は生徒には結構効くようだ。

（ 警察が中学生のこのよつた行為にどう対処するか、本人がどのような、いわゆる「罪」に問われるか、また、そういう中学生の「受験」につきましては、現実と相違があることをお断りしておきます。 ）

3月19日

警察で思いつきりしほられた。

「先生、あんた、『しらをきれ』いや『きり通せ』と言つたそうですね。困りますねえ。仮にもあんた、『先生』と呼ばれる人が犯罪を教唆するよつたことを言つちやあねえ」

説教はおよそ1時間に及んだ。

そして、始末書か念書かわからないが、差し出された書類に署名等をすることになつた。「ごめんなさい。もつしません」という意思表示だ。

「氏名…岸和田浩 フリガナ…キシワダヒロシ 職業…学習塾講師等々」

森中の馬鹿野郎は、仲間と2人で悪さをしたなんて俺には一言も言わなかつたぞ。仲間が捕まりや絶対ばれるさ。やはりとぼけた野郎だ。

まあ、本人は反省してゐるし、オートバイの持ち主も「穩便に」と言つてくれているらしく、大したことにはならないようだ。とりあ

えず良かつた。だが、森中の「両親に会わせる顔がない。

3月20日

「先生、悪かつたな」

森中が謝つてきた。

「いや、俺が大人げなかつた。」両親にも謝つておいてくれ
「お母さんが今日来るつて言つてたよ」

森中の母親が来塾。ひと通り挨拶を済ませた後沈黙があつた。森中の母親が切り出した。

「ありがとうございました。うちの息子をかばつてくださつたんですね。何かほつとしてるんですよ。もの」との善し悪しはともかく。・・・・・、大したことにもなりませんでしたし」

一応お礼を言つてもらつた。複雑な心境だ。ただ、はつきりしているのは、森中の母親も言つているように、大したことにならなかつたから互いに穏やかでいられたということだ。もつと事が大きくなつていれば、

「あなたが悪いのよ！あなたがうちの息子をそそかしたからこんなことになつたのよ！」

とか、

「あんたんとこの息子が仲間と一緒にだつたつて言わないからさー！状況説明もできない馬鹿が悪いんだー！」

とか、ひどいことになつてただらつ。まあ。次からは氣をつけよう。

すまなかつた、森中。罪滅ぼしに、意地でも、嫌でも、志望校に入れてやるぜ。

3月21日

塾長に叱られる。森中の件だ。

「とにかく警察沙汰は困るんだ。栄明塾の名を汚すようなことは一度とするなよー。」

だとい。

言つことはわかるが、少しほは森中の心配もしてやれよ。あんたも先生だろうが。

減給処分にされた。

3月22日

久保優子という新中学1年生が入塾。この優子の兄、晃一も塾生だった。数々の伝説を残している。

「伝説1」コンピュータ・ゲームにはまり、ソフトを求めて20kmも離れた街まで自転車で行つたあげく、サンプルゲームに夢中になり、店内で引きつけ起こして倒れ、救急車で病院に運ばれる。

「伝説2」何を思つたか、家を出るときに玄関先で跳ね、頭のてつぺんをドアクローザーにぶつけて出血、病院に直行。ガーゼを頭頂部につけたまま塾に来る。そのガーゼには血がにじんでいて痛々しいのだが、他の塾生、講師一同大笑い。「怪獣ガッパ」の名をもうひ。

「伝説3」学校で、足を机の上にのせ、手を頭の後ろに組んで授業を受けたらしい。「社長」という名をもうひ。「俺の授業でもやつて見せてくれ」と言つと、「勘弁してくださいよ、会長」とほげべ。

「伝説4」塾の大掃除の翌日、授業に遅れまいと走つて来て、磨き上げられた入り口のガラスに気付かず突進、何とガラスを突き破る。幸い大事には至らなかつたが、あちこちから出血。「ブラ

ツディ・「ウイチ」の名をほしいままにする。

「伝説5」休憩時間、塾の一階バルニーの柵にもたれていって、何の脈絡もなく自分で勝手に柵を乗り越えて落下する。幸い、下に塾長のオープンカーがとめてあり、その幌の上に落ちて打撲のみ。どうしたのかと尋ねると、「柵を背にしていたら、頭が重くて……」「わけのわからない」と言ひ。「フリー・フォール・コウイチ」と呼ばれるようになる。

「伝説6」受験前の1月、美園北高校受験クラスで、生徒のがいなさに怒った同僚の北が、「このクラスで美園北に受かるやつなんて1人もいない」と言ひ、「久保が模試結果のデータ表を北に見せ、「僕は?」と尋ねる。データ表を見た北が、「このクラスで美園北に受かるのは久保だけだ」と発言を訂正する。

「伝説7」その年、美園北を受けた塾生20名。合格者19名、不合格者1名。その不合格者は久保晃一。

久保の親も何を考えて兄が受験に失敗したその同じ塾に妹を入れるのだろうか。引率の母親に一応挨拶をして、晃一のことを詫びると、

「いえいえ、受験は水物ですから。それより、この塾が気に入っちゃってるんですよ、家族みんな。晃一もまたお世話になるって言つてますから、よろしく」

だそうだ。変な家族。

講師の間では、久保優子を「刺客」という「コーデで呼ぶようにした。

4月9日

高3の宮城が学校の制服で来た。それだけなら何でもないのだが、ルーズソックスをはいているのだ。よせばいいのに。象がルーズソックスをはいているようなものだ。しかし、忠告もできない。たま

たま居合わせた中3の女の子2人も声を失っている。何となく空気が重い。仕方がないから話しかけてやろう。

「富城、お前、いつもその格好で学校へ行くのか？」

「はい」

屈託のない返事だ。素直さと明るさが富城の良いところだ。そういう、誰にだって良いところはあるのさ。勇気をもってきいてみよう。

「富城、お前、そのルーズソックスは、自分でいてダラダラにして作つたのか？」

一瞬、空気が凍つたような気がした。

「いいえ、買つたんです」

さすが富城、こともなく答えてむさと教室に消えて行った。富城がいなくなつてから、中3の女の子に、

「先生、何てこと言つんですか！」

と責められる。同僚も、

「今のはちょっとまずいんじゃないですか。問題発言ですよ」
なんて言つてくる。

みんなが知りたいことをきいて何が悪いんだ。何より俺が知りたかつたんだ。

その後、富城のクラスでも授業をしたが、富城はいつも通り、明るく素直にとぼけたことを言つていた。全然問題ないじやないか。

4月12日

中1の松戸が塾に来るなり「腹が減つた」を連発する。と言つよりそれしか言わない。

「おい、松戸よ、ホントに腹が減つてて氣の毒だとは思つが、一応女の子なんだし、『腹が減つた』しか言わないんじゃ格好悪いぜ。何かほかに言つことがあるだろ？」

「何？」

「自分で考えろよ」

「あ、わかつた！先生、電話借りるね」

「いいよ」

しかし、何がわかつたんだろ？

「もしもし、シーフードピザのMサイズを一枚お願ひします。電話番号は・・・・・」

止める間もなくピザを注文してしまった。大した奴だ。

4月13日

富城がわけのわからんないことを言う。

「先生、『赤い渡る』って何ですか？」

「何だその『赤い渡る』ってのは。どに書いてあるんだ？」

「テキストのこです。ほら」

見ると、The Red Crossとある。絶句した。が、気を取り直して、

「富城、これは『赤十字』だろ」
やせしく教えてやつた。

「でもcrossは渡るじゃないですか」

真顔で言ひ。こつは高3になつても品詞が理解できていないのか。いや、品詞云々の問題ではない。もつ手遅れだ。

4月15日

富城がわけのわからんないことを言つ。

「先生、『わたしはそのとき眠つている犬を使った』ってどういうことですか。テキストのこです、ほら」

見なくともわかつた。asleepとbagのこだらう。

「それは『寝袋』だろ」

「へえー、do you って『袋』って言つ意味もあるんですね

しゃれで言つたのなら大したものだが、富城に限つてそれはない。こいつは完全に手遅れだ。

4月17日

富城が塾に来るなり話しかけてくる。

「先生、今日、学校で生物のテストがあつたんですよ」

こいつが自分からテストの話題をふつてくるとは、よほび手ヽいたえがあつたに違ひない。話に乗つてやろう。

「そうか、できたか?」

「全部埋めたんですけど、記述の問題で自信がないといひがあるんです」

「どんな問題だ?」

「はい、『減数分裂の前にDNA量が増えるのはなぜか』っていう問題です」

「で、どう書いたんだ?」

「はい、『念のため』つて

「・・・・・・そつか」

後の言葉が出て来ない。

こいつはただのボケなのか、結構な大物なのかわからなくなつてきた。大物としても大学受験は失敗するだろうが。

4月19日

高2の原田が煙草臭い。俺は煙草を吸わないから臭いには敏感だ。

「煙草を吸うと単語が覚えられなくなるぞ」と脅す。

「わつかりましたあ

やけに明るい返事が返つてくる。まあ、どう言おうが吸う奴は吸うのだ。

授業が終わって生徒達が帰つて行く。窓から見ていると、自転車にまたがった原田がシャツの胸ポケットから煙草を一本取り出して火をつける。そして、星空を仰いで煙を吐き出し、肩の凝りを癒すように首を左右に曲げた後、ゆっくりとペダルをこなす。許そう。格好をつけて吸つているのではない。煙草がサマになつている。

4月20日

いやはや、保護者からの電話には辟易する。その大半は苦情や泣き言だ。成績のことならこっちにも責任があるし真摯に応対するが、子どもの性格のことをうじうじ言われても、どうしようもないのだ。親がどうにもできない性格を、たかが塾の講師がうじうじして言つのだらうか。

「親が言つても聞かないんですよ。ここは先生の方から何とか」
こつちも商売だから、

「わかりました。今日授業の後にも話してみましょ」
と答えておくとそれなりに感謝される。実際、生徒には話すのだが効き目がないことが多い。当たり前だ。

まあ、親に会わせておくれのも給料のうちか。

4月21日

電話が鳴る。出でみると生徒の母親からだつた。

「吉本です」
「はい、こつもお世話になります」
「…………今日休みます」
「ユタカ君ですね。どうなさいましたか？」
「…………熱」

「いけませんねえ。ゆつくりと休ませてあげてください。お大事に」
・・・・・ガチャン。

・・・・・ ガチャヤン。

もつと愛想があつてもよさそうなものだが、最近この手の母親が多いのだ。本当なのだ。こんな母親と話して育つてりや国語がダメなのは当たり前か。俺の責任じやない。

「たまに父親からの電話があるか、との父親も母親より丁寧できちんと話した話なのだ。田頃社会でもまれていてるからなのだろう。『たかが塾の講師』と腹の中では思つてはいるやも知れぬが、そんなことはおぐびにも出さない。立派だ。」

4月22日

授業後、中2の中曾が馬鹿丸出しで石頭を自慢している。

「俺はヘッドパッド（頭突き）で負けたことがない！」

それを闇していた筋肉隆々の同僚 北かヘッドロックで中曾の頭を締めあげたのだ。 中曾の石頭に挑戦した

「痛い！先生！まいりました。もうしません！」

なおも締めあげる北。

「ごめんなさい。許してください。あいたたた・・・・・・」

お前、悪いことをしていないのに謝るんじゃねえ

理不尽なことにかけては北は相当なものだ。中曾が開放されたのはそれから3分後だった。

4月23日

北が遅れて來た。昨夜、寝るときに胸に激痛が走り、息をするのも困難になつたのだそうだ。それで病院に寄つて來たということだ。「右側の肋骨にヒビが入つてたんですよ。ヘッドロックして骨にヒ

ビが入るなんて初めてですよ。何か殴つて指を折ることは普通に何回かありましたけど」

北の「普通」がわからない。ともかく、中曾の石頭が勝ったといふことになる。

「中曾には内緒にしておいてください」

北にもばつが悪いといふ気持ちはあるようだ。

5月8日

午後4時、誰かが入つて来る気配がした。授業までにはまだ間があるが、生徒が忘れ物を取りに来たか、わからないといふを教えてもらひに来たかだらう。通路で脅かしてやひつ。

「わつ！」と叫んで生徒の前に飛び出す。

「うお——つ！」

知らないおじさんがうなりをあげた。一瞬、何がなんだかわからなくなつた。おじさんはもつとわからなくなつてゐるに違ひない。すぐに謝る。

「すみませんでした。生徒だと思つたもので」

「お宅は、生徒だと脅かすんですか」

鋭い指摘だが、ひるむわけにはいかない。

「ええ、時と場合によつては」

いかん、何を言つてゐるんだ、俺は。人格を疑われるぞ。

「はあ、そうですか。楽しそうな」と

「どうも」

「」の「どうも」つてのは便利な言葉だ。何とか收まりがついた。

見知らぬおじさんは某高校の事務の方で、高校の案内書を持って来てくださつたのだ。大変失礼なことをしてしまつた。

5月9日

1人生徒がやめた。授業中にすべきことをしないで遊んでいれば、叱られるのは当たり前だ。俺に叱られたのがよほどこたえたらしい。そんなに激しく叱つてはいないし、何より生徒本人のためなのだが。・・・・・。叱られ慣れてはいないからな、最近の子どもは。ちゃんと叱られたら、全人格を否定されたような気になるんだろうな。仕方ない。残念だが塾はうちだけではない。いっぱいある。自分に合つた塾を探して欲しい。それが生徒のためだ。しかし、叱られない塾なんてあるのだろうか。まあ、どこかにはあるんだろうな。俺には絶対に務まらないけど。

減給処分だそうだ。知るか！

5月11日

塾が終わるくらいの時間になると、塾の周りに怪しげな連中がたむろするようになった。どう見ても中学生だ。うちの塾に通つている友達を待つているらしい。最初はただいるだけで実害はなかつたが、そのうち、煙草は吸うわ、ジュースの空き缶は投げ捨てるわ、ご近所に顔向けできないことをし始めた。頭にきて一度追つ払つたが、数日後、何事もなかつたかのようにやつて来る。また追つ払いに出て行くがもう聞きはしない。聞くどころか、

「おっさん、うるせえんだよ。ぼる雑巾にしてやろうか」「だつて。面白い。雑巾にできるものならしてみろ。雑巾はともかく「おっさん」呼ばわりは許せん。「お兄さん」だろ？が。自転車にまたがつているくわえ煙草のリーダーらしき奴のところに行き、腕を取り、自転車から引きずり下ろした。バタバタ暴れるが所詮はただの中学生、俺の相手ではない。そのまま塾の中に連れて入つた。「お前よ、迷惑なんだよ。一度とたむろするな」「うつせい！道路で何しようが俺の勝手だ！ざけんな！」

やけに威勢がいい。

「ほおー。じや、この写真の煙草吸つてる中学生は誰かな？警察呼んで確かめるか？」

以前撮った写真を見せ、本当に110番してやつた。森中の例もあるし、悪さする奴を見つけたら警察に任せなくては。

「すみません、中学生が煙草吸つてたんで捕まえたといひなんですよ。来てください」

こきなじリーダー君は逃げ出でやうとする。誰が逃がすか。こんなこともあらうかとドアはロックしてチーンもかけておいたんだよ。ロックはともかく、チーンをはずす間にまた捕まえられるんだよ。

「あきらめの悪い奴だな。警察が来るまでおとなしくしてろよ」

「おっさん、頭変なんじやないか！煙草くらいで」

「やつだよ、煙草くらい何とも思ひやしないわ、俺は。ただ「おつせん」呼ばわりが許せないだけだ。

「おつせんじやないの。お兄さん」

「おっさんはおっさんなんだよ、おっさん」

頭にきた。俺がいかに「お兄さん」かわからせてやるが、

「てめえの親父は何歳だ。俺は親父よりずいぶん年下だと思ひや」

「35歳だよ」

若い。が、俺の方がずっと若い。

「お前は何歳だ」

「15だよ」

父親が二十歳のときの子か。俺が二十歳のときは学生で・・・・。

。。いや、思い出すのはよそつ。じこつの母親は何歳だら？。

「母さんは何歳だ？」

「関係あんのかよ」

「あるんだよ！俺が『お兄さん』がどうかによー早く言えー」

「33歳」

母親も若いが、俺の方がまだ若い。勝つた。

「見やがれ！俺は『お兄さん』だよ。はつはつはつはつはつー」

勝ち誇ったように笑う。リーダー君の顔がゆがんだ。わけがわからんないんだろう。当たり前だ。リーダー君には俺がいかに「言葉」（というより「お兄さん」）に「だわるかなど理解の外だ。関わってはならない人に関わってしまったという焦りが見て取れる。

そういうふうに警官が2人来た。そういうや、煙草の件があつたんだ。

「まあ、こいつも反省しているでしょ。だから許してやつてください」心の広いところを見せてやる。警官の1人は露骨にイヤな顔をする。そりやそうだ、呼びつけた本人が「許してやつてください」じや、ムツともするわ。もう1人がキヨトンとしながらも話を継ぐ。

「はあ。ところでこの子の名前は」

「知りません。年齢は15歳です。父親は35歳で、母親は33歳です」

「…………はあ。で、どうしましょ。私どもがこいつ言つのもあれなんですが、あなた先生でしょ、指導力もありそうですし、こはひとつ、先生の方からピシッとお願いできませんかね。保護者に連絡してもらつて、ピシッと。その方が効き目がありそうですし」「いや、うちの生徒ではないもので。お任せしますよ」

しかし、警官もなんだかんだと理由をつけて結局「じゃ、先生から」指導いただくということで」と、俺にリーダー君を押し付けて帰つて行つた。馬鹿らしくなつてきた。

「帰れ。一度と来るな！」

「誰が来るかよ！」

素直に帰つて行つた。

5月12日

大林が話しかけてきた。

「寺本が、あ、昨日先生が捕まえた奴、あいつがさ、『一度と行かないからな、おっさん』つて。で、これやるつてさ

封が切られたマルボロだつた。

「俺は煙草は吸わないんだよ。そう言つとけ」
中学生が高い煙草吸いやがつて。もつと安いのがあるだろうに。
つて、そういう問題ではない。しかし、煙草もらつても仕方ないん
だが。原田にやろつかな。

その後塾長に呼び出された。

「お前、また警察か！」
「はい、今回は自分で呼びました」
「・・・・・」
ザマミロ。

5月14日

高2の山下が悩みがあるといつ。

「どうした？」

「先生、僕、どの大学に行こうかと思って」

「は？お前に大学が選べると思つてるのか？」

「うん、名古屋大学にしようか、大阪大学にしようかって。どっち
がいい？」

こいつは正氣か。だが東京大学と言わないとこに正氣、いや本
気が感じられる。何とか氣を取り直して尋ねた。

「おい、名古屋や大阪の下に何が付くんだ？」

「え、どういふこと？」

「いや、だから、名古屋　大学とか、大阪××大学とか」

「何も付かないよ」

絶句した。しかし、何か言わなきや。

「俺なら大阪大学にするけどな、俺ならな」

「そうか、大阪大学か。じゃ、そうするよ」

「そうか、大阪大学にしたか。でも、今のまじや無理だぞ。今ま
でお前が生きてきた年数浪人しても無理かも知れない」

「そうだよね」

「ああ安心した。やつぱり、こいつ、しゃれで名大だ阪大だつて言ったんだな。良かった。が、違つてた。」

「先生、僕、塾やめるよ。悪いけど阪大ならこの塾より大手予備校の方がいいと思う」

「救いようがない。救えないなら、せめて気持ちだけでも高みに登らせてやらなきゃな。」

「俺もそう思う。山下ほどのヤツなら、『やまな』、塾の方が合うと思つぜ」

「やつぱり！じゃ、そうするよ」

「おお、退塾の手続きはしておいてやる。がんばれよ」

「ありがとうございます」

「どういう育ち方をしたんだ。『やれば何でもできる』とか、『叶わぬ夢はない』とか、ずっと聞かされて育つてきたんだろうな。否定はしない。だが、そこに『努力』の2文字が抜けでませんか？でも最近多いぞ、『根拠のない自信』『裏付けのない万能感』にあふれた連中が。」

5月15日

中1の正岡（男子）が塾のトイレ（和式便器の水洗）で大便中、間違つて誰かにドアを開けられてしまった。不覚にもロツクをしていなかつたのだ。それが、ちょうど出でている真つ最中で、見た方も見られた方もかなりのショックだつたようだ。

5月17日

正岡、退塾。

塾長に呼ばれる。

「正岡が退塾するようだが、理由は？」

「ウンコしてるとこうを見られたからです」

「何だそれ？ そんなことで退塾するのか？」

「そうみたいですね」

「何で止めないんだ？」

「どう言って止めるんですか？ もうウンコしてるとこうは誰にも見させないから」 って止めるんですか？」

「それくらいのことは言えよ」

「はい、次からはそうします」

「どこかおかしい。」

5月19日

中1の授業中、何かにつけて投げやりな藤田がこう言つ。
「勉強なんてしなくていいよ。適当で。いざとなつたら西光森高校に行くから」

西光森高校と言えば、履歴書にその名があるだけでどんなに人手不足の企業でもアルバイトにさえ採用してくれない天下無敵の馬鹿でワルの高校、行かないほうが人生のプラスになるという世にも珍しい高校だ。まずい。こいつら中1にして、世間の高校評をしつかり受け取つて、それを努力をしなくていい理由に使うことまで知つてている。ijiにはひとこと言つておくべきだらうな。

「お前、本当に西光森に行くのか。いいか。西光森なんてな、誰でも、いや、何でも入れるんだぞ。努力もなーんにもなし。ここだけの話だからよそで言うなよ。西光森の先生が授業で使おうと思つてプリントを教室の机の上に用意しておいたんだ。で、授業が始まつてみると用意しておいたプリントがない。おかしいなと思つて教室中見渡したら、何と一番後ろの生徒用机で、山羊がプリントを食べてたんだ。普通の学校なら大騒ぎや。でもな、その先生は冷静にこう言つたんだ。

『おい、大沢、プリントを吃べるのはいい加減によしてくれ。授業にならないじゃないか。それからみんなも大沢がプリントを食べ始めたら注意してくれよ。クラスメイトだろ』

つて』

何人かの生徒はすぐ笑う。そのうち話が飲み込めて笑い出す生徒達。さあ、ここからが本番だ。『冗談をステップに努力について話しておかなければ。しかし、ただ1人きよとんとしている生徒がいる。境だ。その境が何を思つたか手を擧げる。

「どうした境、何か言いたいのか？」

にこやかに話しかけてやる。

「ウン。僕ん家、お父さんもお母さんも西光森！」

シーンという音が教室中に響いたような気がした。顔が一瞬でひきつるのが自分でもよくわかる。俺だけではない。さつきまで笑っていた生徒達も一齊にひきつっている。知つてはいけないことを知つてしまつたのだ。父親と母親の寝室での秘め事をかいま見てしまつた幼い子どもの心境か。さすがの俺も1分ほど言葉が出なかつた。

「…………そ、そうか。も、もしかして、お前も行くつもりな

のか、西光森？」

ようやく出た言葉がこれだ。何のフォローにもなつていない。

「はい、できたら

境は真面目に答える。

わかつた。俺は今、この瞬間からお前に優しくしてやる。決めた。他の生徒達も同じ思いに違いない。境家の秘密を知つてしまつたせめてもの罪滅ぼしだ。

5月22日

境、転校のため退塾。

5月23日

国語の授業。有田にてキストを読ませる。

「生まれ故郷の『のつむら』では・・・・・・・・」

教室がざわつく。

「おい、今何て言ったんだ」

「生まれ故郷」

「いや、その次だよ」

「のつむら」

「・・・・・・それはね、『のつむら』(農村)『つむら』の

「いつからですか?」

「・・・・・・ずつと」

5月26日

漢詩を教える。まずは、漢詩の形式だ。

「いいか、漢詩では行を一句、一句という風に句と数える。で、一句が五文字ならそれは『五言』だ。一句が七文字なら『七言』だ。次に、四句の詩を『絶句』、八句の詩を『律詩』と言つんだ。普通、問題になるのはこの『五言』『七言』と『絶句』『律詩』とを組み合わせた形式なんだ。ちょっと確認しておくか。(縦に5個のを一行とし、それを4行書いて生徒に示す)

『

おい、有田。『のつむら』漢詩の形式は何だ?』

「うーん・・・・・・」

「四句の詩だから何だつたかな?」

「絶句です」

「それならもうわかるだろ?。その『絶句』の上に何か数に関係あ

る言葉がつくだけだ」

「はい、『にじゅうじんぜつく』です」

教室中が笑った。そりや笑うぜ、有田よ。笑い事ではないのだが俺も笑つてしまつた。

5月27日

隣町の中学校で、男性教師が女子生徒に猥褻なことをしてクビになる事件があつた。よくあることだが、その教師というのが2年前までうちの塾がある校区、つまり地元の中学校に勤務していたらしく生徒達も親達も多少ざわついている。

「あの先生、すごく人気があつたのに」

「授業が面白かつた、つて、お兄ちゃんが言つてた」

「お母さんは『魔が差したんだろう』つて」

「マガサシタ？ 何それ？ どういうこと？」

生徒もなかなか盛り上がつている。

「先生つて呼ばれるような仕事の人はどこかズレると、いつぺんに危ないことする人が多いんじゃない？」

「優等生の斎藤がなかなか鋭いことを言つ。」

「斎藤、結構いいとこ突いてるじゃないか」

「じゃあ、先生も危ない人なの？」

おお、来た来た。

「ああ、ちょっと危ない」

笑い声や、本当にイヤそうな「えーーーー」、「やだあ」という声があがる。

「まあな、危ないつていうより、不平や不満や欲望があるつてことだ」

またつるさくなる。

「だけど、不平や不満や欲望のない人なんているか？ まずいないだろ。学校の先生も、塾の先生も、お医者さんも、先生とは呼ばれな

「けど警察官も、みんなどこか危ないところは持つてるのさ」

「当たり前のことだ。話を続ける。

「でも、教師は生徒の前に立つと不平や不満や欲望なんて忘れて、何とかわからせてやろうと思うし、生徒にはまつとうな人生を歩んで欲しいと思うんだな。医者は患者さんのところに行くと、何としでも病気や怪我を治してやろう、助けてあげようと思うし、警察の人だつて、一般の人が安心して暮らせるように命がけで頑張ろうつて思うものなんだよ」

「でも、結局とんでもないことするじゃん」

「そうだな。ところで斎藤、お前の学校に先生は何人いる?」

「40人くらい」

「で、その中で何かしでかした先生は何人いる?」

「いないよ」

「だろ。この地区に公立中学校が5つある。1つの中学に先生が40人いるとして全部で200人。今回隣町の先生が1人悪さをしたけど、残り199人はまあ普通に先生をしてるんだ。普通については、不平不満、欲望なんてどつかに飛ばしちゃつて、君達のために頑張ってるつてことだ。それが先生っていうもんだ。たつた1人が変だからといって、残り全部も同じじゃないだろ」

「でも普通じゃない先生に当たつた生徒達はかわいそうだよ。下手すると人生が狂うんだよ。運が悪かつたじゃ済まないとと思うけど」

やはり斎藤、すごいことを言つ。

「俺もそう思う。だが、それは学校の先生とか医者とかつていう職業の問題ではなくて、例えば岸和田浩とか、斎藤隆之とか、隣町の何とかさんつていう個人の問題だと思うんだよ。自分の欲望を抑えられない個人が、たまたま学校の先生やつてたんだ。学校の先生つていう職業全部を変な目で見るのはやめた方がいいと思う」

「じゃあ、変な先生に当たつた生徒はあきらめるしかないの?何か納得できないよ」

斎藤が食い下がる。

「いや、あきらめなくていい。他の先生やお父さんお母さんに助けを求める。それで聞いてくれなきゃ教育委員会がある。なんなら俺でも力になる。弁護士さんだつている。意思表示することだ。いいか、『あの先生、俺を叱つたから嫌いだ』とか『宿題が多過ぎるから消える』とか、お前達のワガママを通せというんじゃないぞ。不正、邪悪には目をつぶるなということだ。少なくともお前達が学んできた『正しさ』から外れてると思つたときには周囲に判断をを仰いでみろつてことだ。みんなそれなりに判断してくれるし、力にもなつてくれるだろう。俺が言つても説得力がないけどな」

「先生、今日は何かマトモ」

高橋がほめてくれた。

「そうか、ありがとう。とにかく、お前達の周りにいる99%以上の先生、もつと言つと99%以上の大人はみんな一生懸命、立派に生きているんだ。1%に満たない変な奴のために教師や大人全部に絶望するような愚かなことはしないで欲しい。何より、お前達が、これからその大人になるんだからな。俺も、大人になるお前達に、キチンとした何かを示してやれる先輩の大人であるように努力するよ」

齊藤もうなずいている。何とかおさまつた。良かった。感動してゐる生徒もいた。言つてみるもんだ。

今度のような事件があるとこつちもやりづらい。一応先生だし。何より、学校の先生の息子や娘がこの塾に何人通つてていると思つてゐるんだ。相当いるぞ。うかつに話題にもできやしない。齊藤、少しは氣を使えよ。第一、お前の家は両親とも学校の先生だらうが。

5月28日

授業後、高3の宮本が話しかけてきた。

「ねえねえ、『デカメロン』って何なの？」

とても受験生とは思えない言葉を吐ぐ。少しからかってやれりつ。

「あんな工口本、どうでもいいじゃないか」

「え、『デカメロン』って工口本?」

「ああ、世界で最も有名な工口本じゃん。歴史の教科書にも載つて
る工口本」

「へえー」

「お前も図書館かどつかで読んでみろよ」

「そつする」

ボツカチオさん、じめんなさい。

5月29日

最近、学校から家に帰る前に塾に来て、学校の宿題をして帰る生徒がいる。中2の藤岡と林だ。宿題を見てやる代わりに、ジュースやアイスクリーム、時には弁当などを買いに行つてもらつてている。もちろんお金は出し、おじりもする。まあ、藤岡と林にしてみれば口課みたいなものだ。そのうち、他の講師も便乗するようになつた。一度に結構な量の買い物をしてくるようになつた。大盛況だ。だが、今日は腹が立つた。林にアイスクリームを頼んだ。だが、量だけ多くて全然おいしくないあるメーカーのだけはよしてくれと念を押したのに、それを買って来たのだ。

「お前、絶対買つてくるなと言つたのをビリして買つてくるんだよ
！換えてもらつて来いー！」

「え、絶対にこれだと言つたじゃないですか」

「これだけは絶対に買つなつて言つたんだよ」

「でも・・・・・・」

「『でも』も『しかし』もあるかー！とひととほかのに換えて来いよ

「でも、レシートもらつてないんです」

「何い！役に立たないなあ。おー、これはお前にやるからすぐ食え。
1分以内に食つたら許してやる」

「はい」

林は量だけ多くてまずいアイスクリームを食べ始めた。涙を流しながら食べている。泣くほどのことか。余計に腹が立つた。

「お前よ、中学生にもなつてお遣いがまともにできなにようじや、受験はとてもじやないがダメだな。『次の選択肢から間違いを選べつていう問題で、正しい選択肢を選んじやうタイプだよ。絶対に顔中ドロドロにしてベソをかきながらアイスクリームをなめる中学生。その横で悪態をつく塾の先生。すごい図だ。

「まあまあ、たかがアイスクリームで」

同僚講師の進藤が林の肩を持つが、何故かいきなり北が、「たかがアイスクリーム一つまともに買えない奴には何も教えることはない。帰れよ。それとも何か、わざと買って来て、岸和田先生に嫌がらせしたんだろう。そうだよな?」

と言つたもんだから、林は号泣してしまつた。

まあ、アイスクリーム一つでこうだからなあ。少しは大人になろうかな。

5月30日

林は昨日あれだけ泣かされたのに、懲りもせずお遣いをしに来た。「昨日はすみませんでした。もう大丈夫ですからお遣いに行かせてください」

こいつ、頭は大丈夫か?と思ったが、結局チヨコレートを頼んでしまつた。俺はチヨコレートが好きなのだ。

「おいしいチヨコレートを頼むぜ」

「はい、任せてください」

10分後、俺はチヨコレートを前に不機嫌な顔をしていた。よりによつて、とてつもなくまずいチヨコレートを買って来たのだ。何故か、北が怒つたように宣言していた。

「今日からお前を『役立たずのソン』と呼ぶ」

6月1日

塾長と進藤が言い争いをしている。進藤が生徒の退塾をあっさり認めたとか、その生徒がライバル塾に移ったとか。塾長は「もつと粘つて何とか引き留めるべきだつた」と言いたいらしい。別に進藤の肩を持つわけではないが、いいじゃないか。生徒にとつて塾はうちだけではない。うちが合わないとえれば、よそへ行くのが普通の行動だ。生徒のためもある。北が口をはさんだ。

「塾長、もういいじやないです。下手に引き留めたつて、それ以後は遠慮しちやつてこひちやが讓歩することになるんですから。授業がやりにくくなりますよ」

「お前には何も言つてない！経営に口出しするんじやない！」

と怒られたが、北も黙つてはいない。

「わかりました。一度と口出ししませんから。さあ、続けてください。どうぞ、遠慮なく」

さすがにばつが悪くなつたのか、塾長は別の部屋に進藤を連れて行つた。最初から人目につかないところでやれよ。現場の苦労も知らずに、「経営＝生徒数＝お金」つていうだけの思考は何とかしろよ。きれい事で済ます気はないけど、その生徒の教育つてことを考えたから、進藤だつて退塾を認めたんだが。ああ、気分が悪い。

6月2日

同僚の大久保が俺の隣で生徒の質問に答えている。

「いいかい、この県には『筑波研究学園都市』があるんだから簡単だろ。『いばらぎ』県だよ。だから答えはFだな」

敢えて何も言わなかつたが、都道府県名もまともに言えない奴が塾で教えてるんだから、簡単な問題もわからない生徒がいて不思議

じゃないよな。まあ、俺も「生徒より5分早く理解すりゃ教えられる」なんて言つてるんだから大差ないか。でも「いばらき」県はなによな。怒るぜ「いばらき」県民が。

そういうや最近、「雰囲気」を「ふいんき」つて言つ生徒達が結構いるよな。もしかして大久保の影響か。

6月3日

中1の英語の授業で、曜日と月を教える。これくらいは教えるまでもなく知つている子が多い。試しに安田を指名して曜日を読ませる。

「・・・・・ウエンズデイ、サースデイ、・・・・・」

「おお、安田、さすがにいい発音だな。でも木曜日は『サークルデイ』だよ、『ズ』つて濁るんだ」

安田は不思議そうな顔をしている。困惑気味の生徒も何人かいる。「でも、学校の先生は『サースデイ』つて言つたよ」安田が言い訳をする。

「うそだろ。そんなこと言つう英語の先生がいるわけないじやん。もしいたら『先生辞めてどつかの森で木の実でも採つてろ』つて言つとけ」

「でも本当なんだよ。『サースデイ』つて」

安田が言い張る。何か本当っぽいぞ。

「その先生はお年寄りか?」

「ううん、若いよ。大学出て2年くらいの女の先生。横川つて先生」

「そうか、でもそれはウソだ。いいか、安田だけじゃなくて全員注意しろよ。学校の先生が何と言おうと、木曜日は『サークルデイ』だからな。間違えるな」

いいよな、公立学校の先生は。間違いを教えても給料減らないんだから。

6月4日

授業後、富本が話しかけてくる。

「先生、『デカメロン』読んだよ」

この馬鹿は、ホントに読んだのか。名前と作者さえ覚えておけばいいものを。何て時間を無駄にする受験生なんだ。しかも「デカメロン」で。まあ、読めと言つたのは俺だが。

「面白かったか？」

「うん、ホントにエロいところがあるね」

「だろ。あんなのが名作として教科書に載つてるんだからな。世界史なんてちょろいもんだろ？」

「そうだね」

・・・・・帰らうとしない。何なんだ、こいつは。

「どうした？」

「ねえ、ほかにお薦めの本ないの？」

「ダンテの『神曲』でも読めよ」

「それもルネサンス期の作品だね」

ほう、少しほは勉強になつたのか。知つてて当然だが。しかし、富本はこう続けた。

「『神曲』つて、エロい？」

この馬鹿、俺はエロ本を推薦してるわけじゃないぜ。塾の先生なんだから。と思いつつも、

「ルネサンスとは関係ないけど『○嬢の物語』『新○嬢の物語』なんて名作だぜ」

と応じていた。

「わかつた。読んでみる」

富本は確実に受験生としての道を踏み外しつつある。

6月5日

藤岡が髪を切っていた。やけにおしゃれな髪型になっていた。

「おい、藤岡、かつこいい髪型だな」「でしょ、『』で切ったんだよ」「はやりのカツトサロンの名を挙げた。

「『』って高いんじゃないのか？」

「まあね」

「だそうだ。男子中学生がたかが髪を切るのに大枚はたく時代か。俺なんか自分で切ってるのになあ。後ろなんか、ほとんど手探しの世界だぜ。」

藤岡の髪型は女子生徒の間でも話題になっていた。元々、顔の造りの良い藤岡が、髪型までカツコよくなつたもんだから大変だ。似合つてるとか、90点だとか、99点だとか。だが、ピクツとするような会話を聞いてしまつた。

「でも『』って高いんじゃない？ 藤岡の親つてよくお金出すよね」「ううん、親からは3000円しかもらつてないって」

「え、じゃ、残りは？」

「何か、お遣いして、お釣りを貯めたとか言つてたわよ」

あの野郎は、俺のお釣りをごまかしていたのか。雨の日も風の日も健気に来るはずだ。「」は当然予約制だ。ということは、計画的にお釣りをごまかしていたということだ。なかなかたくましいが、落とし前はつけてもらおう。

6月6日

塾の前に犬がいる。結構高そうな犬だ。だが、何で看板にくくりつけてあるんだ？ 中に入つて事務の片桐さんに尋ねた。

「え、まだいるんですね。わたしが来たときもいたんですよ。1時間ほど前ですけど。すごく人なつっこい犬で、頭を撫でたらしつぽ振つて喜んでましたよ」

授業前に見たらまだいる。

授業中に気になつて見に行つたらやつぱりいる。

授業後に見たらそれでもいる。

間違いなく飼い犬だ。だが、どうしよう。このままにしておくわけにもいかない。警察に届けに行くことにした。犬好きの中3の堀江が、「もし飼い主が現れなければもらいたい」と、俺と一緒に最寄りの交番まで犬を連れて行つた。

交番にいた若い警官は、警官にしては珍しく丁寧に話を聞いてくれ、本署へ連絡を入れてくれた。その間、堀江は犬とじやれて遊んでいる。本当に犬好きなんだ。

警官がハキハキと報告している。

「ハイツ、そうです。大きさは確認しました。ハツ、色は濃い茶色です。性別?ハツ、確認しますので少々お待ちください」

警官が堀江に尋ねる。

「ねえ、雄か雌かわかる?」

「うん、雄だよ」

「お待たせしました。性別は雄です。ハイツ。年齢?犬のありますか?」

警官は困つたように堀江の方を見る。と、犬は、前足を堀江の太ももに乗せ、堀江のむこうづねの辺りを後足ではさむように立ち、腰を振つていて。それを見た警官、こう報告した。

「ハツ、年齢はわかりませんが成犬の模様」

6月7日

学校で英語の授業中、安田が「木曜日の発音」について、「塾の先生がウソだつて言つた」さらに「『森で木の実でも採つてる』だつて」と、そのままを横川とかいう先生に言つたらしい。横川先生はその場で辞書をひき、ついでに顔もひきつらせていたそうだ。安田は横川つて先生に嫌われる。絶対に嫌われる。俺は知らないよ。

6月8日

中1の授業の最初に、一番前の席に座っていた坊主頭を、何の気なしにとりあえず殴つてみた。鈴木だった。

「何するんだよー。何もしてないじゃないか！」

「そういやそうだ。理由がない。

「いや、とりあえずな」

「家でいいつけてやるからな！」

「ああ、言いつけてみる。平氣だぜ」

6月10日

鈴木が職員室に入つてくるなり進藤に訴え始めた。

「母ちゃんに『何もしてないのに塾の岸和田に殴られた』って言つたら、母ちゃんにも殴られた」

「えつ、どういうことなの？」

「だから、『あんたが何もしていらないのにいきなり殴る先生がいるわけないでしょ！ウソつくんじゃないわよ！』って。進藤先生、何とかしてくれよ。何もしてないのに殴る奴がここにいるんだよ」

「そうだよ、いるんだよ。ここに」。

「鈴木君、ウソをついちゃいけないなあ。いくら岸和田先生が気が短くても、理由もなしにそんなことはしないよ」

鈴木の顔がグシャグシャとくずれた。鈴木のところに行つてそつとさやいた。

「だから言つたら、平氣だつて」

鈴木はタタタッと職員室から走り去つた。

さすがに気がとがめて、授業の初め、みんなの前で鈴木に謝つておいた。謝罪はみんなが見てる前でしておかないと。

6月1-2日

書店で鈴木に会った。声をかける間もなく、「何しに来たんだ!」
と叫び、鈴木は走つて出て行つた。面白い奴だ。

6月1-3日

授業後、富本が話しかけてくる。

「『〇嬢の物語』も『新〇嬢の物語』も読んだよ」
「だそうだ。自慢にもなりやしない。」

「そうか、面白かったか?」

「うん。で?」

「『で』、何だよ?」

「次は?」

「知るか! そんなこと。お前塾に何しに来てるんだよ。と思いつつ
も、

「『家畜人ヤブー』なんかどうだ。置いてる図書館はめつたにない
かも知れないけど」

と応じていた。

「インターネットで検索してみるよ」

ちょうどそのとき、北が職員室に入つて來た。

「富本、インターネットで何を検索するんだよ」

「『家畜人ヤブー』つて本」

「おお、お前、なかなか『通』だな」

「そうなの?」

「ああ、それを知つてるつて、立派なもんだ」

北は富本のところに行き、握手しながら、

「すごいな、富本、先生は嬉しいよ」

なんて言つてる。うーん、北のストライクゾーンか。それを知つ
てる俺つて、まずいかも知れない。北はなおも続ける。

「じゃ、富本、次は『アムステルダムの小さな窓』を読んでみる」「うん、わかつた。『アムステルダムの小さな窓』だね」

日を輝かせて、富本は帰つて行つた。

さすが、北だ。俺の知らない本まで知つてゐる。やつぱりこの領域では俺より上だ。

「北先生、すごいですね。その『アムステルダムの小さな窓』つて、僕は知りませんでしたよ」

「ああ、あれ、思いつきで書いてみただけ。あるわけないじゃん、そんな本。もしあつたら読んでみたいね。ハツハツハツ」

だそうだ。

「じゃ、『家畜人ヤプー』は知つてるんですか?」「知らない。話を合わせただけ。ハツハツハツ」

恐るべし、北。かわいそうな富本。

6月16日

藤岡の「ただ働き日々」が、今日で終わつた。

6月17日

授業前、携帯に電話があつた。親友、いや、悪友の安達智宏から

だつた。

「おい、大変だぜ」

「何が」

「驚くなよ」

「驚かないよ」

こいつは半月に一度は大変になることになるのだ。

「今日、昼間、恭子ちゃんを見かけた」

「恭子!?」

「ほら、驚いただろ?」

「お前、冗談にもほどがあるぜ」

「冗談じゃないよ。俺もびっくりして、人違いかなと思つて後をつけて行つたんだ」

普通、人違いで後はつけないと思うが、安達のやることだ、許そう。

「それで」

「『M』の日本支社に入つて行つた。受付の女の子と何か話してすぐ上に行つた。で、その受付の子に『香山恭子さんはいつからここで働いているんですか?』ってかまをかけたら、2週間前に配属になつたつてさ。だからあれは恭子ちゃんだ。おい、聞いてるのか?」

「ああ、聞いてる」

胸の中に甘いものと苦いものが同時に広がつた。胸で良かつた。口ならひどい味で吐いてるぜ。アイスクリームとビールを一度に口の中に入れるようなものだ。

しかし、恭子が日本に・・・・・。恭子。

6月18日

夕方、大きなスポーツバッグを肩に掛けた高校生2人とすれ違つた。10秒7とか10秒8とか、スパイクがなんとかと言つてたらから陸上、恐らく100mの選手なのだろう。是非、頑張つて競技を続けて欲しいものだ。さつきの記録が彼らのものならかなりのレベルにいるのだし。

俺も陸上選手だつた。元々は道場に通う空手少年だつたが、入学した中学校に空手部はなかつたので、足腰を鍛えるために陸上部に入つたのだ。しかし、いつの間にか空手よりも陸上競技の方にのめりこんでいった。客観的な記録で、同学年で何位、地区で何位、全国で何位と、自分のランクがわかるのが励みになつたのだ。そして、800mが専門になつていた。400mのトラックを2週、この中

途半端さが性に合っていたのだろう。中3で何とか全国規模の大会に出場できた。高校でも800mを走り、運よく1年でインターハイに出場できたが予選で落ちた。悔しかった。空手の道場通いもやめて800mに専念した。2年のとき、インターハイで決勝まで残ったが表彰台には上がれなかつた。しかし、1年後には表彰台、うまくいけば優勝できるという手ごたえはあつた。優勝はともかく、ちょっと目立てばどこかの大学に推薦で入学できる。頭鍛えるより、脚を鍛える方が大学への近道とは。中学のときに無理して勉強して公立の進学校によつやく入れたことを思えば、信じられない展開だつた。

だが、うまくはいかなかつた。高2の秋、腰を痛めて陸上はやめることになつた。つまり、頭で大学に入らなければならなくなつたのだ。とりあえず自分の学力を知るため、大手予備校主催の模擬試験を受けてみた。その会場で出会つたのが、恭子の姉、香山彰子だつた。

高校2年 11月16日

何とかゼミという大手予備校の模擬試験を受けてる。はつきり言つて時間と金の無駄だ。走つてばかりで脳みそまで筋肉になつてたぜ。問題を読んでも、自分が何をすればいいのかわからないんだからお手上げだ。寝よう。

誰かがつづいてきた。せつかくいい気持ちで寝てるのに邪魔するんじやない。

「あの、起きた方がいいんじゃないですか」

俺はちょっとムツとして答えた。

「起きてても何もすることがないんだよ」

クスッと笑つた後、有名女子大学の附属高校の制服を着たその子は続けた。

「でも、答案用紙集めないと、時間になつたから・・・・・・」

「あんた、S女子大附属だろ。何もしなくたつて上の大学に行けるのに、何でこんなところで試験受けてるの?」

答案を前の席に渡しながら尋ねた。

「自分にどれくらいの実力があるか、ちょっと試してみたくなつて」

「なんだ、俺と同じだ」

その子は声をあげて笑つた。なんでそんなにウケルのかわからなかつたが、不思議と腹は立たなかつた。

試験の帰り、電車を待つホームでさつきの子を見かけた。

「さつきはどうも。あんたもこの電車なんだ」

俺の顔を見て普ッと吹き出しながらも応じてくれた。

「ええ、あなたもなんですね」

電車の中で少し話した。

「実力知りたいって思ったのは本当なんだ。思い知ったけど」

「わたしもこのまま上の女子大にしておいた方がいいみたい」

「その、このまま入れる女子大つてのを、全国の受験生は目指して勉強してるんだぜ。うらやましい限りだよ」

「でも、大学くらい共学に通いたいなって。中学からずっと女子校だったから」

俺の降りる駅が近づいた。

「じゃ、次で降りるから」

「あ、じゃ、チョコ持つて行って。1人じゃ食べ切れないの」

カバンからチョコレートを出して俺にくれた。

「ありがとう」

「わたし、香山彰子」

「俺は岸和田浩」

電車が駅に着いた。

「また会えるといいわね」

「うん。さよなら」

俺は試験にもまいつたが香山彰子にもまいつていた。黒髪を肩まで伸ばした、色が抜けるように白い、茶色っぽい瞳を輝かせて、よく笑う子だった。

チョコレートは本当においしかった。

高校2年 12月18日

先日受けた模試の結果が届いた。ひどいものだつた。国語は偏差値がぎりぎり50あつたが、英語は35、数学・理科・社会にいたつては30だぜ。試験中ほとんど眠つてんだから当たり前か。こりや、まともな大学は無理だな。でもなあ、行きたいよな。

高校2年 12月22日

信じられないことに毎日真面目に勉強してる。今まで走ってた時間が勉強時間に変わったようなものだ。学力が少しはついたような気がする。また模擬試験でも受けてみようか。今度は眠らなくてもよさそうだ。前の試験で出会った香山彰子、元気だろうか。また会いたい。

高校2年 12月24日

高2の2学期も終わった。11月からの勉強の甲斐があつて全体的に成績はアップしていた。もしかしたら俺はやればできるのかも知れない。冬休みも頑張ろう。死ぬほど勉強して国立大学に入つて、親に少しあは楽させてやろう。でも今日くらいは息抜きするか。安達に電話をした。

「おい、ちょっと出ようぜ」「ダメだよ。今からデートだよ。クリスマス・イブだぜ、今日は」「何? クリスマス・イブだ、デートだ、お前、俺の知らないうちになんてことするんだよ。許さねえ」

「何言ってんだよ。最近つき合いが悪くなつたのはお前じゃないか。急に真面目に勉強なんか始めちゃって。らしくないぜ」「うるさい。俺は国立大学に入つて親孝行するんだよ」

「そうか、頑張りな」

冷たい奴だ。「お前も来るか?」くらいは言つても罰は当たらないだろうに。しかし、今日はクリスマス・イブか。気付かなかつた。俺も誰かとデートしたいよ。いや、香山彰子とデートしたいよ。

高校2年 1月11日

今日はまた何とかゼミの模試を受けた。前回よりできた。全教科偏差値5はアップしただろう。俺にしたら大健闘だ。でも、香山彰子はいなかつた。休憩時間にのぞける限りの教室をのぞいたがいかつた。がつかりした。

高校2年 1月13日

夕方、駅に向かつて歩いていると、誰かが後ろから声をかけて來た。香山彰子だつた。嬉しかつた。本当に。

「久しぶりね。元気だつた？」

「うん。また懲りもせず模試を受けたんだ。前よりずっと出来はいいはずだけど」

声が弾むのが自分でもわかつた。

「良かつたわね。頑張つたのね。今度は眠らなかつたんだ」

「ちゃんとすることがあつたから」

「2か月で変われるなんてすごいのね。わたしなんてもうあきらめ

ちやつた。上の女子大に行くことにしたわ」

「そりや、おめでとう。S女子大つて、俺から見たら十分過ぎるほど立派だと思うよ」

「ありがとう。でも、眞面目にしてないと推薦も取れないから大変よ」

「大丈夫でしょ。絶対入りなよ。S女子大に知り合いがいるなんて鼻が高いから」

「そんな風に言われると嬉しいな。あんまり気が進まなかつたのに、本当にすごいことみたい」

「すごいんだつて、間違いなく」

「ありがとう。岸和田君はどこに行きたいの？」

「まだよくわからないけど、教育学とか心理学とか勉強したい」

「しまつた、つい口から出任せを言つてしまつた」

「岸和田君ならきっと狙つたところに入れるわよ。何かすごく集中

力あります」

「頑張るよ。香山さんは何が勉強したいの？」

「わたしは英語。通訳になりたいの。あ。そうだ、チョコ食べる？」

「食べる。いつもチョコを持つてるんだね」

「好きなのよ。太るとイヤだけど。じゃ、この先で友達が待ってるから。さよなら」

「さよなら」

香山彰子はまたもチョココレートを残して去って行った。

しかし、思わず出た言葉が「教育か心理」とは・・・・。意外なところで進路つてのは決まるものなのかも知れない。

高校2年 1月14日

午後の授業が始まった。現国だ。牛尾つて先生のワケのわからない説明が苦痛だ。入試問題つてのは初めて目にする文章だろ？そのときにいかに読めるかが勝負で、今、牛尾の説明聞いたつて仕方がないじゃないか。聞くのはやめよう。

隣の席の安達に話しかける。

「安達よ、はつきり言つた方がいいのかな？」

「何をだよ」

「好きな子に『好きだ』つて」

「知るか！そんなこと…」

「それじゃ、お前達はどんな風にしてつき合い始めたんだよ。どうちから告白したんだよ」

「俺達は気付いたら何となく一緒にいたんだよ。」――からつき合いつて始めました、なんて区切りはないんだよ

そんなものなのかな。安達が続ける。

「お前はなあ、白黒はつきりつけたがるからなあ。きちんと告白した方がいいかもな。当たつて碎けて来いよ」

「当たつて砕けるのはお前達の勝手だが、少しは遠慮して話せ。今は一応国語の授業中だ」
牛尾が後ろに立っていた。

高校2年 1月16日

俺は決心した。あの子に、香山彰子に告白する。当たつて砕けてもいい、はつきりと心の内を伝える。

「安達、決心がついたぞ。告白する」

「そうか、頑張れ。で、いつどこにするんだ。見に行つてやるから教えるよ」

「・・・・・・決めてなかつた」

「電話で呼び出せよ」

「電話番号聞いてない」

「なにい、アホかお前は！偶然会うのを期待してんのか！」

「何も考えてなかつた。ただ、告白するのを決めただけで・・・・・」

安達はあきれかえつていた。自分でもかなりのアホだと気付いた。仕方がないから、今日の午後、S女子大学附属高校の前で彼女が出て来るのを待つていよう。

5時限目の途中で「気分が悪い」と早退して、S女子附属まで来るのは来たが、いつたいこの高校の授業終了はいつなんだ？4時前だといつのに生徒がいる気配がない。今日は休みか？出直そつ。

高校2年 1月22日

「S女子附属詣で」は今日で何日になるだろつ。各曜日の下校時刻が大体わかるまでになつた。自分とこの学校は早退ばかりだ。しか

し、香山彰子には会えない。毎日正門のところをウロウロしていると、さすがに変に思う者も出てくるだろう。それでも香山彰子に会いたい。会つて何とか思いを伝えなければ。だが、会えない。

今日もダメかと学校に背を向けたときに肩をたたかれた。こんなところで俺の肩をたたくのはあの人しかいない！喜んで振り返ると、知らない人々だった。その中のリーダーとおぼしき、見るからに賢そうな顔をした1人が口を開いた。

「あなた、ここのこと毎日いるみたいだけど、いったい何の用なの？気味悪がつて子もいるのよ。何もないんだつたら迷惑だからもう来ないで」

「きつい言葉だ。何かすごい女だなあ・・・・。」「はあ、すみません。でも、知り合いに会いたくて」「誰よ、知り合いつて」

「香山彰子つていうんだけど・・・・。」「香山彰子つて、あの香山彰子なの？」

「どの香山彰子かはよくわかりませんけどねえ」

「うそでしょ。彼女色んな男の子に声かけられるけど、全部無視してるわよ。あなたみたいな知り合いがいるわけないでしょ」

「て、言われてもなあ」

「彰子につきまとつてるだけなんでしょう。本人に聞けばすぐわかるからね。ほら、彰子が出て来た」

本當だ。久しぶりに彼女の姿を見る。嬉しい。この「すごいの」がいなければもっと嬉しいのに。

「彰子、この変なのあなたの知り合い？のわけないわよね」

「いいえ、知り合いよ。それに変なのじゃなくて、岸和田君よ」

横の「すごいの」は信じられないという顔をしたが、すぐに謝つてきた。

「ごめんなさい。つつきり変質者だと思つて」

失礼なことを平氣で言つ。

俺を囲んでいた「人々」は解散した。が、なんでこの「すごいの」

はいなくならないんだ?

「でも、あなた、彰子に何の用なのよ?」

「本人に直接言ひよ」

「じゃ、言えば」

「…………。あんたがいたら言いたいことも言えないんだよ」

香山彰子が割って入る。

「この人は吉村せつさん。わたしの親友なの。だから、一緒にいても全然気にしなくていいのよ。わたしのことは何でも知ってるんだから」

「そうなのかも知れないけど、俺の親友じゃないし」

「当たり前よ。あなたみたいなのと親友のはずがないでしょ」「頭に来る女だ。

「吉村さん、でしたよね。あんた、クラス委員長でしょ。でなけりや生徒会長とか」

「なんでわかるのよ。生徒会長よ」

嫌味で言つたのに、当たつてしまつた。

「だと思つた。絶対そういうタイプだよ」

「イヤな言い方。でも、わたしがいたら言えないことなんでしょ。彰子に『好きだ』と言いに来たとか?」

全てをぶち壊すような一言を平氣で口にしたぜ、この「す」この「いや、吉村せつは。しかし、ここでひるんだら次の機会がいつ来るかわからぬ。よし!」

「ああ、そうだよ。今から好きだつて言ひから、関係ないのはどうつか言つてよ」

香山彰子を見る。笑つている。可愛らしい口が開く。

「ええ、じゃ話ができるといひに行きましょ」

吉村せつといいくらか言葉を交わした後、香山彰子は俺を近くの公園に案内した。砂場では幼児がトンネルを作つて遊んでいる。母親がその傍らにたたずんでいる。落ち着いた公園だった。俺達は並ん

でベンチに座った。

「岸和田君、本当は何の用なの？」

砂場のトンネルが崩れた。

「…………いや、だから、好きだって言いに来たんだよ」

「冗談でしょ。もつせつはいないんだから本当のこと言つてもいいのよ」

「本当のことなの。何とかあなたに気持ちを伝えようと思つて。でも、連絡先も何もわからなくて。仕方がないから毎日正門のところで待つてたけど会えなくて。今日やつと会えたけど。…………なんか、あなたの友達に先に言われちゃつて。まあ、悪気はなかつたんだろうけど。ちょっと拍子抜けしちゃつて…………」

香山彰子はびっくりしたように俺を見ている。砂場ではトンネルの復旧作業が始まっている。

「すぐ間に抜けた告白になっちゃつたけど、俺、あなたが好きなんだ」

香山彰子は何も言わず俺から目をそらした。…………敗北だ。

「いいよ、何も言わなくとも。俺はただ自分の気持ちを伝えたかっただけだから。じゃ、俺帰るわ。もう来ないから。さよなら」

俺はベンチを立つて歩き始めた。砂場では母親までもがトンネル工事を始めたようだ。いいよな、幸せそうで。想像の中でそのトンネルを踏みつぶしてみた。…………むなしいだけだつた。

公園を出て夕日に向かって歩いていると、何かサバサバしてきた。短い片想いだつたがいいや。当たつてみて碎けたんだから。太陽がなくなるわけじゃなし。でも、この後だろうな。駅や電車の中で幸せそうな人を見るとな落ち込むだろうな。その後で呪つたりするかも知れない、その幸せそうな連中を。多分今夜は眠れないぜ。中学校の卒業前に一瞬つき合つてた麻由美ちゃんに電話でもしてみようか。手紙でも書いてみようか。安達に話しても笑われるだけだろうな。いいよな、あいつは彼女とうまくいってて。そうだ、まずあいつを呪つてやろう。許してくれるはずだ。友達だもんな。

と、後ろから足音が追いかけてきた。

「待つて！」

香山彰子だ。

「ちょっと待つて」

息を切らして走つて来た。

「あのね、岸和田君、もう一度言つてくれる？」

「何を？」

「もう、意地悪しないで。もう一度言つて欲しいの」

「からかうなよ」

「違うのよ。わたし、何かびっくりしちやつて。それからボーッとして、気付いたらいないんだもの。必死で追いかけて来たわよ」

「それじゃ・・・・・・

「わたしだつてキチンと返事したいわよ。岸和田君も返事を聞きたいでしょ」

「わかった」

深呼吸をした後言つた。

「香山彰子さん、あなたが好きです。つき合つてもうえませんか」

「はい！」

彼女がはつきりした声でそう言つた。その後笑つた。俺はどうしていいかわからず、万歳をしながらソリソリ辺りを跳ねていた（ようだ）。

駅まで並んで歩いた。嬉しかつた。が、胸がドキドキした。地面がフワフワしてた。

「俺、模擬試験で会つたときから気になつてた。その後また駅で出会えて本当に嬉しかつた」

「わたしも。今まで会つたことがないタイプの人だつたし、面白いんだけど、それだけじゃなくて。何かあるのよ」

「いや、特別なものは何も。顔も頭も良くないし、背も高くないし・

・・・・・

「違うのよ。ずっと持つてた気持ち、って言つか予感なの」

「予感?」

「そう、わたしね、ずっと予感がしてたの。いつか誰かに会えて、その誰かと気持ちが通じるだろ?って。その誰かなのよ、あなたはきっと。わたしと同じような人」

そして、香山恭子はひとり言みたまにつぶやいた。

「わたし達、どうして出会ったのかな?」

「さあ」

「でも、会えて良かったわ」

冬の夕方だというのに、世の中が輝いて見えた。

高校2年 1月24日

つき合いで始めてはつきりしたのだが、彰子はハーフだった。母親がイギリスの方らしい。色が白いのもよくわかる。彰子は『冗談っぽく言ひ。

「父親の血がほとんどみたい。もうちょっと母親の血が濃ければ、国際的な顔立ちになれてたのに」

「このままで十分だよ。いや、このままがいいー!」

言いたかったが、言えなかつた。

高校2年 1月26日

学校帰り、彰子と待ち合わせた場所に行つたら、あの「すうい生徒会長」が彰子と一緒にいた。吉村せつだ。

「こんにちは。岸和田君。初めまして、じゃないわよね。あなた、よく彰子を落としたわね。この子は今のところ誰ともつき合つ気はないつて言つてたのに。信じられないわ。あなたがねえ・・・・・・

「

相変わらず失礼な女だ。

「そりやども。自分でも信じられないくらいだから、あんたが信じられなくても仕方ありませんねえ」

「そうでしょ」

「やっぱり失礼だ。

「せつ、わたしが好きなんだからよその人はどうでもいいのよ。ね

つ、浩君」

彰子のおどけに吉村せつは声をあげて笑った。

吉村せつは、口は悪いがすぐさつぱりした人だった。

「最初はね、みんなわたしのことオッカナイと思うみたい。思つたことはポンポンしゃべるしね。でも、それだけなのよ。腹に隠すつてことができないのよ。でね・・・・・」

面白そうに話す吉村せつ。彰子とはタイプが異なるが、実は結構美人だと思つた。

「・・・・・それで、彰子が話してくれるわけ、模試会場で出会つたおかしな人のこと。帰りの電車でも一緒にになって、そのときはまともな人に見えたんだつて。吊革にもつかまらずに、電車が揺れても平然とバランス取つて立つてた、つて。どこか遠い目をしてるの。『まさか恋?』つてきくと『よくわからないけど、また会いたい』つて。それつて完全に恋じやない。『それが恋なのよ』つて言つても『違うわよ』つて。うそつきでしょ。まさか、その人があなただなんて・・・・・」

このよくしゃべる女の子は、将来医者になるのだという。S女子大に医学部はないので、とにかく勉強するしかないそうだ。

「じゃ、岸和田君。わたし塾に行くからこれで。あ、なんか色々言つちゃつたけど氣を悪くしないでね。わたし、あなたのこと結構気に入つたわよ。彰子をよろしくね。彰子、また明日ね

吉村せつはしゃべるだけしゃべつて去つて行つた。でも、俺も彼女のこと気に入つていた。彰子が尋ねてきた。

「浩君、せつっていい子でしょ?」

「ああ、きかなくても俺の知りたいこと勝手に話して、笑わせてくれて、何か気持ちがいいよ」

「違うわよ。せつが『勝手に』話すわけがないでしょ」

「ううか。優しい、本当に頭の良い人だつたんだ。」

高校2年 2月2日

「そんなに見ないでよ」

向き合って話をしていると、突然彰子が言った。

「え、何のこと?」

「わたしね、右と左の目の色が違うのよ」

「本当に?全然気が付かなかつた。よく見せて」

彰子は初めは渋つたが結局見せてくれた。

「本当だ。右目は茶色で、左目が何色だらう、灰色みたいな色だ」

「そうなのよ。イヤなの」

「視力は?よく見えないとか、そんなことないんでしょ?」

「視力そのものに異常はないんだけど·····」

「えつ、色覚に異常があるとか?」

「つうん。でも、イヤなのよ。左右の目の色が違うなんて」

「カツコいいよ!絶対に。俺、その色、左目の方、好きだよ。俺は元々灰色が好きだけど、もつと好きになつた」

「無理しなくていいのに」

そういうながら、彰子は嬉しそうだった。

高校2年 2月14日

彰子がチョコレートをくれた。

「いつも行くケーキ屋さんのなの。そこの中、わたし好きななんだけど、どうかな?口に合つといいんだけど」

「絶対おいしい」

「まだ食べてないのに？」

「彰子のくれるチヨコはいつもおいしいから。今日に限つてまよいなんてことないよ」

「そうよね、いつもの3倍の値段で量は3分の1なんだから、おいしくなかつたら一度と行かないわよ」

「でも、彰子もチヨコが好きだよなあ」

「うん、割とうるさい方よ」

「じゃ、一緒に食べよう。実は食べたいんだろ？」

「実はね」

彰子は笑つた。広場の木の下に座り、包みを開けると、おいしいそうな生チヨコが出て来た。

「太りたくないからあんまり食べられないの。だから、おいしいチヨコレートを少しだけでいいの」

俺は1つ口に入れた。

「こりやおいしいや。こんなおいしいのは初めてだ」

「大げさね。・・・・・あら、ホント、いつものよりずっとおいしくわ」

「これで行きつけの店を替えなくともよくなつたね」

「そうね」

本当においしそうチヨコレートだつた。

高校2年 3月10日

初めて彰子が家族について詳しく話してくれた。

「ウチはね、女ばかり3人なの。母と妹とわたし」

「こう彰子は話しか始めた。

彰子の父親、香山洋平は優秀なエンジニアだつた。誰でも名前を知つている企業に勤めていた。その企業のイギリス進出時、香山洋平は技術面の責任者として妻子を日本に残し単身イギリスに赴いた。そして、後に彰子たちの母親となるマリアと出会い恋に落ちた。熱

烈な恋愛だった。香山洋平は妻子を捨て、香山の「家」を捨て、会社も捨てた。マリアも親・兄弟を捨て、祖国を捨てた。そして、日本で2人の生活が始まり、彰子と妹の恭子が生まれた。幸せな暮らしだったそうだ。

しかし、彰子が中学に上がった年、香山洋平は病気で亡くなつた。残されたマリアは、英会話学校の講師や翻訳の仕事をして彰子たちを育てている。「香山家」やイギリスの実家の援助は一切受けずに。そして、彰子、恭子が一人前になるであろう6、7年後をめどに、マリアはイギリスに帰ることにしているのだという。「一度は捨てた祖国だけど、やっぱり祖国の土になりたい」のだそうだ。そして、彰子と恭子には「あなた達の祖国は日本よ」と言い続け、日本語で育ててきたのだという。

彰子と恭子は、そんな父親と母親を持つているのだ。

「母は口にはしないけど、苦労してわたし達を育ててくれたの。イギリスに帰ればそれなりの『お姫様』で苦労せずに済んだはずなのに・・・・。日本にこだわるのはやっぱり父を愛しているからなんだらうなつて。父の国で、父と同じ国籍でわたし達を一人前にしたかつたのね」

「すごいお母さんだね」

「ありがとう。わたしもそう思つ。それとね、母にそこまで思わせる父もすごい人だったんだなつて」

彰子の考え方が少しは理解できたような気がしたし、彰子が優しい、しつかりした女の子だと改めて確認できて嬉しかつた。しかし、少し打ちのめされたような気もした。俺は、両親とか、家とか、国籍とか自分のこととして真剣に考えたことはなかつた。全て一般論で済ませてきた。しかし、目の前にいる恋人は、生まれたときからそんなものを当たり前のように背負つて生きてきたのだ。

初めて彰子の家に行つた。やつぱり緊張した。

彰子の母親、マリアはチョコレートケーキを焼いてくれた。1歳年下の妹の恭子は、どこからかアルバムを引っ張り出して来て見せてくれた。2人とも美人で優しそうだった。

内実は俺にはわからないが、涙が出るくらいに仲の良い、幸せそうな家族だった。

高校3年になる前の春休み 4月5日

彰子と歩いていると急に雨が降ってきた。それもすゞしい勢いで。当然傘などない。近くの公衆電話ボックスを借りることにした。狭いボックスの中に2人肩を寄せ合つて入つていた。

「いきなり降つてきたね」

「うん、びっくりしたわ。すごい雨ね」

「天気予報では雨の『あ』の字も出てこなかつたぜ。頭に来るな。あ、ちょっと弱くなつてきた。もうすぐ止むよ」

「でも、わたし、もう少し雨に降つていて欲しいな……」
もしかしたら、こういうさりげない言葉にこそ、実は、幸せつてのがぎつしり詰まつてゐるのかも知れない。

高校3年 4月6日

今年も安達と同じクラスだ。

高校3年 4月8日

彰子が路上でアクセサリーを売つてゐる外国人さんと（多分）英語で話しか始めた。もちろん俺にはちんぷんかんぷんだ。

「この人オランダから來てるんだって」

「へえ」

彰子はまたそのオランダ人と話し始める。

「ねえ、指輪買つて」

やつぱりそう来たか。俺にも経済状況といつものがあるのだが・・・

・・・・。

「どれがいいの？」

「これ！ 幸せが永遠に続くよ！」祈つてあるんだって

「ウソっぽい」

「いいじゃない。気に入ったの」

結局、鳥の羽をかたどった銀の指輪を、持ち合わせのほとんど全てをはたいて買つてしまつた。しかも、彰子の左手の薬指にはめてやることになつた。ちょっと、いや、かなり照れた。

「ありがとう。大切にする。わたしの幸せの象徴よ。いつまでも、死んだ後も幸せが続くのよ」

「大げさな」

彰子は本当に嬉しそうだつた。

これが彰子への初めての贈り物だつた。

高校3年 4月9日

決めた。俺は国立の東京G大学に行く。教師になつて体育や国語を教える。安達に言つと、

「お前が行くつていうのは勝手だが、G大が断ると思うぜ」
「だどさ。偉そうに。だが、実際、遊んでばかりの安達が、勉強ばかり？の俺より出来がいいんだからイヤになるよな。俺も遊んでみようか。

高校3年 4月10日

安達が、あの安達が、予備校の現役生コースに通うといつ。
「M大を受けようと思つてよ。今までも何とかなると思つたが、

念のために

「M 大か。頑張れよ」

「ああ。お前も一緒に行かないか？予備校」

「俺はいいよ。高校に入るときも自分で何とかしたし。大学はそんなに甘くはないだろうが、今更人様のやり方では勉強できない。俺は俺のやり方でいくよ」

「そうか。お前はそれで伸びてるもんな。それでいいかもな」「うん、行き詰つたら考えるよ」

「馬鹿、行き詰つたときには遅いんだって」

「じゃ、行き詰らないよ」

高校3年 4月19日

俺は山羊座の生まれ、彰子は乙女座の生まれ。

「山羊座と乙女座つて相性がいいのよ」

さすが女の子だ。星座にはうるさいみたいだ。

「だけど、確率的には12人に1人は同じ星座の生まれだろ？アテになるのかな？」

「さあねえ。確かに浩は全然山羊座には思えないわねえ

「だろつ！」

「威張ることじゃないわよ。でも、わたし達は星座を越えようね」

「だつて、相性がいいんだろ？」

「山羊座と乙女座じゃなくて、ヒロシとアキコの方がいいのよ」

何のことだかわかんない。が、幸せだけは感じた。

高校3年 5月8日

遠足だ。現地集合、現地解散。朝、出席を取つた後、先生達もあきらめているのだろう、

「時間になつたら勝手に引き上げる。じゃあな

と帰つて行つた。毎年、後はもう好き放題。家に帰る者、パチンコ屋の開店を待つ者、その場で酒盛りを始める者、雀荘に行く者、何をしてるかわからない者。今年は俺も安達も家に帰ることにした。帰りの電車で担任と同じ車両に乗り合わせた。

「おう、お前らも」帰還か？ま、他人様に迷惑かけないだけ立派だな

だそうだ。わかつてらつしやる。

高校3年 6月1日

6月だ。センター試験まであと7か月ちよつとだ。1日1点ずつ得点をあげる努力をして、およそ200点ほど得点アップ。さて、今、何点くらい取れるのだろう。国語がほぼ120点、英語がほぼ100点・・・・。つーん、1日1点では間に合わないかも知れない。

高校3年 6月27日

期末試験が始まった。学校の教科書はほとんど勉強せずに試験を受けることになる。もう学校の勉強にはかまつていられないのだ。赤点をもらわなければ良しとしよう。

高校3年 7月9日

体育で水泳の授業があった。プールで好き勝手に泳ぐだけだったが。

授業が終わつて更衣室に入ると人だかりができていた。何事だ、とのぞき込むと、人だかりの真ん中にパンツがある。しかもかなり汚れている。誰のパンツだ？ちょっと恥ずかしいよな。たとえ持ち主でも名乗れないよな。皆と一緒に「汚ねえな」とか「誰のだよ」

とか言つておくしかないよな。気の毒に。俺じゃなくて良かったよ。

そのとき、松本が入つて來た。

「どうしたんだよ？」

人だかりに参加する松本。次の瞬間、

「あ、俺のパンツだ」

事もなくパンツを拾つて、さつさと着替えを始めた。

この日、「松本はすごい奴だ」といつ噂が学校中を駆け巡つた。

高校3年 7月23日

夏休みだが勉強ばかり。親切なことに学校でも補習授業をしてくれるし、予備校や塾に行かなくてもいいよな、なんて、お気楽なのは俺だけだった。学校の補習が終わつた後、皆どこかの予備校や塾に通つているとのこと。しまつた。夏期講習だけでも受講すべきだつたか。

高校3年 8月13日

家族は皆、母の実家に行つてしまつた。墓参りだそつだ。5日ほどで帰つてくるらしい。俺は受験勉強でそれどころじゃない。でも、何で「盆」なんてあるんだろう。別に盆でなくとも気が向いたときに墓参りすりやいいじゃないか。まあ、俺が死んでも、墓になんて参つてもらわなくていい。それより、俺の写真を見て涙の一筋でも流してくれるとか、にっこり微笑んでくれるとか、そつちの方がうれしいぜ、彰子。ん？

高校3年 8月31日

夏休みが終わつたよ。確かに勉強はしたけど、いつたいどれくらい差を縮めることができたんだろうか。もしかしたら差が開いてた

りして。

高校3年 9月3日

夕方、彰子と歩いてると、繁華街の端っこにある公園のトイレの陰で、男女の一人連れが4人の若い男に囲まれているのが目にとまつた。彰子は気付いたどうか。気付いてないといいけど。何も見なかつことにして通り過ぎたい。が、彰子が立ち止まつた。あつちやー、気付いたのか。

「ねえ、あれ

「うん、囲まれてるね」

「どうする?」

「どうするつて……

「助けてあげないの?」

そう言われてもなあ。俺は決して正義の味方じゃないし、面倒に巻き込まれるのはごめんだ。殴られたら痛いし。でも、仕方ないよなあ、彰子が言うんじや。

「わかつたよ。ちょっと行つてくるよ。俺が時間かせいでの間に警察呼んで来てくれよ。なるべく早くな

「うん。手を出しちゃダメよ」

普通は「気をつけてね」だろう。彰子は走つて行つた。

だが、馬鹿なカツブルだよなあ。この物騒な時代に物騒な街を歩くんなら「何があればどうする」って決めておけよ。2人仲良く囲まれることはないだろう。俺と彰子は決めてるぜ。まず、やり過ごす。でなきや、2人で逃げる。ダメなら彰子1人でも逃げる。俺は何とか彰子を逃がす。そして。彰子は人を呼ぶ。1人で身軽になつた俺は逃げることを考える。ダメなら人が来るまでなるべく時間をかせぐ。それでもダメなら一戦交える。で、落ち合つ場所（俺の家か、彰子の家か近い方）に後で行く。2人とも逃げ切れなかつたら、先制攻撃をかまし、隙ができたところで彰子を逃がす。ダメなら一

戦交える。「な」と「い」になつてゐる。まあ、結局、最後は一戦交えるんだけど。

「ねえ、何してるんですか?」

「あー、ダアレだよお、オメエ?」

「通りがかりの者ですが

「ザケンなよ。カンケエネエンなら、イケよ

「いや、そこの2人が可哀想かなつて思つて」

「ナニイー、カワイそーだあ。オメエもカワイそーうにしてヤロー
ウか?」「うあ!」

こいつ、何しゃべつても「漢字」があるように聞こえないから不思議なんだよなあ。

「勘弁してくださいよ」

「うルセエんだよお、おラア、オメエもよ、カネだせ、カネ

「イヤだね」

「ナニイー? やるのか?」

「やるね、俺は」

「アーネーッ、ナンだつてえ、ヤアルー?」

と言いながら、火のついた煙草を投げつけやがつた。もつ我慢はやめた。

「シャベクつてるヒマはないんだよお、オレにはあ

いかん、俺まで漢字なしのしゃべりになつた、と、思いながらも手が出ていた。いや、足だ。「漢字なし兄ちゃん」の股間を思いつきり蹴り上げていた。

「グエイーッ」

兄ちゃんは変なうめき声をあげてうずくまつた。うめき声まで「漢字なし」だ。あ、普通そつか。後はもう無茶苦茶だ。空手の心得があるつたつて、空手の試合をしてるわけじゃない。喧嘩なんだ。やり始めたからには、相手を叩きのめすか戦意を喪失させるかどちらかを目指す。目指すほどのことでもないけど。そのためには武器を持つのが一番だ。気付いたら、自転車のハンドルを持つてグルグル

ルと振り回していた。変な兄ちゃん達は逃げて行つた。全然骨がない。もちろんないほうが助かる。最初に始末した兄ちゃんが動けずにはいる。俺も目が回つて座り込んだ。カツプルは啞然として突っ立つていて。もう安心だ。

「行つちゃいましたね」

声をかけると、男の方が言った。

「はい、でも、大丈夫ですかね、その人？」

「漢字なし」の心配するより俺の心配しろよ。と、そのとき、警官が走つてくるのが見えた。遅いんだよ。もう手を出し終えた後だよ。かなり後ろに彰子も見える。色々と面倒だから、

「じゃ、これで」

カツプルに声をかけ、ふらつきながら走つてその場を後にした。公園をぐるっと迂回して彰子のところに行つたが、何故か警官が俺を追つかけてくる。そりやないだらつ。

「お前も走れ」

彰子と一緒に逃げた。

「何で逃げるのよ？」

走りながら彰子が尋ねる。

「警察は面倒だから」

本当に面倒なのだ。たとえ「正義の味方」だつたとしても「ちょっとお話を」で2時間は覚悟しなきゃならない。

どこかの店に走り込んでよつやくやり過ごした。人助けも大変だよ。

高校3年 9月4日

朝、目が覚めると腰が異常に痛い。昨日の喧嘩とその後のランニングが腰に来てる。そうだ、俺は腰が悪い人だつたんだ。何とか我慢して授業だけは受け、学校帰りに病院に行つた。「一週間ほど入院」だそつだ。慣れない人助けなんてするもんじやない。

高校3年 9月5日

夕方、彰子とせつが花を持って見舞いに来てくれた。

「ごめんね、わたしが要らないこと言つたばかりに・・・・」
「いいんだよ、彰子。お前のせいじゃない。

夕食を食べていると安達が来た。

「よお、エロ本持つて来てやつたぜ」

「いいんだよ、安達。お前は来なくとも。

高校3年 9月7日

退院。「まだいろ」と医者に言われたが、駄々をこねて退院。

高校3年 9月9日

彰子の誕生日だ。俺より早く18歳になる。おめでとう。

高校3年 9月18日

体育祭だ。俺は走るのも殴り合ひするのも得意だから、リレー、
棒倒し、騎馬戦と引っ張りだこだ。腰も一応治ったし、走る方は別
にどうでもいいんだけど、棒倒しと騎馬戦の前に、

「岸和田よ、こいつを頼むぜ」

色々な奴等が名前を書いた紙を俺に渡してくる。いつたい何を頼
まれてるんだ?俺は、わかつてたけど。今日は「走る暴力」になつ
てやるぜ。でも、相手が敵方の奴なら期待にこたえられるが、味方
の名前が書いてあっても困るよな。手の出しあうがないじゃないか。

高校3年 10月15日

同級生の大富は、通学途中に駅でよく見かける女の子に想い中だ。F学院の子だ。

「ただ見てるだけじゃどうにもこりにもなんないぜ。早くテートに誘えよ。そうだ、うちの文化祭に誘えよ」

安達にそそのかされて本当に文化祭に誘つてしまつた。

「…………じゃ、文化祭の日、正午に正門で待つてます」

そう言つたらその子はうなずいた、と大喜びしていた大富。うなずいたんじゃなくて、うつむいたんじゃないの？ 本當かな、俺と彰子じゃあるまいし、そいつ簡単につましくもんじゃないだろう。

高校3年 10月20日

文化祭だ。冷たい雨が降つてゐる。まあ、体育祭じゃないし構わないのだが、正門のところに立ちつくす大富が哀れだ。

高校3年 10月22日

朝、駅で安達を待つてゐると大富が現れた。かと思うと、ある女の子のところに走り寄つた。「ああ、あの子か」と思いながら見ていると、いつの間にか安達が俺の横にいて、

「面白いことになりそうだな」

なんて言つてゐる。と、女の子は小走りに改札へと向かう。大富がその後を追つ。

「おい、行くぜ！」

安達も走り始める。行くのは勝手だが、そつちは俺たちの学校に行く路線じゃないだろ。俺は行かないよ。

安達が学校に現れたのは3时限が終わつたときだつた。

「お前、今まで何してたんだよ

「決まつてんじゃん、大富の後を追つてたんだよ」

「で、その大富は？」

「あいつ、警察に連れてかれたぜ」

「は？」

「あの馬鹿、電車の中で『なんで来てくれなかつたんですか。なんで逃げるんですか』とか、あの子に言つてんの。それだけならまだしも、あの子の降りた駅で一緒に降りて後をついていくんだな」

お前も結果的に同じことしてたんだろうよ、安達。

「で、あの子が走り出したら大富も走り出して、『痴漢です！』なんて叫ばれて。で、近くのサラリーマン達に取り押さえられても、警官が2人来てパトカーで連れて行かれた」

「大富は痴漢まではしてないだろ。お前、見てたんなら誤解だつて言つてやりやいいじやないか」

「やなこつた。面倒だ」

大富はこの日学校に来なかつた。

高校3年 10月23日

大富が学校に來た。何となく一やついてる。可哀想に、自嘲の笑いを浮かべるしかないんだろうな。

「昨日は大変だつたらしいな。痴漢呼ばわりされたつて」

声をかけると、

「おお、それが、痴漢が誤解だとわかつてさ、警察を出たといひで、すごく可愛い子に出会つたんだよ。思いつきり目が合つてさ、いい感じなんだよ」

安達がいきなり現れて口をはさむ。

「やつたじやん。早くデートに誘えよ」「みつこつと付き合つのはやめようか。

高校3年 11月4日

無茶苦茶勉強してる。本当に俺か？

高校3年 11月22日

模試の結果が出た。まづい。

高校3年 12月3日

彰子がS女子大学の英文科に推薦で合格した。おめでとう。彰子はすごく喜んでいた。夢に一步近づいたのだ。本当におめでとう。だが、俺にはすごいプレッシャーがかかる。彰子は大学生、俺は浪人ではちょっと惨めだ。何としてもG大に合格する。2人で大学生になるんだ。

高校3年 12月5日

受験が終わるまで彰子と会わない。本当は毎日でも会いたい。でも、大学進学が決まって遠慮なく残りの高校生活を楽しんでいいはずの彰子が、これから受験する俺に色々と気を使うのは目に見える。気を使っているのがわからないようにさりげなく気を使ってくれるとは思うが、気の毒だ。電話も週に1度きりにしようと。

高校3年 12月6日

彰子に昨日の決心を伝えた。色々言わなくても理解してくれた。が、ちょっと悲しそうだった。俺はその様子が嬉しくもあり、可哀想でもあり、複雑な気持ちだった。しかし、一旦勉強に打ち込むと決めたんだ。意地でもG大に受かる。2人で大学生になるんだ。

高校3年 1月1日

いつの間にか年が明けていた。

とりあえずおめでたいが、センター試験まであと2週間だ。畜生、時間がないぜ。いや、何とかする。意地でもG大に受かる。2人で大学生になるんだ。

高校3年 1月16日

センター試験が終わった。やるだけのことはやつたぜ。だが、俺の「やるだけやつた」が通じるとは限らないのがつらい。しかし、絶対にG大に出願するぞ。

高校3年 2月27日

終わった。俺の大学受験が終わった。もう一度としたくない。

彰子に報告した。彰子はねぎらいの言葉をかけてくれた。結果はどうあれ、明日から彰子と会える！

高校3年 2月28日

彰子と会う。3か月ぶりだ。嬉しかった。楽しかった。別れ際に、頭の片隅にある不安を口にした。

「ねえ、もし俺がG大に落ちて浪人することになつたらどうする?」「『どうする?』って、どうもしないわよ。また1年は会う機会が少なくなるけど、今まで通りあなたのが好きよ。ううん、頑張つてる姿を見たらもつと好きになるかも」

「本当に?」

「本当よ。でもね、大丈夫よ。受かってるって。あれだけ頑張った

「んだから」

「元々頭のいい奴とか、俺より頑張った奴なんて掃いて捨てるほどいると思つぜ」

「いいんじゃない、それはそれで。ほかのことなんて知らない。わたしにはあなたのことどがわかれば十分よ」

もしかしたら俺は、安心して浪人していいのかも知れない。きっと、かなり恵まれた浪人になれる。

高校3年 3月9日

合格発表。

「！」 だぜ。

これで彰子と一緒に大学生。
やつたぜ！ ザマミロー！

高校卒業後の春 3月11日

吉村せつはT医大に合格していた。安達も安達の彼女もともにM大に合格していた。おめでたいことだ。で、みんなで合格祝いをすることになった。恭子も一緒にだった。

高校時代から気ままに遊んでいた安達の案内で店に入り、まずシンパンで乾杯した。その後は赤ワインだ。「初心者のために飲みやすいものをオーダーした」と安達が偉そうに言うだけあって、飲みやすいおいしいワインだった。からかどうか知らないが、皆おいしそうに何杯も飲んでいる。安達は顔がひきつっている。俺のところに来てこんなことを言つ。

「知らないぜ。最初はおいしいだけだろうが、すぐに酔いが回つてとんでもないことになるぞ。大体、お前らは酒なんて飲み慣れてない

いんだからな・・・・・。それに、ここには『店』なんだからな。お金つてものを払わなきやならないんだぜ。おい、聞いてんのか「そりやそりや。とんでもないことする奴が出て来た上にお金足りません、じゃ困るよな。だから足立クン、君のお知り合いの店を使つてるんだろ。よろしくね」

「何言い出すんだよ、まったく」

安達の心配をよそに楽しく飲んで食べた。安達は「だから遊び慣れてない奴等と一緒にいたいなんだよ」とかなんとかブツブツ言つていたが、酒が進むにつれ絶好調で盛り上げてくれた。やつぱりいい奴だ。

そして、もう一人、絶好調の人がいた。恭子だ。自分が年下ということもあつたのだろう、あまり飲んでいなかつた。しかし、1時間もすると、誰彼構わずからんでいる。彰子には「一人樂してずるうーい。みんながギリギリしてるときに」、サツて推薦、サツサツて先に推薦、「せつには「あんた、第一印象で患者に嫌われちゃ医者はおしまいだよ」、安達と安達の彼女には「きやー、お似合い！あじせことカタツムリくらーお似合い！桑の葉とカイコくらーお似合い！」、俺に対しては「頭の中で何かブーンつていつたの、ブーンて」と言いながら頬をつねる始末。彰子も最初はたしなめていたがもうあきらめている。しかし、何故か憎めない。皆もそう思つているのだろう。悪態をつかれながらも笑つてゐる。

電車は使わずに歩いて香山家に向かつた。俺は恭子をおんぶしている。

「恭子がこんなに酒癖が悪いとは知らなかつたわ」

「彰子がため息をつきながら言つ」

「楽しくていいんぢやない」

「今回はね。でも、いつもわたしゃヒロシがそばにひついてるわけじゃないし。この先心配だわ」

確かにそうだ。俺の背中で眠つてゐる恭子。完全に安らいでいる。

「ヒロシ、絶対に左を向いちゃダメよ」

彰子が急に叫ぶ。

「え、何で？」

「今左向いたら、恭子とキスしちゃうから。もう、大体どうしてわたくしより先に恭子に背中を貸すのよ！わたし、おんぶしてもういたことまだないわよ」

俺は少し嬉しくなった。

「灰色の星」

彰子がつぶやく。

「え？」

「ヒロシのことは、イメージなんだけど『灰色の星』なの」

「何で灰色なんだよ？いつも灰色の服を着てるからか？」

「それもあるわ」

彰子は続ける。

「いつでも北の空に輝いてる。でも、みんなには見えないの。だって、灰色なんだから。わたしにしか見えないの」

「・・・・・」

「いつかは明るく輝く。みんなも気付く。でも今はわたしだけの星。だから『灰色の星』」

「何で北の空なんだよ？」

「何となくね。でも、北ってストイックな感じがするでしょ」

「お前、何か俺のこと誤解してないかい？」

「うん、してるかもね。でも、いいのよ」

北の空に輝く「灰色の星」か。俺は「星」なんてたいそうなものじゃない。せいぜい「灰色の虫」だ。虫が星になるのは大変だ。だが、とりあえず、虫なりに飛んでみよう。

大学1年 4月6日

大学生だ。

昔は大学生になつた自分なんて想像もできなかつたぞ。でも大学生だ。そういうや、ヒゲを剃つてる自分なんて幼い頃は想像もしたことないのに、いつの間にか、当たり前のように毎朝ヒゲを剃つてゐるもんな。それと同じか。大きくなつたもんだ。

両親に感謝。

大学1年 4月9日

俺は教員養成系の大学に入つたのだが、入りたくて入つたのだが、いいんだろうか？俺みたいな奴でも4年間いれば教員の免許がもらえてしまうのだ。俺が言うのも変だが、教員も、医師や薬剤師みたいに最終的には国家試験で資格を与えるようにした方がいいんじゃないかい？何となくそう思つた。

大学1年 4月15日

S女子大の近くで彰子と待ち合わせた。さすがにS女子大、あの子も美人、この子も可愛い、っていう学生ばかり（ということにしておこう）。が、彰子の輝きはちょっと違うんだな。すぐにわかる。周りから見たら俺みたいなのは「馬鹿な男」なんだろうな。

でも、彰子と並んで歩いていると、男達が皆彰子を見ているのがわかる。すれ違つた後振り返る奴もいるぞ。俺も振り返つたからわかるけど。目がそいつと合つたし。

大学生になつて彰子はいつそうきれいになつた。

俺はず「J」へ幸せ。で、大馬鹿野郎かも。

大学1年 4月23日

恭子に勉強を教えることになった。「教員養成系の学部なんだから高校生くらい教えられるだろ?」といつマリアの無茶を聞く形になつた。

「英語はね、まあまあなのよ。いやとなればわたしでも彰子でも教えられるし。でも、国語と社会が全然ダメなのよ。お願ひ、見てやつて」

「僕は全然頭良くないし、自分勝手な勉強法しかしてこなかつたので他人を教える自信はありません」

「その勝手な勉強法がいいのよ。実際にそれでG大に受かつてるんだし」

今ひとつ氣乗りはしなかつたが、彰子と会つ機会も増えるし、と引き受けてしまった。

恭子も彰子がそつだつたように私立の高校に通つてゐるが、違うのは上に大学がないということだ。進学するには受験勉強するしかないのだ。

「恭子、お前どこの大学に行くんだよ」

「R大かH大」

「英語だけで受かるつもりか?」

「だから、他の教科も勉強し始めたんじゃない。志望校に通してよ。

落ちたら恨むからね。責任とつてよ」

「無茶言つなよ。俺は魔法使いじゃない。お前が勉強して合格するの」

先が思ひやられる。

大学1年 5月5日

彰子がイギリスに留学することが決まった。できるだけ早い時期に、英語だけの環境に身を置きたいと言っていたが、まさかこんなに早いとは。

せっかく2人で大学生になつたといつたのに、彰子は夏からイギリスに行つてしまつ。向こうの大学は9月から始まるが、その前に一応語学研修を受けておくといつたのだ。

寂しいが、彰子が夢に近づくのは嬉しい。

行つて来い。でも、俺のところに帰つて来いよ。

大学1年 6月18日

恭子の国語、特に古文が驚異的な伸びを見せた。助動詞の活用を無理やり覚えさせただけなのだが、活用がある全ての品詞に応用する器用さが恭子にはあつたのだ。驚きだ。

一番驚いていたのは恭子本人だつた。模試の結果をまとめたデータ表を嬉しそうに見せてくれた。いいと言つのに「何かお礼するから」と聞かなかつた。

大学1年 7月8日

この2、3日ずっと雨だ。

勉強しながら恭子がつぶやく。

「梅雨なのね」

「ああ、うつとうしこな」

「でも、もつと雨が降らないかな。何もかも洗い流すくらいに」

「そりや、洪水だろ?」

「洪水でも何でもいいわよ」

「お前、何か悩んでるのか?」

「悩みくらいあるわよ」

「俺は聞きたくないから、わざと勉強しようぜ」

「するわよ

大学1年 7月23日

明後日、彰子が日本を離れる。

「離ればなれだな」

「うん。 だけど手紙だつて書くし、電話だつてするわ

「ああ。 だが、一緒にいられない。 彰子は平氣か?」

「平氣じやない。 つらい。 ・・・・『じめんね、わたしのワガマ

マで・・・・・」

彰子は涙ぐんだ。

「悪かった。俺が変なこと言つた。謝る」

「つうん、いいの」

「心配するな。 ビニにこようが俺は俺、彰子は彰子。 俺達は俺達だ

大学1年 7月24日

恭子の勉強を見た後、夕食を一緒にと、マリアが声をかけてくれた。明日は彰子がイギリスへ発つ。しばらくは食事を共にすることもない。家族水入らずを邪魔するのも悪いと思つたが、お言葉に甘えさせてもらつた。

夕食後、お礼を言つて香山家を出た。彰子が門の外まで送つてくれた。

「泣いちゃうから、明日は見送りに来ないでね

「ああ、行かない。でも、誰か送つてくれるのか?」

「母と妹とせつが空港まで来てくれるの」

「その3人が一緒じや、俺がいなくても自然に泣けてくるだろ」

「いいえ、泣かないわ

「絶対泣くつて」

「泣きません。 例えヒロシがいても泣きません

「さつきといつてることが違うぜ」

「今決めたの、泣かないつて」

「じゃ、俺も行く」

「いいえ、来ないで。 来たら泣くわよ」

「行かないよ」

「それじゃ、お休み」

「お休み。ちゃんと帰つて来いよ、彰子」

「お休み」の、そして「行つてらっしゃい」のキスをした。

大学1年 7月25日

じつとしていられなくなつた。空港に来てしまつた。彰子たちを見つけた。出て行くタイミングがわからず柱の陰から見ていた。4人で何か話していた。

出て行こうか、よそうか、迷つてているうちに彰子と田が合つてしまつた。ほかの3人は俺に背を向けているから気付いていないようだ。

俺は右手で拳を作つて突き上げた。彰子も3人の相手をしながら右手を上げた。が、すぐに両手で顔を覆つてつむいてしまつた。マリアが、肩を抱きながらハンカチを差し出していた。言葉通り、俺が来たから泣いたのか。俺も泣きそうだつた。彰子が顔を上げ、またこちらを向いたとき、無理に笑つて手を振り、背を向けて歩き出した。涙が出る寸前だつたのだ。

大学1年 8月7日

恭子の成績が全体的に伸びてきた。

恭子は夏休みだというのにうそみたいに一生懸命勉強している。志望校に行かせてやりたい。

大学1年 8月10日

彰子から手紙が来た。

「・・・・・わたしはこれから、あなたの知らないものを見て、あなたの知らないことを話して、あなたの知らない人と出会います。でも、決してあなたの知らないわたしにはなりません。わたしはわたくしのまままでいます」と結ばれていた。嬉しかった。

大学1年 9月20日

夏休みが終わる。彰子のいない夏休みだった。

大学1年 9月22日

恭子の偏差値が、R大のボーダーライン近く、H大の合格ラインを越すまでに上がった。これまで漠然とした憧れでしかなかつたものが現実味を帯びてきたのだ。恭子のモチベーションはいやでも高まるに違いない。

恭子が「お礼」のケーキを焼いてくれた。マリアのケーキと遜色なかった。「お母さんと変わらない腕前だ」と言うと、「大学生になつてお菓子作りにかける時間が増えたら、お母さんを超えるから楽しみにして」と答え、マリアに鼻で笑われた。

だが、これからが勝負だ。もうひと伸びしてもらわなければ。

大学1年 9月26日

恭子の世界史が芳しくない。どうして覚えることが覚えることが一番多い世界史なんて選んだんだろうか。文句を言つても仕方がない。出来事の起こった順序が覚えられないという恭子のために、項目を並べかえるパソコン用のプログラムを書いた。やつつけ仕事で

味も素つ氣もないものになつたが、恭子は氣に入つたようだ。

プログラムに名前をつける際、岸和田の頭文字Kを適当に3つ並べて「KKK」としたら、恭子はKu Klu x Klanの略になるからと嫌がつた。面倒くさいのでKyoko Kayama with Kishiwadaの「KKK」と言つぐるめた。

大学1年 9月27日

不気味な頭巾をかぶつた連中に恭子が拉致される夢を見てしまつた。やっぱり「KKK」という名前はやめておけば良かった。

大学1年 9月30日

自分の受験前に俺自身が試みたありとあらゆる勉強法を恭子にも試している。その中で、恭子が納得でき効果のありそうなものを継続している。

第三者が見たら「馬鹿じやないの」と思つようなものでも、意外に効くことがあるのだ。

例えば、国語の文章の速音読だ。目で素早く字面を追うと同時に発声もしてみるのだ。声にできるといふことは、目で見た単語や句がしつかりと認識できているということなのだ。試せばわかる。簡単なはずの、平仮名が多い部分に結構苦労する。瞬時に認識したことと声に出すことで口を動かす神経も刺激され、自分の声を聞くという聴覚的な効果もあるのではないかといふ、デタラメな発想であみ出したものだが、これを始めてからひと月ほど後に模試を受けたとき、自分の文章を読む速さに驚いた。しかも、目で読むだけなのに、頭の中に自分の声がはつきりと響くのだ。問題の文章が読めないはずがない。更に読む時間が短縮される分、考える時間が増えるのだ。（俺の場合、「考える」方に問題があつたのだが・・・・・・）

また、恭子にはあまり必要ないが、英語の長文読解でも変なことを大真面目にした覚えがある。問題集の長文の部分を、句や節、文、段落と適当に切りばらばらに並べかえる。そのままだと断面の形で想像がつくから、「ペーパーを見ながら文章を整除する、といつものだ。単語の意味や表現云々ではなく、流れをつかみ全体を把握するセンス（というより、直感か）はそれなりに磨けたと思う。

馬鹿馬鹿しいと思わない方はお試しあれ。ただし、結果には責任持ちません。

大学1年 10月2日

恭子が夏休み明けに受けた模試の結果が出た。英語が少し下がった。国語と社会しか勉強していないんだから仕方がない。本人はuzziぶん落ち込んでいる。

「どうしよう。頼みの英語がこれじゃ落ちるわよ」

「どこが悪かつたんだ？」

「長文かな。時間が足りなかつたわ」

「時間かあ」

「時間というより単語よね、やっぱり。今までタ力をくくつて単語の勉強をあまりしてないから、わかんないのがいっぱいあって読み切れなかつたのよ」

「今から単語の勉強始めるのか？」

「遅い？」

「しないよりはいいけど、それだけに時間取るわけにもいかないだろ」

「どうしよう。落ちたら恨むからね。一生恨むわよ
すぐ人にを齎す。

「わかった。俺が去年作った単語集をお前用にアレンジしてやる
「え、単語集作った！？普通買わない？」

「作ったんだよ。色々な入試問題見て、よく出てるものを1000くらいにしぼってまとめた。それを覚えたというか、作り上げた時点でほとんど覚えちゃってたけどな」

「変わつてるとば思つたけど、いいまで変わつてるとすゞいわね」「どうするんだよ。いらないならいいぜ。面倒だし。市販の使えよ」「それで実際に入試に出たの？」

「じ、せ、作つて。」何しないでマジか

俺の努力の結晶は「マシ」でしかないのか。

卷之三

恭子が買い物につき合えといふ。「ホールドを買つひしい。女のファッショーンはわからないのだが、まあ、息抜きだ。」と思つたのが失敗だつた。この女だけは、どうしてホールド着買うのに何時間もかけられるんだ、いつたい。やうに2桁の店を廻つたあげく、最初に行つた店で決勝戦をおこなうことになつた。

「ねえ、」のグレーとダークレッドとどっちがいい？」

「俺が着るならグレーだけどなあ。ちょっと着て見せてくれよ」

沙子は彼の口から離れた。
沙子は彼の口から離れた。

「ねえ、どうしたの？」

「いいが、お前が心配するなあ」

卷之三

どっちでもいいよ。本当にどちらもよく似合つてゐんだから。自分が好きな方にしろよ。色やデザインで決められなきや、値段で決めるとかコイントスで決めるとかあるだろうが。俺に振つてくるなよ、まったく。ええい、俺の好きな灰色がいいか。いや、それじゃ

「えんじ。えんじの方がお前の顔が引き立つ」

「本当?」

「ああ」

「じゃ、今いちじょい」

といふわけで、恭子はえんじ色のパーティーを買つた。

大学1年 12月1日

大学でこきなり景山教授に呼ばれた。

「留学してみないか」という話だつた。アメリカの大学、期間はほぼ1年。向こうでの勉強も単位として認めてくれるといつ。実は、留学する学生はすでに決まつていたのだが、その学生が都合で留学を辞退したのだといつ。いわば、ピンチヒッターの留学生だ。しばらく考える時間をもりついとにした。

大学1年 12月19日

12月になつて、恭子は学校に行かず家で勉強することが多くなつた。俺も時間が許せば勉強につき合つた。

しかし、今日はびっくりした。

昼前に電話が鳴つた。香山家にかかつってきたのだから香山家の者が出るべきなのだが、恭子は動こうともしない。「出なくていいから」と言つ恭子の制止を「そんなわけにはいかないだろう」と無視して、俺が受話器を取つた。何と、恭子の学校からだつた。

「あの、香山さんですよねえ。私、恭子さんの担任の稲葉と申します。実は、恭子さん、この一週間学校にお見えになつていないんですよ。何度かお電話差し上げたんですが、いつもご不在のようで・・・。いつたい、どうなさつているのかなと思いまして

「はあ・・・」

「あの、恭子さんのご家族の方ですよね?」

将来はそつなるかもしけないが、今は違つ。

「はい、いえ、あの・・・・・。今、本人と代わりますから受話器を手で押さえて恭子に伝える。

「おい、担任の先生からだ。学校一週間も休んで何してるのでかつて恭子は俺から受話器を奪い取り、大声で言い放つた。

「何してるかつて？決まつてるでしょー受験勉強よー！」

ガチヤン。

「だから出なくていいって言つたのに」

「すみませんでした」

何故か謝つてしまつた。

大学1年 12月24日

夕方近く、恭子の勉強を見に行く。

1時間ほどしてマリアが帰つて來た。

「恭子、ちょっとだけでいいから教会に行つて來なさい。わたしは帰りに寄つて來たから。ヒロシさんも一緒に行つてみる？クリスマスの教会には行つたことないでしょ？割といいものよ」

俺はキリスト教徒ではないが、マリアのすすめに従つた。

恭子と並んで教会まで歩いた。

「俺はクリスチヤンじゃないけどいいのか？」

「もちろんよ。わたしが十字の切り方教えてあげる。右手貸して」

恭子は俺右手を取り、上下、左右とゆっくり動かしてくれた。

香山家が通つてゐる教会に着いた。門から続く、煉瓦を敷き詰めた小道の先に、白い美しい建物があつた。多くの人々が集まつていた。キリスト教徒は意外に多いんだなと思った。

「お祈りだけしてくるね」

恭子は前に歩み出て、大きな十字架に顔を向けていた。十字を切つた後、両手を合わせて何事かつぶやいているようだつた。その後、身長2mはありそうな黒人の牧師と言葉を交わしていたが、手招きしてきた。前に出て行くと、大男の牧師に紹介してくれた。その牧

師は上手な日本語で話した。

「今日こじしてあなたと出会えたのは神のお導きです。お会いできて光榮です」

大きな手を差し出してきた。握手した。暖かな手だった。

教会からの帰り、俺は恭子に尋ねた。

「何をお願いしてたの？」

恭子は笑つて答えた。

「初詣じやないんだから。お願いはしないわよ。ただ、感謝してお祈りしてただけ」

「へえ、そうなの。でも、祈りと願いつてどう違うんだ？」

「難しいわね。でも、祈りは『お祈り』、願いは『お願い』。どっちの方が愛情や慈悲にあふれてるようにな聞こえる?どっちの方が自己的に聞こえる?」

「そういうやうだ。言われてみれば何となくわかるような気がする」「でもね、ホントはね、ちょっとだけ『お願い』もしちゃったの」「え、何で? 大学合格?」

「違うわ。そんな自分の力で何とかすべきことは願いにもしないわよ。もっと神様に力を貸してほしいこと」「何なの?」「教えてあげない」

香山家でクリスマス・ディナーを駆走になり、のんびり歩いて家に帰つたら0時前だった。イギリスとの時差は9時間、今頃彰子は午後のお茶でも飲んでいるのだろうか。

入浴を済ませてボーッとしていると午前2時になつた。彰子に国際電話をかけてみた。・・・・・出なかつた。教会に行つてゐるのだろう。彰子は「お祈り」してゐるのだろうか。それとも何か「お願い」しているのだろうか。

新年だ。おめでたい。

しかし、自分の受験は終わっているのに、何故かまた受験勉強をしながら年を越してしまった。自分の受験じゃない分、責任を感じてしまう。

とりあえず神社に初詣に行つたが、すごい数の人だ。神様もいちいち願いを聞いてられないだろうな。来年になつちゃうぜ。その前に、誰がどんな願いをしたか覚えてられないだろう。で、俺はおもいつきり大きな音を立てて拍手を打つた。恐らく、日本の神社の神様は、拍手の音、波長で誰なのかを判断なさるのだろうから（そうでなければ、お辞儀をして手を合わせるだけの参拝法になつてはすだから）、これでもかと大きな音を出して目立たなきや。拍手を打たない奴、手袋をしたまま打つ奴、お義理でペチペチと小さな音しか出さない奴、「どんなお願いか」以前に「誰なのか」わかつてもらえないぜ。もちろん「拍手の音、波長」は、俺の勝手な解釈で、神主さんとかに教えてもらつたわけではないから、正しいかどうかはわからないんだけど。神様にアピールできたぜ、と満足して家に帰つた。

・・・・・ん？形式にばかりこだわつて、肝心のお願いをしていなかつた。馬鹿だ、俺は。まあ、いいか。本来、神様は貴び敬うもので、頼りにするものではないからな。でも、後でまたお参りに行こう。

夕方から恭子のところに行つた。恭子も「年越しで勉強した」と威張つていたが、当たり前だろう。お前の受験だ。でも、どの問題もかなりよくできる。俺」ときに勝つても仕方ないけど、負けそうになるくらいキッチリと解けるよつになつてゐる。これは期待できる。

帰宅後、彰子に電話した。久しぶりに長い間話した。新年の挨拶、街の様子、友達のこと、マリアや恭子のこと、俺の家族のこと、そして、お互いの気持ち。アメリカ留学のことも相談してみた。彰子は留学に賛成だった。

「自分がしてるからよくわかるけど、絶対に留学したほうがいいわ。英語ならうちの母に教えてもらえばいいわよ、ネイティブなんだから」

「そうだな、そうするよ。アメリカか、全く実感ないなあ」

「今は日本にいるんだから実感も何もないでしょ。行つたら嫌でも感じるわよ、異国だつて」

「彰子もそうだったのか？母親の国だろ」

「わたしの祖国は日本よ。だから、初めは『来ちゃった』としか思えなかつたわ。今は、自分の居場所もあるから『いにしへの』って思えるけど」

「俺もそうなれるかな」

「大丈夫よ。でもね・・・・・・、わたしが帰国するのとほとんど入れ違いでしょ、寂しいな」

「じゃ、やめようかな」

「やめちゃダメー！言つてみただけ。自分を磨けるときに磨いておかなきや。時間はその後にもいつぱいあるんだから」

大学1年 1月8日

留学したい旨を景山教授に伝えた。英会話学校にも通うことになった。

大学1年 1月9日

恭子の受験間近。

英語は大丈夫。国語も出来上がってる。

あとは世界史だ。出来事、人物名など、暗記しなければならないことが限りなくある。暗記だけは肩代わりしてやれない。

ええい、もうクイズだ。

「『マッシィーー』『カブール』『ガリバルディ』と言えば？」

「イタリア統一！」

こういう具合だ。お遊びにしか見えないだろうが、俺も恭子も必死なのだ。しかも、試験に出やすいところをクイズにするわけだから、前の日、俺は何時間も過去の問題等を研究しなければならない。大変なのだ。

出来事の起きた順番や流れは、「ＫＫＫ」のおかげか、ほぼ理解しているようだ。

大学1年 1月11日

恭子が誕生日がどうのこうのと言っていた。何故、明日が俺の誕生日だと知ってるんだ？ 彰子に聞いたのか？

「誕生日プレゼントに何くれるんだ？」

「は？ 誕生日プレゼントを『あげる』の間違いでしょ」

「え、尊敬する岸和田先生の誕生日に何かくれるんじゃないのか？」

「なによ、可愛い生徒の誕生日に何かくれるんじゃないの？」

「お前、いつが誕生日なんだよ」

「今日よ。1月11日」

「今日？俺は明日、1月12日」

「うそでしょ。ホントに？ ヤだあ」

「何がヤなんだよ」

「ヒロシの1日前なんて変な気分」

「俺だつて、お前の1日後つて、微妙だな・・・・・。で、何が

欲しいんだよ」

「いいわ、もう。お祝いする気が失せちゃった」

失礼な奴だ。

「俺はお祝いして欲しいから、明日待ってる」
「ずーーーーと待つてれば」
「かわいげのない奴だ。

大学1年 1月12日

恭子が「一応ケーキを焼いたから食べに来い」と書つのと、途中でマフラーを買って行つた。えんじ色のコートに金(と黒)のベージュのマフラーを選んだ。
ケーキはすぐおいしかつた。恭子もマフラーを気に入つてくれた。

どたばたした誕生日だった。

大学1年 2月3日

明日は恭子がH大を受験する。ヒマなので「ついて行ってやる」かと言つが、「友達と行くからいい」といつことだつた。頑張れ。

大学1年 2月8日

「もしもし、恭子か？」
「お早う」
「お早う。よく眠れたか？」
「うん」

今日はR大の受験日だ。朝電話してくれと言われていたので、6時過ぎにこつして電話したのだ。

「いよいよだな」
「うん」
「どうだ、何とかなりそつか？」

「どうだろう・・・」

「やけに謙虚じゃないか」

「そう？でも、やるだけやるわよ」

「その意気だ」

「ありがとう」

「いいか、お前は俺の一一番初めの教え子なんだからな。自信を持って」

「それが心配の種なのよ。まともな考え方じゃなかつたから」

「今更遅いんだよ。あきらめて頑張つてこい」

「今までやつてきたことを信じるしかないもんね。頑張つてくる」

恭子、俺という人間を信じるのは構わないが、少なくとも俺が教えたことは信じる価値があるはずだ。だって、俺はお前の「先生」だつたんだから。

大学1年 2月15日

恭子がH大に合格した。

俺はH大は大丈夫だと思つていたし、恭子本人も自信があつたらしく、それほど嬉しそうでもなかつた。だが、H大でも十分だよ。

大学1年 2月17日

恭子から、R大の合格発表を一緒に見に行つてくれと電話があつた。

「H大は1人で見に行つたじやないか。R大も1人で行けよ」

「嫌よ。1人で泣いてたら馬鹿みたいじやない」

「まだ落ちると決まつたわけじやないだろ？」「

「泣くのは落ちたときだけじやないでしょ！自分の生徒がそんなに信じられないの！」

「それじゃ、うれし涙を流して来いよ。今日は英会話学校に行かな

くちゃならないんだよ

「わかつたわよ。一人で行くわよ。合格してたらいいわね。もし、落ちてたら何するかわからないわよ」

これだよ。

一旦英会話学校に顔を出したが、レッスンをキャンセルしてR大に向かつた。「姫」には勝てなかつた。

R大の構内はすごい数の人だつた。こんなにいつぱい受験した人がいるなら、正直なところ、恭子が落ちていても仕方がないと思った。しかし、肝心の恭子がいなかつた。しばらく人混みの中を探し回るが見つからなかつた。ふと見やると、隠れるように木の幹にもたれているえんじ色のコードがあつた。そばまで歩いて行くと、その「えんじ色」は「こちらを向き、こう言つた。

「何しに来たのよ。落ちて泣くのを見に来たの」

「今朝の電話と言つことが違うじやないか」

「だつて・・・・・・」

「行こう。そろそろ掲示だぜ」

恭子は目を閉じ十字を切ると、右手をそのまま俺の方へ差し出した。

「何だよ?」

「言えるうちに言つておくわね。今までありがとう、先生」
俺は右手で恭子の手を取り、握手しながら言葉を返した。

「どういたしました。初めての教え子様」

恭子の右手をそのまま俺の左手に持ち替えて、恭子を人混みへと引っ張つて行つた。

恭子は何も言わなかつた。その代わりに、俺の手を強く握りしめてきた。顔を向けると、不安そうな目が俺を見つめていた。俺は思わず手を強く握り返していた。

それから数秒見つめ合つていていたような気がする。一瞬だけ、そこには「彰子の妹」という修飾語の付かない香山恭子がいた。

湧き上がった歓声が俺を現実に引き戻した。恭子を引っ張つて掲示が見えるところまで連れて行つた。

「あるか?」

「・・・・・あるわ

「ホントか!?

「あるわ!ホントに!」

それからは周囲の歓喜の渦に同化していた。ただ、やつせまでとはうつて変わった恭子の涙交じりの笑顔ははつきり覚えている。

「……!」だぜ。

お決まりの騒ぎをひと通り済ませてから恭子を送つて行つた。駅から香山家に向かつて歩いていると、何だかしみじみとしてきた。もちろん、恭子の合格は叫びたいくらいに嬉しく、西日を浴びたいつもの家並みも何となく華やいで目に映つていたが、この道を通り回数も極端に減るのだなあ、と思つたのだ。

「いひやつてこの道を通ることもなくなるんだよなあ

「もひづけへは来ないつてこと?」

「いや、彰子も帰つてくるし、またお邪魔させてもらつよ。でも、今は英会話の勉強で忙しいし、何より、お前が合格したんだからもう教えに来なくていいだろ」

「そうよね、わたしは大学生にならし、姉さんも帰つてくるし、嬉

しいでしょ?」

「ああ、嬉しいな。俺は夏の終わりにはいないけどな

「姉さんはすれ違いばかりね。もしかしたら、姉さんよりもわたしと一緒にいる時間の方が長いんじゃない?」

「確實にそうだ

「それでいいの?」

「仕方がないじゃないか

「そつか・・・・・。姉さんもヒロシも、自分の道をしつかりと歩いてるつて感じね。わたしはかなり後れを取つちゃつた。1歳し

か年が違わないのにね。自分が何をしたいのかも曖昧だし

「何言つてるんだよ。恭子はこれからだる。何でもできるんだよ。

何にでもなれるんだよ」

「何でもできる、何にでもなれる、か。そうだといいけど

「お前、合格したその日にいきなりブルーになつてどうすんだよ

「何よ、先にしんみりしたのはそつちでしょ

「悪かった。じゃ、パーツとするか

ワインとチーズと紙コップを買って公園に立ち寄つた。

「どこか店にでも連れて行つてくれるのかと思つた

「盛大なのはお前の友達とやれよ。これは2人の打ち上げだ」

紙コップにワインを注いで乾杯した。それから俺たちはしばらく話した。昨日までのこと、明日からのこと、今日で先生ではなくなること、生徒ではなくなること・・・・・。

日が落ちかけ、ワインの赤色が周りに溶け始めた。恭子のマントも黒っぽいシルエットに変わつた。

「そろそろ行こうか

「少し酔つちゃつたかも」

「げ、お前、酒癖悪いからな。去年のことと想い出したよ。彰子やせつと飲んだ後、お前をおんぶして今日と同じ道を歩いたんだよ。どうせ記憶にはないだろうけど」

「失礼ね。記憶ぐらいあるわよ」

「はい、はい。酔いが足に来ないうちに家まで帰ろう

「マリと空き瓶をくずかごに入れて、俺は公園を出た。「待つてよ」と恭子も追いかけて來た。香山家はすぐそこだ。再び並んで歩きながら恭子が言つた。

「わたし、覚えてるよ、去年のこと」

「もういいから」

「あつ、信じてないんだ」

「信じるも何も、お前、思いつきり俺の背中で寝てただろうが。幸

「元」

恭子が何かつぶやいた。

はい

「え、何？」

「何でもない。ひとりごと」

香山家に着いた。

マリアが大喜びしていた。マリアにつられたのか、酔いのせいなのか、恭子もまたテンションが高くなってきた。

挨拶をして早々に香山家を辞すことになった。玄関先で恭子に尋ね

た

「うう、何で誰いたんだよ。ひとりじめてやつ。言いたいことならまつきつ言ってくれよ。気になるよ

心之靈，氣之通，神之明，德之全，此之謂誠。

の黒髪、大きな黒い瞳、気の強そうな口元。会おうと思えばいつでも会えるのだろうが、何故か、目に焼き付けておきたかったのだ。

俺は恭子の先生ではなくなった。

大学2年になる前の春休み 3月1日

留学費用の足しにするため、割のよいアルバイトをと、工事現場の作業をし始めたが、いつたい何なんだ「現場」って。ズブの素人の俺に何ひとつ教えずにおいて「アレしろ、コレしろ」だ。ワケがわからんないまま何かしてると、すかさず「何やつてんだ！」と罵声が浴びせられる。理不尽だ。でも、すぐにやめたんじゃ「根性なし」って思われるから意地でもやめない。「足手まといだ」って言われても、嫌がらせのつもりで春休みの間は居座つてやる。俺を雇つたことを後悔しない。

体中痛い。が、ここ2、3日現場で叱られる回数が減った。ザマ
ニロ。

大学2年になる前の春休み 3月7日

休みだ。久しぶりの休みだ。現場、現場で毎日クタクタだ。ずっと寝ていたやううと思ったが、ダメだった。マリアから電話が入ったのだ。ケーキを焼いたから食べに来いと言つ。およそ3週間ぶりの香山家だった。

「やっぱりマリアのケーキはおいしいわ！」

「いつ言って恭子にジロツとこらめた。こらむほどのことか。友達と会つ予定があるからと、恭子が出かけた。マリアが切り出した。

「ヒロシさん、彰子のことなんだけど……」

「どうかしたんですか？」

「別にどうつてこともないんだけど、ヒロシさん、まだ彰子のことが好きなのかなって思つて」

「何言い出すんですか。好きですよ」

「そう。それならいいんだけど」

「何があつたんですか？」

「何もないわ。彰子の気持ちも、あなたの気持ちも変わつていないと私は思うのよ。でもね、彰子はずつとイギリスだったし、今度はあなたがアメリカに行つちゃうでしょ。その間にね、気持ちは変わらなくとも、2人の関係が変わることがあるんじゃないかと思つて」「何か難しいですね。例えば、僕が彰子さんを思う数値が100だとしたら、いつの間にか120くらいに思う人ができてるってことですか？彰子さんを100思いながら」

「面白いこと言うわね。でも、そういうこともあるかしぃ。ほかの

人を好きになる云々だけじゃないんだけど

「お互い、相手には理解してもらえない経験をしたり、相手には隠しておきたいことができちゃうってことですか？」

「そうね。それも当たり前のことだと思うし、それであなた達が離れちゃつても仕方ないと思うのよ」

「僕達は離れませんよ。これからも彰子さんのことが好きです。」

「変なこと言って悪かったわ。これからもよろしくね」

「こちらこそよろしく

マリアは何が言いたかったのだろう。「関係が変わる」ってどういうことだ。関係つてのは相対的なもので、うーん、俺の彰子への気持ちは絶対的だとして。・・・・・絶対が1つだけとは限らない、か？絶対的なものAがある。もう一つの絶対的なものBが出てきた。そのときにAはBによって相対化されることもあり得る、よな。でも人間関係は相対化されるものばかりか？例えば、ある男にとって妻は誰よりも好きで、大切な、絶対的な存在だったと、少なくともそんな時期があつたとする。で、子どもが生まれと、子どもは絶対的な存在になる。そのとき、男は自分の思いを妻と子どもに半分ずつ注ぐのか？いや、多分、思いは妻しかいないときの2倍になつてるよな。俺には妻も子もないからわからないけど。でも、それなら、離婚する夫婦なんていないよな。ましてや子どもがいれば。夫婦関係は絶対のうちに入らないのか。じゃ、親子関係はどうだ。これは絶対だろ。いつでもどこでも人は誰かの子だ。それは真実だ。相対化しようがない。でもなあ、子もいつか親になる。そうしたら、自分の親より自分の子だろ、普通は。新しい親子関係が古い親子関係を相対化していいか？してるよな。第一、彰子の父親だつて、マリアに出会つちゃつたから、それまでの夫婦関係はもちろん、親子関係まで相対化しちゃつたんじゃないか。でも、親子関係は残るよな。この場合、関係が人間を絶対化してるよな。うーん、わかんない。ん？何より、俺の考えてることつて、今の彰子

と俺の関係から思いつきりズレでないか？マリアは単に2人のことを心配してるだけだろ。だから、よけいに気になるんだよな。何がマリアを心配させるのか。恭子か。せつか。正直、2人とも好きだぜ。すごく魅力的だし。でもそれは俺と彰子の関係があつて初めて成り立つ「好き」であつて、ちょっと違う「好き」だ。え？また「関係」か。がーつ。体ばかり使って頭は放つておいたから思考力がなくなってる。でも、とにかく俺は彰子が好きなんだよ。

大学2年になる前の春休み 3月8日

今日も1日働いた。「現場」つてところにも慣れてきた。だが、俺の体は大丈夫だろうか。大体、腰が悪くて走るのやめた人間がするような仕事か。今気付いたけど。まあ、お金までもらえる激しいリハビリだと思えばいいか。

せつに電話した。マリアが俺と彰子の仲を心配することを言つと、

「馬鹿じゃない。あなたが恭子さんにばかり気を取られて、彰子のことほつたらかしにしてるからでしょ」

厳しい言葉が返ってきた。

「でも、恭子は大学受験だつたんだから、気を取られて当たり前だ

る」「うう

「それは彰子には関係ないことよ。妹さんのことだから、関係ないつて言うのも変だけど。とにかく、あなたと恭子さん見てて何か思うところがあつたんでしょう」

「勉強見ろつて言つてきたのはマリア本人だ。それに、恭子は彰子の妹だぜ。しつかり見てやつて当然だろ」

「ふうん。それならそれでいいんじゃない」

「全然よくなさそうな『いいんじゃない』だな」

「いいえ、いいわよ。お母様にしてみたら、あなたが長女とつき合

おうが、次女とつき合おうがどつちでも。いずれ義理の息子になるのはあなたで変わらないんだし。ただ、ちよつと家庭内がもめるくらいで

「お前、話が無茶苦茶だよ」

「そう、無茶苦茶よ。だけど、お母様のおっしゃる『関係』ってほかには思いつかないんだけど」

「俺とせつとの関係じやないか？」

「『無関係』っていう関係は気になさらないんじやない？」

せつのか声があまりにも冷静で困ってしまった。謝つておひづ。

「はい、すみません」

「いい、彰子が好きなら彰子を見てなさい。ほかに好きな人がいるならその人のところに行きなさい」

「お前のところに行つてもいいか？」

「また、要らぬことを言つてしまつた」

「いいわよ。いつでも来てよ。その氣があれば」

相変わらず冷静だ。怖いくらい。

「やめとく。今まで通り彰子を見てる」

「それがいいわね」

「ありがとう。せつと話してると、何ていうか、こいつ、見通しがよくなつて言うか、元気になつちゃうんだよ」

「どういたしまして。とにかく、彰子が帰つてくれればいいのよ。すつきりするわよ、どんな関係も」

大学2年になる前の春休み 3月26日

今日で「現場」のアルバイトが終わった。我ながらよく頑張ったものだ。事務所でアルバイト料を受け取つた。二十日分で二十万円だ。税金分は引かれてたけど。だが、そばにいた現場監督が、「おまけだ」と、1万円もくれた。ありがたく受け取つた。

「兄ちゃん、また、金が要るときは来いよ。2度目からは日給も上

「でもうってやるよ」「ありがとうございました。

大学2年 4月7日

いつの間にか大学2年だ。俺はいつたい1年のときに何をしたんだろうか。何故か2度目の受験勉強はしたよな。単位も取った。それも人並み以上に。しかし、頭には何も残っていないような、それでも、ちょっとばかし偉くなつたような。よくわかんない。今年は、はつきりわかるようにかなり偉くなつてやるぜ。留学もするし。留学か、すでにずいぶん偉そうだ。

大学2年 5月10日

武道として柔道を履修した。空手や剣道の時間には他に履修しなければならない講義があったのだ。だが、やめておけば良かつた。今回の履修者30人中、俺を含めて5人だけが初心者、残りは全員が有段者だったのだ。4月中は受身や基本的な型を教えてくれていたが、5月の最初の授業、担当教官のひと言で地獄の時間が出現した。

「珍しいな、今年は有段者ばかりだな。教えることもない。やつぱり試合形式だな。そうだ、10連続勝ち抜きで単位を出すことにしよう」「うう

体格のいい（どこのではない、牛のような）奴等、しかも余裕の有段者を相手に勝てるわけがない。数名いる俺と同じくらいの体格の奴等も、高校ではそれなりに鳴らしていたらしい。そうなのだ、俺はそれとは知らずに、場違いなところに紛れ込んでしまっていたのだ。俺達、5人の素人は人気者だった。その中でも一番小さい俺はアイドルだった。俺と試合すれば確実に1勝があげられる。相手が俺と同じくらいの体格ならまだ粘れる。運が良ければ3分くらい

はもつ。しかし、牛を相手にどうしろと？襟をつかまれて力で転ばされて寝技で、ハイおしまい。上に100kgの奴に乗つかられてみろ、下手すりや息ができない。100キロといえば10分の1トンだぜ。もちろん、100キロ以上の奴もいる。俺の体重の2倍だ。たまたまんじゃない。

全敗でも単位がでるんだろうか。

大学2年 6月14日

恭子が電話してきた。「今日ね、わたしにも彼らしい人ができたのよ」だそうだ。

恭子は恭子の大学生活を送り始めたのだ。

大学2年 6月17日

恭子が電話してきた。「今日ね、彼と別れたのよ」だそうだ。

恭子は恭子の大学生活を送っている、のだろうか。つき合い始めて3日目で別れるなんて荒業はちょっとできない。大丈夫かあいつは？心配になってきた。

大学2年 6月21日

梅雨だ。うつとうしい梅雨だ。

恭子に会った。ケロッとしている。

「お前、もう別れちゃったの？」

「うん」

「振られたのか？」

「ううん、振ったの」

「どうして？カッコイイ人だつて喜んでたじやないか」

「さあ、どうしてでしちう？わたしにもよくわかりませんねえ。あ

「んまり好きじやなかつたみたい」

「変なの。まあ、落ち込んでもいないみたいだし、ちょっと安心した」

「落ち込んでもるわよ」

「え？ それでか？ ずいぶん気分良さそうな落ち込みだな」

「・・・・・ 今年も梅雨真つ最中ね」

「雨で滅入つてゐるのか？」

「ううん、雨が上がつた後よ」

大学2年 7月17日

教育心理学のレポート、理科の教材研究、美術の作品提出、ピアノの演奏、視聴覚教材の作成、その他アレもコレも・・・・・。忙しい。受験勉強してるときと変わらないくらい忙しい。これに教育実習が重なつたらどうなるんだ？

大学2年 7月17日

家で野球のナイター中継を見ていると電話が鳴った。

「ただいま。今、家に着いたの」

彰子の声だ。

「お帰り」

後の言葉が続かない。本来俺が尋ねるべきことを、彰子の方から尋ねてくる。

「元気だつた？」

「ああ。彰子は？」

「元気よ」

「良かつた」

「家に来る？」

「いや、今日は彰子も疲れてるだらうから。明日の午後行つてもい

いか?「

「うん、待ってる」

「それじゃ」

俺の中では、今日は正円よつおめでたい日だ。

大学2年 7月18日

彰子の顔を見たら、関係がどうのこうのとグジグジ考えてたことが馬鹿らしくなつてくる。いちいち確かめなくともわかつた。離れていても、2人の思いは変わつていない。関係も変わつていない。彰子はイギリスの話をいっぱいしてくれた。写真もいっぱい見せてくれた。俺も日本でのことを色々話した。マリアも恭子も色々話した。

図々しく夕食を“あそび”になり、夜9時過ぎに番山家を出た。彰子が一緒に来た。公園でブランコに腰掛けて2人の話をした。

「ねえ、正直に言つわよ。わたしね、向こうにいてもそれほど寂しくなかつたの。行く前は、絶対に寂しいつて思つてたのにね。ヒロシは?」

「そう言えばそうかも。まあ、恭子の経験とか、自分の留学準備で忙しかつたつてのもあるけど。少なくとも寂しくて泣いたことはないな」

「わたしはね、会いたい、声を聞きたいとは思つたわよ。毎日のようになつて。でも、寂しいのとはちょっと違うのよ。何か、どこかで安心なのよ。わたしがそうだと思つことはヒロシも多分そうだと思つ、ヒロシが違うと思うことは多分わたしも違うと思つ、そういう安心感がね、あるの。離れててもそれがよくわかつた。価値観が一緒なのかな?」

「価値観とは違うと思つよ。例えば、俺が気に入つてたるスニーカーだつて、彰子は『汚い』のひと言で済ませちゃつたりするだろ。

だけど、そんなことどうでもいい」「

「そうよね、言葉にする以前にもうわかつちゃつてる」

「うん、自分じゃないのに彰子の考えがわかつちゃつんだよな。一

瞬で」

「そりそり、ヒロシの考えが、フツと飲み込めりやつの」

「俺達は似た者同士なのかな?」

「うん、どちらかと言つと同じ人みたい。ヒロシはひょつと変わつてゐわたし。わたしはちょっとまともなヒロシ」「シ」

「お前、今、さりげなくひどいこと言わなかつた?」

「言つたかも。でも、わたしの考えがわかつちゃうんでしょ?」「

「今のはわかんない。わかりたくない」

「あーあ、ついにケンカだ」

「俺が日本にいる間に仲直つよつな

「うん」

「それじゃ、俺、帰るわ」

「氣をつけてね」

「お前にせ、家まで送つてやるやつか?」「

「いいわよ。何かあつたら大声出すから」

「じゃ、5分ほどここにいるよ。その間に彰子の声が聞こえなかつ

たら帰る」

「うん、お休み

「お休み」

一人、ブランコに腰掛けて、ゆつたりと流れる安心感、一体感に包まれていた。俺がアメリカに行つても俺達はやっぱり俺達なんだろつなあ。また、1年後、同じように彰子といふんだろうなあ。

何故か、俺達がつき合つ始めた日、彰子が言つた言葉を思い出しだ。

「わたし達、どうして出会つたのかな?」「

出会つたと云つより、還つたのだ。お互いが、お互いへと還つて

いつたのだ。 そんな風に思えていた。

大学2年 7月21日

書店でせつと出会った。恋人とおぼしき男と一緒にだつた。

「久しぶり」

「ホント、久しぶりね。あ、こちらは本庄さん、同じ大学の同級生。これは岸和田君、彰子の彼よ」

向こうは「こちら」で「さん」、俺は「これ」で「君」。えらく差をつけられたものだ。しかし、この本庄さん、同級生とは思えぬ風格がある。つい「さん付け」してしまつ。同級生つていうだけで年齢は上なのだろうか？

「こんにちは。岸和田浩です」

「こんにちは。本庄マサトです」

しばらく間の抜けたことを話した後、その場を離れた。

「ちょっと、ヒロシ」

せつが後ろから歩み寄つて來た。

「いいのかよ、本庄さん待たせて」

「いいのよ。それより、彰子とはどう？？」

「うまくいくてるよ」

「彰子は4日前に帰つて來たばかりでしょ。本当に大丈夫なの？」

「ああ、何の問題もない」

「それならいいけど。でも、今度はヒロシがアメリカでしょ。何か

ありそうで心配なのよ」

「俺達は大丈夫だから。ほら、本庄さんが待つてるよ」

「いいつてば、とりあえずつき合つてるだけの人だから」

「とりあえずつて・・・・・。恭子といい、せつといい、男はお人形さんとは違うんだぜ。真剣につき合えなんて言つつもりはないけど、『とりあえず』はないんじゃないか？」

「あら、恭子さんも『とりあえず』派なの？」

「いいよ、恭子のことは」

「わたしのこともいいわよ。じゃ、行くわね。あ、ヒロシ、送別会してあげるね。『とりあえず』も連れて行くから、一緒に飲みましよ」

「どうなってんだ？ せつ一流のジヨークも入っているんだろうが、『とりあえず』は本庄さんに失礼だろ？ 」「これ」「君」より失礼だ。

だが、せつは俺達のことは心配して色々言つてくれるが、自分のことはあまり教えてくれない。恋人ができたんなら教えてくれりやいいのに。

大学2年 7月23日

彰子と海に行つた。2人で海に行くのは初めてだった。また、来年、俺が帰つてきたら来ようと約束した。

帰りの車中、彰子が言った。

「恭子も連れてくれば良かつたわ」

「なぜ？」

「しばらくヒロシと会えなくて可哀想だから」

「おかしなこと言つくなよ」

「わかるのよ、妹だから・・・・」

大学2年 8月2日

約束通り、せつが送別会を開いてくれた。彰子、安達、本庄さんも一緒にだった。俺と安達が一緒に酒を飲むとひどいことになる。彰子とせつは毎度のことだから驚きもせず、一緒になつて喜んでいたが、本庄さんは最初びっくりしていた。しかし、すぐに馴染んで、いや、汚染してきた。

会は2軒でお開きとなつた。せつが俺を呼んだ。

「ありがとう」

「何言つてんだ。俺がお礼言わなきやならないのこ。ありがとう。」

「乐しかつたよ」

「つうん、本庄も、世の中にはこんな人達もいるんだつて、ちよつとはわかつたんじやないかな」

「『こんな人達』なのか、俺達は?」

「まあね。元氣でね。勉強はともかく、無事に帰つて来てね」

「おう、行つてくる。せつも元氣でな」

「ええ、それじゃあね、ヒロシ」

せつは本庄さんと歩き出した。

俺は彰子と安達と3人でもう1軒行つた。が、終電を逃し歩いて帰るハメになつた。

大学2年 8月9日

明日はいよいよ日本を発つ。大した量ではなかつたが貴重品以外はもうアメリカに送つていい。かばん1つで出発だ。正直、不安もあるが、期待の方が大きい。

彰子と昼ごはんを食べた。

「見送りには行かないわよ。泣いちゃいそうだから」

「そういうや、お前、去年泣いたよな」

「来ないでつて言ったのに来るんだもの」

「だが、俺達みたいに1年ずつどつちかがいなくなるつてのも珍しいよな」

「ホントね、その前は受験勉強で3か月ほど会わなかつたわ

「『めんな』

「いいのよ。ちゃんと帰つて来てね」

夕方、母親がいつにない「あそ」を作つてくれた。父親が何も言

わざに「ニヤックの封を切ってくれた。心配ばかりかけて済まない。金ばかりかかって悪いな。いつか、気と運が向いたら親孝行してやるぜ。」

ありがとう。

夜中、自転車で香山家に行つた。体に当たる風が心地よかつた。さすがに香山家に着く頃には汗ばんでいたが。彰子の部屋にも恭子の部屋にも灯りがついていた。何をするというわけでもなく、ただ見ていた。

いつの間にか口笛を吹いていた。SING LIKE TALKINGというグループの「きっと いつの日か」という歌だ。恋人を残して遠くに行く男の気持ちを歌つたものだ。柄にもなくはまつてしまつた。想像（空想、いや妄想か）の中では、俺も絵になつているなんだけどなあ。

玄関のドアが開いて、彰子が出て來た。びっくりした。ジーンズにボロシャツ姿だった。

「やつぱりヒロシだ。口笛が聞こえたから」

「おう、よく氣付いたな」

「氣付くわよ、わたしは。それに、絶対來ると思つてたから、ほん、散歩の格好。歩こう

自転車を置いて、彰子と並んで歩いた。

「ねえ、口笛で何を吹いてたの」

「『きっと いつの日か』っていう歌。結構今の心境に合つてたから、何となくな

「どんな歌？歌つてよ」

「ちょっと勘弁してくれ。俺が行つてからCDでも聞けよ。安達が持つてゐる

「ふーん。じゃ、楽しみにしておくわ。ヒロシの今の心境ね」

最初は色々なことを話しながら歩いた。でも、いつの間にか、何も言わずにただ2人でゆっくり歩いていた。そして、また、香山家

が田の前に・・・・・。もう一度、2人が離ればなれになる時がやってきたんだ。

「妹や母に会つて行く?まだ起きてるわよ」

「いや、いい」

「どうして、2人とも喜ぶわよ」

会いたい、とも思つたが、やめた。彰子だけでいい。

「出発の前の夜、最後の夜に会つのはお前だけでいい」

彰子の目に涙が光つた。俺は彰子を引き寄せた。彰子がどこかに行つてしまいそうだった。行くのは俺なのに。つっここの前まで一体感に包まれていたのに。

「どこにも行くな」

「行かないわ」

キスをした。彰子の唇が離れた。

「ねえ、何て言つて欲しい?」

「何でもいい、お前の声なら」

「いっぱいあつて決められない」

「じゃ、何も言うな」

また、唇を合わせた。そして、また、唇が離れた。

「決めたわ」

「何?」

じつと見つめ合つた。

「愛してる」

その夜3回目のキスをした。つき合つて始めてから、一番長いキスだった。

大学2年 8月10日

あれほど来るなど言つたのに、空港まで安達がついて來た。

「俺だけかよ。いくら何でも寂しそぎるぜ」

「いいんだよ。来られても困る」

「とか、言つて、内心、彰子ちゃんは来て欲しかったんだ！」
「いや」

「正直になれよ」

「正直だよ、俺は」

「お前、じつせアメリカで浮氣するんだ」「日本を離れるその瞬間までは、つとでもいいから『彰子がいなくて寂しいよ』くらいのことは言えよ」

「大きなお世話だ。それに俺は浮氣はしない」

「『俺はいつもどこでも本気だぜ』って？」

「つるわこんだよ。だから来るなって言つたんだよ」

「照れるなよ。俺とお前の仲じやないか

「はいはい、ありがと。じゃ、ここでね、仲良しの安達君

「仲良しの岸和田君、これを預かってまことにました」

「何だよ？」

「彰子ちゃんからだ」

銀の十字架だった。彰子、ありがと。

「愛は宗教を越える、よな。この幸せ者が！それと、『われ』一枚の便箋だった。「顔くらい見せろ。明日から日本はまた鎖国するんだからね。帰つてくるな。もし帰る気なら無事でいてね。馬鹿！」と乱暴な字で書いてあつた。

「何だこりや。ここまで見事につじつまが合わない文章も珍しい」

「誰だかわかるか？」

「字を見りやわかる」

「今朝、その十字架を預かるとき、彰子ちゃんの横で書き殴つてたよ。なかなかの怒文だと思つぜ……。じゃ、わざと渡したからな」

「お礼を言つておこしてくれ。わざわざ」「苦労だったな、メッセージ

ヤー安達」

「来たくて来たんだよ。誤解するな」

「言つてくるわ」

「おひ、元氣でな」

しばらくはお別れだ、日本。そして、・・・・・。

アメリカ留学 8月10日

アメリカはロサンゼルスに到着。

ここで俺の新たな人生が始まる。のはいいんだけど、この人達、いつたい何語しゃべってるんだ？英語か？英語だろうな、ここはアメリカなんだから。こりや、下手に英語を話すより、身振り手振りを交えて日本語でわめいたほうが絶対に意思が伝わるぜ。イヤになるなあ。

何とか入国手続きを済ませて、大学に行き、予定通りコーディネーターに会えた。ひと安心。

アメリカ留学 9月5日

アメリカに着いたときは、周りが何て言つてるかわからなかつた。と言うより、みんな雑音を発しているとしか思えなかつたけれど、慣れると一応言葉に聞こえるから不思議なものだ。

でも、初めての授業は半分以上が雑音のままだつた。まずいかも知れない。

アメリカ留学 9月9日

英語が母語ではない留学生向けの集中語学研修が厳しい厳しい。

一般的な学術用語、学部ごとの専門用語が現れては消え、講師の叱責が乱れ飛ぶ。第二次世界大戦中に使つてたという「鬼畜米英」って言葉が頭の中に浮かぶくらい、これでもかと鍛えてくれる。おかげで雑音がなくなってきたけど。

アメリカ留学 9月19日

国が大きいと人までおおらかになるものなのか。概しておおらかだ。良い意味でも悪い意味でもおおらかだ。

だが、みんな真面目に勉強するよな。もつとおおらかになれよ。この国では、勉強におおらかな奴は大学なんか来ないのかも。

アメリカ留学 10月2日

面白い奴がいた。講義中にやたら熱心にノートを取っているのだ。教授の話にうなずいたり、相づちを打つたりしながらも手は動き続いている。すごい熱心な奴がいるもんだと、ノートをそつと覗いてみた。何と「ドラえもん」の絵が描いてあった。彼は、その絵に色をつけていた。つまり、塗り絵だ。

講義の後、彼に声をかけてみた。

「『ドラえもん』、上手に塗れたかい？」

「ああ」

「でも、どうして『ドラえもん』なんだい？」

「日本文化じやないか」

これがBrian Ross^{ブライアン・ロスニア}lar^{ラル}eとの出会いだった。

アメリカ留学 10月4日

「ちょっと『お茶』しに行こう」

ブライアンが日本語で話しかけてきた。びっくりしたがそのままついて行つた。すると、カフェの前を通り過ぎて、キャンパスの隅にある建物に入つて行つた。中の1室が和室、しかも茶室になつた。自分の家みたいに、ブライアンはお茶の道具を引っ張り出した。

「お茶の用意をするから、ヒロシは花を飾ってくれよ」

床の間の前の花器と花を指差した。幼いときに一応母親に教えてもらつてた（無理矢理仕込まれた）から、「お茶」も「お花」もひと通りこなせはするが、人様に披露できるようなものではない。しかし、この状況では花を生けないとまずいよな。見たこともない花だけど。何とか体裁を整えて床の間に飾ると、ブライアンが座れと言つ。

「僕は『裏』なんだけど、ヒロシの流儀で楽しんでくれればいいから」

「僕も『裏』なんだ。『裏』しか知らない」

ブライアンは慣れた手つきでお茶をたててくれた。

「結構な御点前でした」

お茶を飲み終え、そう言つと、ブライアンは嬉しそうに言つた。

「お粗末さまでした。でも、ヒロシ、結構日本人だね」
このアイルランド系アメリカ人に、日本人であることを褒められてしまつた。どうやら、俺は彼の試験に合格したらしい。

ブライアンは大の日本好きで、「茶道」「華道」のほかに「剣道」も習つてゐるといふ。理想は「風流を解する武士」だといふから恐れ入る。俺はブライアンにわかる限り日本について教えるという約束をさせられた。彼も俺の留学生活をできる限りサポートしてくれると言つ。

アメリカ留学 10月10日

英語がある程度理解できて使えるよつになつたら、調子がいいこと、いいこと。勉強だけじゃなく体の調子もいい。

アメリカ留学 11月18日

ブライアンが冬の休暇を利用して旅に出ようと誘つてきた。格安

のチケットが手に入るから、とりあえずインドに行くことにした。

アメリカ留学 12月15日

いま、インドのベナレスにいる。ガンジス川がでか過ぎる。日本のみみつちい川とは違う。そりや、こんな川にずっと接してりや、ガンジス川並みの思想が生まれても何の不思議もない。だが、旅行者を狙うみみつちい犯罪が多発しているのはどういふことだ？

アメリカ留学 12月21日

今、イスラエルのエルサレムにいる。1人で。インドからの移動に俺はバスを使うことにした。それが一番安いのだ。でも、途中にはイランがある。日本人の俺は問題ないが、イランの「敵国人」のブライアンは無理だ。エルサレムで落ち合つことにして、ひとまず別れた。エルサレムに着き約束のホテルに行つたが、ブライアンはまだチェックインしていない。何かあったのだろうか。

アメリカ留学 12月23日

やつとブライアンと合流。船で来たという。そりや遅くなるよ。予定変更、面白そうなのでしばらくイスラエルに滞在することした。宗教について真面目に考えた。色々な宗教の人の話を聞くことができた。

アメリカ留学 12月25日

宗教や国家そのものを基準に考えると、日本人ってのは情けない

ものだ。語る言葉がない。もしかして、日本はまだ独立すらしてないんじやないかと思えるほどだ。今の日本は他の多くの国々とは違う、独立を「戦つて獲得」したわけじゃない。独立を「何かの拍子に『えられた』」のだ。そして、その独立は「守るもの」でもなければ「守らう」という意志」にえられたものでもない。自分の国をけなしそぎだらうか。

アメリカ留学 12月26日

ブライアンがイスタンブールに行きたいと駄々をこねる。でも、イスラエルでの滞在が予定より長くなり金が心配だ。仕方ないので、非常用にどうぞ持つてきただ日本某メーカーの寿司の「素」に活躍してもらおう。ご飯に混ぜるだけってヤツだ。市場で米と適当な食材、安い皿を買い、炊いたご飯に「素」を混ぜ、いい加減な具をのせた「ちらし寿司」の完成。皿に盛つて、市場の端っこで売つた。物珍しさもあってか、意外と売れた。いいよな、寿司の味がわからんない人々に寿司を売るつていうのも。"Japanese best food" なんて言いながら、具にオレンジや名前も知らない魚がのつてるんだから大した寿司だ。でも稼がせてもらつた。まだ、おにぎりの「素」もあるし、その気になれば稼げるぞ、こりや。

アメリカ留学 12月29日

ボスボラス海峡を渡つてイスタンブールに到着。新年はここで迎えることになる。

アメリカ留学 1月1日

明けましておめでとう。

イスタンブールも面白い。はまつてしまつた。様々な人種、民族がいて互いにうまくやっているのだ。少なくとも俺の目にはそう映つた。各々が個性を主張し合つているのだが、それが独特的の活気を生み出していた。俺も日本民族の個性を發揮しよう。

アメリカ留学 1月18日

予定よりずいぶん遅れてアメリカに帰つた。

大学の休暇はとっくに終わっていた。当然、授業は始まつていて、その間のレポートや、ちょこちょこ実施される試験等、全てバス。「留学生の分際でいい度胸してる」と、担当の、白人なのには故かこのときは真っ赤な顔してた教官にお褒めの言葉をいただいた。

そりやそうだ。イスタンブールでひと儲けして余裕ができる、調子に乗つて南アフリカ共和国まで行つたんだから。

喜望峰やアガラス岬はとにかく雄大で美しかつた。なんせ、大西洋とインド洋が接してるんだから。アパルトヘイトの影響など、考えさせられることも多かつたが気に入つた。新婚旅行はできることなら南アフリカ共和国に行きたい。

いつになるかわからぬ新婚旅行の前に、大学の課題をこなさなきやならない。また「いい度胸だ」と言われてしまつ。「度胸」だけでは認めてもらえない現実がある。当分勉強漬けだ。ブライアンはすでに留年を覚悟していた。

アメリカ留学 3月15日

ヒュー。勉強、勉強で毎日が過ぎていく。受験勉強の方がまだ好きになれる。

彰子の言つてた「居場所」ってヤツが俺にもわかつてきた。だが、この「居場所」にいられるのもあと2か月余りだ。無駄にはしない。

アメリカ留学 6月11日

ブライアンと別れる日が近付いている。

「ヒロシ、ずっとアメリカにいるよ。大学生じゃなくともいいだろ。仕事なら何とか世話するよ。こっちでヒロシの子どもができるば、アメリカ人の父親だ。市民権だつてもらえる。そうだ、アメリカ人と結婚しろよ。ずっといろよ」

ブライアンは本気で言つていた。本当にいい奴だ。

アメリカ留学 7月6日

ブライアンとお互いの国のこと話をした。過激だけど、本音も話した。

「ブライアン、アメリカ合衆国にはすげえこといろいろもつぱいあつた。だけど、自分達の価値観が世界の価値観だと思つてる。まあ、世界の中でそれだけのことをしているんだろうけど。そして、世界中どこもかしこも『アメリカ』にしようとする。それだけの力もあるんだろうけど。俺の偏見かな」

「そうかもな。でも実際『強い』。いいところも悪いところもその『強さ』なんだよ。ヒロシ、日本はいい国だよ。でも『弱い』。アメリカが飲み込みに行くよ。アメリカだけじゃない。中国や韓国、北朝鮮、ヨーロッパの国々、イスラムの国々、色んな国が、お前の国は簡単に落とせると思ってる」

「ああ、そうだろう。だけど、どうせならアメリカの州の一つにな

りたいよ」

「何言い出すんだよ」

「そうしたら、その16年後には黄色人種が合衆国の大統領してる。もしかしたら岸和田つて奴が。東京が合衆国の首都だ」

こんなこと言えば普通のアメリカ人なら怒るだろ?。少なくとも不快な顔をする。だが、ブライアンは違う。

「ヒロシ、アメリカはそんなにヤワじやないよ。だけど、アメリカに喧嘩売つてるみたいだな。買うよ」

こう言って笑う。

「でも、ヒロシ、僕はアメリカが好きだ。ひどい犯罪が起きても、貧富の差が激しくても、時には弱い国をいじめても、ヒロシに嫌われようとね。努力してでもアメリカを好きでいるよ。いいところもあるし」

「お前がそこまで言つんだから、アメリカつてやつぱりいい国なのかな」

「そうかもな。ヒロシは日本が好きかい?」

「ああ、好きだ」

「弱くて、甘い国でもか?」

「ああ、好きだ。何しろ、好きな女がいる国なんだから」

「じゃ、やっぱり、アメリカ人とは結婚しないんだな」

「ああ、俺は日本人でいるよ」

「ブライアンこそ、日本人と結婚しろよ」

「それいいね。誰か紹介してよ。でも『大和撫子』だよ。なにしろ、

僕は『侍』なんだから」

「今の日本に『大和撫子』はめつたにいないよ」

「そう?つい半世紀前はそんな人達ばかりだつたんじやないか。ア

メリカに戦争ふつかけてくるくらいなんだから」

「違う、と思うけど·····」

アメリカ、悔しいほど大きくて強い国だつた。その悔しさが心の底からアメリカを好きになれない理由なんだろ?な。小さくて弱い

国の民の歯ぎしりか。

でも、アメリカ人は好きだ。ブライアンも好きだ。

アメリカ留学 7月13日

ついにアメリカを去る。色々なことを教えてくれた。色々な経験をさせてくれた。そして、ブライアンに会わせてくれた。本当にありがとう、アメリカ合衆国。いつかまた来る。次は本当に喧嘩を売りに来るからな。首を洗つて待つてろ。

空港までブライアンが見送りに来てくれた。

「ブライアン、ありがとう。楽しかった。また来るよ
「ああ、待ってる。僕もいつか日本に行くよ。『大和撫子』をいっぱい用意して待つてくれ

「何とか揃えておくよ」

「ヒロシ、会えて良かつた。寂しくなるよ」

「俺もだ。でも、また一緒に色々なことができるよ」

「ああ、僕もそう思う」

俺達はガシツと抱き合つた。
チェックインの時間が来た。

「じゃ、行くよ」

「ああ、元氣で。My Brother」

10歩ほど歩いて振り返ると、ブライアンが大げさにお辞儀をしてきた。この野郎！俺もブライアンに向かって、思いっきり投げキスをしてやつた。ブライアンは両手を広げて呆れたように笑つた。

俺は右手の親指と人差し指でピストルを作り、ブライアンに向かって撃つ真似をした。ブライアンは右手で作った拳を左腰にあて、そのまま、右斜め前方に動かして構えた。その後、バットを握るようになります。右手の拳の下に左手の拳を添えた。そして、大上段に構えてから振り下ろした。そうだ、日本刀で俺を斬つたのだ。俺達は、互いが見えなくなるまで撃つ、斬る、の殺し合いをしていた。

さよなら、アメリカ。さよなら、ブライアン。

大学3年 7月13日

帰ってきた。自分の国だ。大好きな、大切な人達がいる国だ。父、母、姉、弟、せつ、マリア、恭子、その他、あ、安達もいたよ。（ま、安達はその他に含もう）そして、彰子。

大学3年 7月14日

昨日は帰国報告を色々な人にして後、疲れてすぐ寝てしまった。お昼前、彰子が来た。母が寿司を取ってくれたので、3人で食べながら話をした。彰子と母は2人で、俺が留守にしていた間のこちらでの出来事を楽しそうに話して聞かてくれた。まるで親子のようだった。全然顔は似ていないけど。

昼食後、彰子と一緒に、ちょっとだけ高い丘の上にある寺に行つた。

「ここにはよく来るの」

「たまにね。時間があるときは散歩がてら」

「散歩って言うには少しハードね。ハイキングよ」

「だが、景色がいいだろう。街と海が見渡せる」

しばらく眼下に広がる景色を眺めていた。天気が良かつたので、街の向こうに見える海の青も鮮やかだった。彰子が口を開いた。

「ヒロシ、お帰り」

「ただいま、彰子。十字架ありがとう。おかげで悪魔の誘惑に勝った」

「どんな悪魔だったのかしらねえ。小悪魔つてモノかしら？」

話題を変えねば。

「さあねえ。でも、寺と十字架は合いそうにないな」

話は尽きなかつた。離れていた時間などなかつたかのように、いつでも一緒だつたかのように、俺と彰子はそこにいた。埋めなればならないものなど1つもなかつた。それがかえつて奇異に感じられるほどだつた。

大学3年 7月15日

彰子と買い物に出かけた。久しぶりの街の様子が知りたかつた。
「やつと、2人の時間がそろつたね」
「時間だけはたつふりあるわね。これからどう使おうか？」
「ねえ、今度は2人で外国に行こう。どこがいいかな？」
彰子は歩きながら嬉しそうにあれこれ話しかけてきた。いささか答えに窮するものもあつたが、本当に嬉しそうだつた。

大学3年 7月16日

大学へ行つた。景山教授に呼び出されたのだ。
「岸和田君、率直に言つけど、ずいぶん楽しんだみたいだね」
「はい、すみません」
「いや、いいんだよ。君に、例えば、合衆国の教育制度や、家庭教育と学校教育の関係が何かを学んで欲しいつていつてもねえ。無理だろ？」
「はい。よく存知ですね」
「・・・・・。ま、それより、色んな人に出会い、色んな経験をする、そのことの方が大切なんだよ。君も実際にそう思うだろ」
「はい、そう思います」
「結構。じゃ、後期から死ぬ氣で単位を取れば大丈夫かな。いずれ何とか卒業できるよ。できれば中退はしない方がいいからね」

大学3年 7月19日

安達と久しぶりに飲んだ。馬鹿話をして、馬鹿なことをして、気分が良かつた。

駅に向かつて歩いていると、安達が立ち止まつた。

「おい、あれ。恭子ちゃんだろ」

恭子が男と歩いていた。安達が言った。

「彼かな？」

「さあ、1年会つてなかつたからな。よくわかんないけど彼くらいはいるだろ」

「けどよ、お前が向こうにいるときに彰子ちゃんが言つてた。『恭子は色んな人とつき合つけど長続きしない』って」

「大学に入つて最初の彼と3日で別れたのは知つてるけど、それからずっとそんなことしてたのか。何でだろ」

「具体的なことは知らないよ。彰子ちゃん、お前には話さなかつたのか？」

「ああ」

「そつが。お前に言つてもな、何の解決にもならないよな」

大学3年 7月20日

「ゆうべ見たぞ。男と歩いてたろつ。彼か？」

恭子に尋ねた。誰と歩こうが俺の知つたことじやないが、安達が言つたことが引っかかっていた。

「ゆうべまではね」

「ゆうべまではつて。お前、この1年でいつたい何人彼がいたんだよ？」

「さあね、20人くらい

「ちよつと多くないかい？」

「じゃ、ゼロ」

「は？」

「誰も好きじゃないのよ」

「じゃ、つき合つなよ」

「つか合つてゐるつもりはないけど、周りがそう言つから、知らない
うちにこいつの間にか『彼』ってことになっちゃつたのよ。大体『つき
合つた』なんて言われる筋合いはあつません。それこそ『彼』でも
ないくせに」

「ああ、そうだな。『めんなさい』ね、お節介で
知るが。やたらと腹が立つた。

大学3年 7月26日

恭子のことがどうも気にかかる。電話をした。

「おー、どこか行こつぜ。海か、山か、遊園地か、動物園か。テニ
スでもするか?」

「海。泳がないけど」

「わかった。明日朝8時、お前の家の近くの公園で待つてる」

「早いわねえ」

「遅いくらいで。渋滞に巻き込まれるだ。ぶつぶつ言つなよ

「うん」

大学3年 7月27日

やつぱり渋滞に捕まつた。世の人々よ、俺がめつたにしない遠出
をする日へくらい車に乗らないでくれよ。せめて金持つてゐる奴は今日
くらい有料道路使えよ。サイドブレーキを何度も引いたり戻したり
しながら恭子と話す。

「恭子、言いたくないけど、好きでもない男とつき合つてどうする
だ?」

「だから、つき合つてゐるつもりはないのよ。ただ、ちょっと仲がい
いだけ」

「男は単純だから、それでもうつき合つてる気になるんだよ」

「『つき合つ』つて、わたし、友達くらいにしか思つてないのに。」

男友達は1週間もたてば恋人に変わっちゃうわけ？馬鹿じやないの」

「男はみんな単純馬鹿なの」

「ありもしない恋愛なのに。蜃氣楼を見てるみたいね」

「お前よ、本氣で好きになつた男はいないのかよ」

「いるわよ」

「そいつとは何で別れたんだよ？」

「その人とは『蜃氣楼』すらないの。その人には恋人がいるから」「なんだよ、結局片想いか。でも、それじゃ仕方ないよな。別なのが見つけなきや」

「それが大変なのよ」

「そいつは忘れられないほどいい男なのか？」

「別に。普通の人」

「わかんないな。お前に書いて寄つてくる連中の中にもいい男はいるだろ。さつやと切り替えろよ」

「無理よ。忘れられない」

「じゃ、そいつに正直に気持ちを伝えろよ。振られたらあきらめがつくだらう」

「できるべりじならもうとつづいてしてるわよ」

「じゃ、きつぱり思いを断ち切れ。また、本氣で好きな男が現れるまで待つしかない」

「そうね、頭ではわかつてるんだけど。あーあ、どっちか死んじゃわないかな」

「穏やかじやないな。その、どっちかって、好きな男かその彼女かつてこと？」

「うん。その男が死ねば本当にあきらめがつくし、女の方が死ねばわたしにもチャンスが巡つてくる」

「こわいねえ」

「女はそれくらいのこと平氣で考えるのよ」

「恭子だけだろ」

「どうだか。姉さんだつてわかんないわよ」

「彰子はいつたい誰に死んで欲しいんだ?」

「さあね、3人くらいいるんじやない、ヒロシのほかに」

「何で俺が死ななきやならないんだ?」

「姉さんだけのヒロシが心の中にずっと生き続けるから」

「文学的過ぎて喉がかゆくなってきた。そんな愚かな願いは絶対に聞いてやらない。もし、俺が死んでもさつさと次の男見つけるように言つとこう」

「・・・・・でも、本当はどっちにも死んで欲しくない。その人にも、彼女にも」

「わかったよ。もう、いいつて。お前が割と普通の人で安心したよ。病的に色んな人とつき合つてるんじやないかつて、本気で心配してた。だが、男の勘違いは恐いぞ。気をつける。勘違いさせないのも女の実力だぞ」

「ありがとう。気をつける」

海に着いたのは10時頃だつた。砂浜はすごい数の人だつた。人を見ていたも仕方ないので、人はちょっとは少ない岩場に行つて、時間は早いが恭子が作つて持つて来てくれた昼食を食べた。その後、帰るまでには醒めるだらうと、ビールを飲んだ。恭子も飲んだ。「頼むからジュースしてくれ」と言つたのにビールを飲んだ。しばらくはおとなしかつたが、海に突き出した防波堤を歩いているとき、いきなり人格が変わつた。

「わたしは泳がないけどあ、せつかく海まで来たんだからあ、ヒロシは泳いでいいのにい。わたしに遠慮しないで、ほらあ」

笑顔で俺を防波堤から突き落とした。すぐ下が海水で良かつた。テトラポットや岩、コンクリートだつたら怪我してるぜ。防波堤の上でケタケタ笑つてゐる恭子。本当にこいつは苦しい恋に悩んでいるのだろうか?

防波堤に上がり、寝転がって服を乾かした。

太陽はどこにもかしこにも降り注いでいる。仰向けになれば視界いっぱい青い空、白い雲、鳥まで飛んでる。うつ伏せになれば、視線の先に青い海、水平線、船まで浮かんでる。時折風が吹いてくる。夏だ。これ以上はないほどの夏だ。

恭子は俺の隣に座り、どこか遠くを見ている。さつきとは別人だ。白い帽子から黒髪がこぼれて風に揺れてる。

「恭子、お前、そうしてりやいい女だな」

「今頃気付いたの？」

お互い顔は見ずに話した。

「いい女なんだから、焦るな。絶対いい男が見つかる。もしかしたら、お前の好きな男もいつか振り向くかもな」

「ヒロシなら振り向く？」

「ああ。言つただろ、男は単純馬鹿だつて。いい女には弱いの」

「その人は単純馬鹿じゃないわよ」

「それなら、尚更、お前の良さに気付くわ」

「あーあ、こいつしてると気持ちいい。ずーっとこいつしてみたい」

「うん、気持ちいい」

「こんなに長く話したの久しぶりね」

「そうだな、俺もこっちにいなかつたしな。何も解決するわけじゃないけど、話ならいくらでも聞くよ」

「いいのよ。ありがと。わたし、決めたから」

「どう決めたんだ」

「片想いを続ける」

「つらくないか？」

「つらいけど、時々は嬉しいこともあると思つし。そのうち、何とも思わなくなる日が来るわよ。それまでは今ままでいいわ

「そうか」

夕日を見てから帰った。恭子は帰りの車中でうとうとしている。

こつしておとなしくしてりや天使みたいなのに、ビゴーがどうなると世話を焼かせてくれるんだろうか。酒を飲んだら悪魔になるのはわかっているが。でも、何故か放つておけないのだ。彰子が俺に心配をかけることは全くない。どちらかと言えば俺が心配させてる。姉妹でこいつも違うものなのか、姉妹だからこそ違うのか。

大学3年 8月12日

「ねえ、あの口紅の色、良くない？」

彰子がどこかの化粧品メーカーのポスターを指しながら聞いてきた。

「俺は化粧品はよくわからないからなあ。口紅って大体赤じゃないのか？」

「赤だけじゃないわよ。ピンクとか、紫とか、オレンジとか、いっぱいあるのよ。でね、例えば同じ赤でも微妙に違う色がこれまたいっぱい。その中から自分に似合つ色を見つけるのって結構大変なのよ」

「女は色々と苦労するんだな」

「そうよ。苦労つて言つより努力だけど」

大学3年 8月15日

ブライアンから旅行中に撮つたビデオテープが届いた。きちんと編集してあつた。その中でも、特に印象深かつた南アフリカ共和国のビデオを見ながら、彰子にたくさんのこと話をした。新婚旅行で行きたいとは言わなかつたが。

「…………で、すごく綺麗なんだよ。俺が今まで一番感動した風景なんだよ。ビデオじやこれくらいだけど、実際はもつともっとスゴイ。自分の目で見なくちゃわからないよ。絶対見に行こうな。彰子も感動するつて」

「行き先が決まったわね。今度は絶対2人で一緒に行きましょうね。
約束よ」

大学3年 8月17日

デパートの化粧品売り場に決死の覚悟で足を踏み入れ、この前彰子が言っていた口紅を買つた。少し落ち着いた感じの、赤ワインのような色だった。

大学3年 8月18日

彰子、が、死んだ。

何が「2人の時間がそろつた」だ。何が「時間だけはたっぷりあ
る」だ。何が「約束」だ。うそじやないかよ。

彰子。

大学3年 8月19日

交通事故だつた。彰子は明け方、散歩に行くと言つて家を出た。そして、横断歩道を渡つているときに自動車にはねられたのだ。事故を目撃した人が彰子に走り寄つて行つたときには、もうこの世にいなかつたという。運転していた男は居眠りをしていたらしい。

ありふれた言葉だが、心には何もなかつた。ポツカリと、本当にポツカリと穴があいていた。

朝、香山家に行つた。マリアはもう教会へ行つていた。恭子はいた。2年前のクリスマス・イブに2人で歩いた道をまた同じように2人で教会へ向かつた。しかし、今日は2人とも黙つていた。恭子はずつと下を向いていた。

教会に着いた。マリアのところに行つて挨拶だけはしたが、その後、どう話を続ければ良いかわからず、口もつてないと、

「彰子に会つてやつて」

マリアの方から言つてくれた。

棺に眠る彰子に会わせてくれた。白い花がいっぱい入つていた。花に囲まれた、美しい、可愛らしい寝顔だつた。少し微笑んでいるように見えた。いつもの彰子だつた。いつ起きて「お早う」と言ってくれるのだろうか。ポケットからまだ渡していない口紅を取り出した。俺には上手に塗つてやることができない。マリアに頼んで、彰子の白い唇に塗つてもらつた。彰子の顔によく似合つ色だつた。マリアが口紅を差し出した。受け取つて棺の中に入れた。彰子の頬に触れてみた。冷たかつた。その冷たさが「わたしはもう起きない」と語つていた。胸のところで組んでいる両手、その左手の薬指には、鳥の羽をかたどつた銀の指輪がかすかに光つていた。心に何かが湧き起つた。悲しみだ。何もなかつたはずなのに、悲しみつてヤツがいきなり心に現れた。

いきなり現れたんだから、いきなり消えてもいいはずなのに、しばらく時間が経つても悲しみは消えなかつた。人々が集まつて来た。牧師が彰子を送る儀式を始めた。

「・・・・・この世での役目を果たし、天に・・・・・」

などと牧師が言つた。うそだろ、おい。彰子は俺との約束をまだ果たしてないぜ。俺達の約束つてのは「この世での役目」の中に入つてないのかよ。俺もまだ彰子にしてやつていなことがいっぱいあるぜ。それなのにどこかに行くなんてことがあるのかよ。大体、不公平だろ？ 彰子の神様よ、あんたんとこに召される人つてどうやつて決めるんだよ。くじ引きか？ 気まぐれか？ それとも、本当に役目を果たした者から順番か？ それなら、役目を果たした褒美にこの世に置いておけよ。彰子を置いておけよ。

悲しみは消えるどころか大きくなっていた。誰かが何かを言つて、大勢で何か歌つていた。すすり泣く声が聞こえた。すごく悲しいのに、涙は出なかつた。

葬送式が終わつた。人々が去り始めた。ふと前を見るとオルガンがあつた。

「彰子に歌を歌つてやろう」

これまで彰子に歌を歌つてやつたことは一度もなかつた。せめて、彰子が彰子の形を保つていてるうちに彰子のために歌いたかつた。"LET IT BE"を歌おう。「母」としか言わない彰子がそのときに限つてこう言つたので印象深かつた。

「"LET IT BE"って好きなのよ。歌詞がね、うちの『お母さん』のことみたいだなつて思うのよ」

鍵盤を押さえながら歌つた。そして、祈つた、「届け」と。絶望的な祈りだとわかっていても祈らずにはいられなかつた。祈つていないと、指が動かなくなるから、声が出なくなるから。

歌い終わると、大男の牧師が俺のところに來た。

「無駄に人生を終える人など1人もいません。彰子は何か善きものを残して旅立つたはずです。いつか、きっと、彰子が残してくれたものを見つけてください」

肩に大きな手を置いてくれた。優しい手だつた。

安達とせつがいた。安達が手招きしたのでそちらに行つた。

「馬鹿！あの歌はピアノの伴奏で歌わなきゃダメだよ。オルガンなん・・・・」

安達の声が聞こえなくなつた。安達は下を向いた。そして、顔を上げようとなかつた。

せつは何も言わずにハンカチを渡してくれた。俺は知らないうちに涙を流していたのだろうか。

「せつ、俺、泣いてるのか？」

そう尋ねたら、せつは後ろを向いた。背中が震えていた。

安達が泣いてる。せつが泣いてる。今、はっきりわかった。俺も泣いてる。彰子がいなくなつて、俺は泣いてる。やっぱり彰子はいなくなつたんだ。

しばらくして3人で外に出た。木々の縁が目に痛かつた。

マリアと恭子がいた。マリアが言った。

「今日はありがとう」

誰よりも悲しいのはマリアだろう。夫を「く」へし、今度は娘を「く」したのだ。それでもしっかりと彰子を送り出したのだ。強い人だ。どこに強さを持つているのだろうか。そして、時として、強さは悲しさを際立たせる。

恭子はつづむいたまま何も言わなかつた。

大学3年 8月20日

悲しい。何を見ても、何を聞いても悲しい。

だが、俺だけではない。せつも、恭子も、そして、誰よりもマリアが悲しんでいる。強がらなくては、俺は男だ。

大学3年 8月22日

怒りが湧いてきた。俺から、マリアから、恭子から、せつから、彰子を奪い、遠い存在にした男、何より、彰子本人の時間を突然止めた男が許せないと思つた。恭子からその男の住所を聞き出した。

恭子が言つた。

「ヒロシ、くれぐれも無茶なことはしないでね」

「それなら住所なんか教えるな」と思つたが、口には出さなかつた。そうだ、俺は何をするかわからない。男を殴るかも知れない。「土下座しろ」と言うかも知れない。家に火をつけるかも知れない。「人殺し」と罵声を浴びせるかも知れない。「お前も死ね」と迫るか

も知れない。ただ、行ってみなければならぬと思つた。

怒りが悲しみを超えていた。悲しみを忘れるには別の感情で心を満たさなくてはならない。激しい怒りが深い悲しみを追い出すのだ。丘の上の閑静な住宅街に男の家はあった。ひつそりとしていた。インター ホンのボタンを押そうと思つた。が、結局押せなかつた。門のところに”FOR SALE”の文字がプリントされた真新しいプラスチックの板を見つけたのだ。それでも尚、10mほど先の曲がり角から男の家を見ていた。玄関のドアが開き、奥さんらしき女人が姿を見せたかと思うと家の裏手に消えた。すぐに自転車を押して出てきた。門の内側で辺りをうかがうように見渡した。化粧つ氣のない疲れ切つた顔が俺の方にも向けられたが目は合わなかつた。彼女は通りに出てゆっくりと自転車にまたがり、しばらく地面を見つめていたが、思い切るようにペダルをこぎ出し、緩やかな坂を降りて行つた。

怒りが失せた。

彰子をはねた男も、その家族も、マリアも、恭子も、せつも、俺も、何かを背負つてしまつた。そして、それを背負つたまま、これからも生きていく、生きていかねばならないのだ。死ぬまでは。それにどんな意味があるのか定かではないが。そうだ、人間、死から逃れられないのと同様、生からも逃れられないのだ。

再び悲しみに侵されつつある心に、からうじてこう言い聞かせた。

「同じ生なら価値ある生を生きたい。いや、生きる。そうだよな、

彰子

大学3年 8月23日

恭子が電話してきた。

「昨日はどうしたの？」

「別に。ただ行つてきただけ」

「何もしなかつたの？」

「うん。何か悲しかった。俺も悲しかったけど、向ひつむ向ひつむ

悲しかった」

「そ、・・・・・ごめんね」

「なに謝ってるんだよ」

「何となくね

「恭子」

「何?」

「俺達はしつかり生きていこうぜ」

恭子は返事をしなかった。

夏が終わる。彰子がいなくなつた夏。

第5章 ↗ それぞれの道

大学3年 10月7日

教育実習が始まった。忙しい。

大学3年 10月9日

研究授業（という名の「いけにえ」授業）を俺が担当することになつた。ついてない。俺より優秀な学生は掃いて捨てるほどいるのに、何故、俺なんだ。何か間違つてる。

大学3年 10月11日

うちの大学の附属校の生徒は下手に頭が良いから、楽な面もあれば苦労する面もある。だが、頭が良いよりは性格が良い方が俺達教育実習生にはありがたいのに。つまり、それ程ありがたくない状況なのだ。

大学3年 10月12日

毎日、朝早く起きて、電車に揺られて学校に行く。そして、また、電車に揺られて帰り、遅い夕食をとつてから寝る。この繰り返しだ。

大学3年 10月17日

実習生とは言え、生徒達に接するときは先生だ。しかし、生徒達と接すれば接するほど、自分の力量不足を思い知らされる。知識や

授業の仕方が云々という前に、俺は本当に生徒が好きなんだろうか？先生になつてもいいんだろうか？そこから考え方直す必要があるかも知れない。

大学3年 10月19日

生徒から悩み事の相談にのってくれと言られた。多聞に漏れず、恋愛相談だった。普通は自分の体験の1つも話してやつて、「お前も頑張れよ」とか「ぶつかるだけぶつかれ」とか言うものなのだろうが、そんなことは何も言えなかつた。聞いてやるだけで精一杯だつた。

大学3年 10月24日

研究授業だ。よりによつて俺だもんな。附属校、特に俺の指導教官は可哀想だ。仕方ないよな、俺を選んじやつたんだから。まあ、俺のやり方でさせてもらつたが、授業後の討論会では侃々諤々のごいことになつた。知るか。その後、附属校の先生達との話し合い。大学の教授や助教授の顔もちらほら見える。つるし上げ状態だ。「今自分にできる精一杯の指導法と問題提起です」と発言し、「その問題提起とはどういうことか」と詰問された。正直に答えた。

「授業は生身の教師が行います。しかし、授業は1つのシステムであります。そして、今の僕には、教師がシステムを補い、システムを支えるために授業をしているようにしか見えませんでした。でも、システムというのは、教師、そして、何よりも生徒のために存在するべきなのではないかと。授業という場に居合わせる、教師と生徒を補完するのがシステムなのではないかと。だから、敢えて、一般的な授業の枠を逸脱しても構わない、というより、逸脱する気で授業を行つてみました。つまり、現在のシステムを無視して、システムの及ばない場を作つてみたんです。生意気なのも、力量不足

なのもわかっています。生徒にも迷惑だつたと思います。でも、やつてみなければわからなかつたので、やつてみました。もひ、2度とやううとは思いませんが

先生達は笑つた。

大学3年 10月27日

教育実習がやつと終わつた。長かつた。

実習が終わるに当たつての会で、実習生の多くは「生徒がますます好きになりました」とか「教師として生きていこうと改めて思いました」とか、臆面もなく言つていたが、俺はそういう気にはあまりならなかつた。変なのだらうか。

大学3年 10月28日

景山教授に呼ばれた。

「岸和田君、また、話題を作ってくれたね」

「はあ、実習の授業のことですか？」

「そうだよ。今まで学んできたことを少しでも生かして授業をしたのかね？」

「少しば。でも、学んできたことだけが正しい」とだとは思ひません

「ん

「ほう？」

「色々な方法があつていいはずです」

「名論にこだわるということかな？」

「総論は、正直、よくわからないんです。『教育とはかくかくしかじかだ』って言われたら、『立派だな』とか『理想的だな』とか『その通りだな』とか思うんですが、それを消化しようとするどどの方法も僕には合いません。完全に実行し切れません。だから、僕には各論も役に立ちません」

「それが君の言つた『システム』のことにつじるのかね？」

「はい、多分。僕が授業をするからには、僕のシステムで授業をすべきなんです。でも、教える技術そのものを習得する必要は痛感しました」

「結構。岸和田君、君のシステムを作りなさい。結果的にそれが誰かのものと同じだったとしてもいいじゃありませんか。でも、君のシステムを作るために、まずしなければならないことは何ですか？」

「既存のシステムを破壊することです」

「…………はつはつはつはつ」

「どうしました？」

「いや、『習得すべき』ことは習得すること』とか、『現在のシステムを研究・分析すること』つていう答を期待していたので」

「すみません」

「いや、君らしくていいんですよ」

大学3年 11月30日

学校教育だけが教育なのだろうか？

大学3年 11月16日

毎日大学に通つてゐる。当たり前のように。

何の疑いもなく、教員になるための勉強をし続ける多くの学友達。もちろん、全員が教員になれるわけもないが、少なくとも田指してはいるようだ。

俺も、色々な講義を聴き、演習を繰り返す。実験をし、レポートを書き、作品を作り、論文を書く。

まあ、充実した毎日だ。

大学3年 12月7日

日常の繰り返しに埋没している。それはそれで幸せなのかも知れない。

大学3年 12月21日

もうやめた。『まかし切れない。今の俺の心は、勉強では、日常では、目指すものでは癒せない。埋められない。悲しい。何もする気が起こらない。ここから始める。

大学3年 12月24日

クリスマス・イブだ。

気がついたら香山家へと足が向いていた。家の前で長い間ぼーっとしていた。恭子が出て來た。思わず物陰に隠れてしまつた。最後に恭子を見てから10年くらい経つているような気がした。本当に懐かしかつた。

恭子は教会へでも行くのだろうか。声をかけようと思つたが、かけられなかつた。恭子の後姿が拒んでいた。そして、輪郭がぼんやりしていた。曖昧だつた。

恭子も壊れている。そう思つた。言い様のない情けなさがこみ上げてきた。恭子だけは悲しみから守つてやりたかったのに。恭子のいない悲しみとはまた違う悲しみが生まれていた。

大学3年 12月25日

彰子を失つてから俺に付きまとつてるのは何だろ。

自分の心をどこかに取られてしまつた、そんな感じだ。彰子は他人ではなかつた。時間や距離を超えて、いつでも意識せずに分かり合える存在だつた。元々あるべきものが失われた、そうだ、喪失感

だ。

だが、昨日、恭子を見たときに感じたのは何だったんだろう。

大学3年 1月8日

恭子に会いたかった。会って、また、無茶を言って欲しかった。彰子は決して言わなかつた無茶を。

大学3年 1月11日

恭子の誕生日だ。それを口実に、思い切つて恭子に電話してみた。意外に明るい声だつた。

「…………ありがとう。明日はヒロシの誕生日ね。おめでとう」「ありがとう。明日ヒロシなりちょっと会わないか?」

「明日は予定があるの」

「そうか」

「「めんなさいね」

「いや、いい。ちょっと顔が見たかつたんだ」

「わたしも会いたいわ。でも、無理だわ」

「元気にしてるのか?」

「元気よ。ヒロシはどう?」

「いつもそこそこ元気だ」

「そう。じゃあね」

大学3年 2月2日

せつから電話があつた。

「ねえ、最近恭子さんに会つた?」

「いや」

「わたし、昨日たまたま見かけたんだけど、ひどいわよ。ギスギス

に痩せちゃって、ほんと、蹴つたら折れそくなぐらごだつたわよ

「前に電話したときは元気だつて言つてたぜ」

「つそに決まつてゐでしょ。恭子さん、彰子が死んでから全然元気がないわよ。だんだん弱つてきてるつて感じよ。まあ、ヒロシも元気なかつたけど」

「そりか。よほどショックだつたんだろうな」

「当たり前よ。でも、あれは異常よ」

大学3年 2月6日

マリアにお願いがあると呼ばれた。恭子は食事をとらず、病的に瘦せてしまつて、マリアが病院へ行くように言つても聞かないのだといつ。無理矢理にでも病院に連れて行くから手伝つてくれといつことだつた。

恭子に会つた。せつの言つ通りだつた。泣けてしまつた。

「恭子、どうしたんだよ。お前・・・・・・」

「何も食べたくないの。食べてもビビりせずぐもビビりし」

「恭子、病院へ行こいつ」

「いやよ

「お前、このままじや死んじやつよ」

「いいわよ

「力ずくでも病院に連れて行く。頼む、恭子、お前まで死んじやつたら、俺は・・・・・・」

「どうしていいかわからない

恭子はうつむいて、つぶやいた。

「わたしもどうしていいかわからないのよ

「とにかく、病院だ」

「行かないわ」

恭子を抱きかかえた。恭子は抵抗したが、あまりにも無力だつた。

本当に軽かった。そのまま、マコアの運転する車に乗せて病院まで連れて行つた。

大学3年 2月7日

彰子に何もしてやれなかつた。恭子にも何もしてやれない。ただ、そばに突つ立つてゐるしかない。

大学3年 2月10日

病院のベッドで恭子は横になつたまま雑誌を見ている。何も話さうとしない。

大学3年 2月13日

恭子が退院する。車で迎えに行つた。マリアと一緒に歩いてロビーに現れた。顔色も良く、体つきも多少ふっくらしていたが、相変わらず何も言わなかつた。

香山家に着き、荷物を下ろしトランクを閉めたとき、恭子がそつとさわやいた。

「ありがとう。・・・・・さよなら

大学3年 2月14日

恭子が初めて「さよなら」と言つた。「さよなら」と。じわじわと効いてくる。

大学3年 2月18日

恭子に電話した。マリアが出た。恭子に代わつてもりあつとした

が、

「恭子は出られないって。『めんなさい』

「そつとしておくしかないんですね」

「今はそうみたい。本当に『めんなさい』

「いえ、いいんです」

本当に「やうなら」なのか。

大学3年 2月19日

自分とは違うものがいる。それが自分に向かって来る。最初は受け入れるどころか、拒みさえするかも知れない。しかし、それでも向かって来る。何度も何度も。そのうちそれを認めて受け入れたら・・・・・。また、逆に認めて受け入れてもらえたら・・・・・。初めから自分の中にいるものに感じる一体感。互いをぶつけ合つてその果てに感じることができる一体感。どちらも同じか?対象として見つめる分だけ、自分とは違うものに最終的に感じる一体感の方が大きいのでは・・・・・。

理屈ではない。彰子が「俺の中」からいなくなつて、俺は悲しい。そして、恭子が「俺の前」からいなくなつたら、やはり悲しい。

俺は恭子が好きだったのか。でも、彰子が好きだったじゃないか。

大学3年 2月20日

気付かなければ良かつた。姉を、妹を、2人を好きだつたなんて。いや、俺は恭子が好きだったのかも知れない。彰子は好き嫌いを超えた存在だったのかも知れない。

大学4年になる前の春 3月8日

早春、雪の影も消えてしまう。俺の影は恭子から消えるのか。恭

子の影は俺から消えるのか。彰子の影はいつまでも消えないのに。

大学4年になる前の春 3月10日

景山教授から電話があり、駅で待ち合わせをした。何と、教授はカラオケに俺を連れて行った。

「今日は日本語の歌は禁止です」

そう言いながら、教授は古い英語の歌を次々と歌つていった。俺はカラオケが嫌いなので、ずっと教授が歌つていた。どうしても歌えと言われて、テンポが緩やかで歌いやすい”COUNTRY ROAD”と”HEY JUDE”と”TIME AFTER TIME”を歌つた。

3時間後解放された。その後、うつて変わつて静かなバーで酒を飲みながら、教授と話した。

「どうでしたか？カラオケは」

「はあ、僕はあまり好きではないので」

「僕の歌は気に入りましたか？正直に答えてください」

「”MY WAY”と”IMAGINE”は良かつたと思います」

「そうですか。少しは気持ちが良かつたんですね」

「はい」

「僕は、君の歌には感動しました。特にあの”TIME AFTER TIME”、いいですね。教育者はああでなくちゃいけない。いつまでも、いつまでも、何度も、何度も。岸和田君、君は自分の教え子を信じて、いつまでも待ち、何度も手を差し伸べることができますか？」

「わかりません。でも、そういう気になる教え子もいるはずです」「相変わらず正直ですね。でも、いいんですよ。少なくとも君は可能性を否定しませんでしたし。ところで、僕は歌っているときは大変に気持ちがいいんですよ。変ですかねえ？」

「いや、そんなことはないと思います」

「そうですか。カラオケは気持ちいい。でも歌つている人ばかりが気持ち良くて仕方がない。だから、カラオケは居合わせる人みんなが歌つてこそ意味があるんですね」

「そうですね」

「そういえば、プロの歌手はカラオケに行くんでしょうかね？」

「遊びでは行くこともあると思います」

「ほう、遊びでね。では、お金の問題を別にしたら、遊びと本気の違いは何でしょう？」

「歌で何を伝えるか、何が伝わるかじゃないでしょうか。プロなら遊びで歌つてもすごい」と思いますが、本気で歌えば聞く人の心に響くものがあると思います」

「伝えたい、伝えるべきものを、歌という媒体を通じていかに伝えられるかですね、プロの価値は。もし、プロがカラオケで本気で歌えば心に響きますかね？」

「恐らく」

「みんなが気持ち良く歌える、そして歌つていないときに聞く歌は心に響く。同じカラオケでもそんなカラオケだつたら素晴らしいですね」

「はい」

「今の教育現場では、限られた時間内に、居合わせる人みんなにマイクを回すことなどできません。だから、みんなが能動的に一度に気持ち良くなる頻度は低いのです。でも、プロがそこにいれば何人をも圧倒する感動はそこそこの頻度で生み出せるかも知れませんね。もちろん、いざれはみんなに歌つてもらわねばなりませんが。君だけの『システム』、見てみたいですねえ」

「先生・・・・・」

「カラオケも経験しないと、良さも悪さもわかりません。もしかしたら、君や僕のカラオケの歌を聴いて泣く人もいるかも知れませんしねえ。実際、君自身は嫌いだという君のカラオケで僕は感動したんですから。嫌いなこと、つまらないことの中にも、大切な何かが

あるのかも知れませんよ」

「はい、そういうこともあるかも知れません」

「結構。君は、何かを伝えようという意志を持っています。後は、伝え方の問題です。どうか、プロとして君の教え子に伝えてください。いや、感動させてください」

「はい」

「いいですねえ、”TIME AFTER TIME”。君のテーマ曲にしなさい」

「します。でも、僕は気が短いんで、待ちきれずに怒つたり飛び出したりするかも知れません」

「はつはつはつ。どちらかと云つて、それは君を受け入れる側の度量の問題ですね。ま、またカラオケにも行つてみてくださいね。カラオケで歌を練習してプロになる人もいるみたいですし」

カラオケは多分、一生好きになれないと思う。だが、俺は、素晴らしい先生に巡り会つた。

大学4年 4月10日

4年だ。奇跡的に卒業のめどがたつた。景山教授のご尽力のおかげだ。教授はこの春、異動でT大の大学院に移られた。ありがとうございました。

大学4年 5月7日

また教育実習だ。今度は普通の日本語が通じないホントの子ども、小学生相手の実習だ。憂鬱だ。だが、俺に研究授業や何かをさせようとは誰も思つてないだろう。もし、くじ引きで俺に当たつたとしても、絶対にくじ引きをやり直すに違ひない。

大学4年 5月9日

悪魔だ、子ども達は悪魔だ。よくわかつた。俺も悪魔になつてやる。悪魔同士仲良くやろいぜ。

大学4年 5月11日

子ども達と一緒に並んでいる。そして、俺の前には校長がいる。子ども達と一緒に校長室で叱られる教育実習生はそうはいない。担当の指導教官は「ハアー」とため息ばかりついている。

校長室から解放された俺に、指導教官が言った。

「理科室の水槽で子ども達と一緒に熱帯魚釣りをした教生は初めてです。叱る氣にもなりません」

大学4年 5月14日

駅から自転車で通勤する（実習生も一応通勤と言つのだ）途中、ウチの自動が2人、必死で走っていた。「遅刻するよお」と今にも泣きそうだった。仕方がないので、1人は俺の肩に手を置かせ荷台の前のほうに立たせ、もう1人は一台の後ろの方に座らせて学校まで連れて行つた。が、校門を入つたところで校長に見られてしまつた。校長は顔をヒクヒクさせていた。まずいなあ。

「校長、後で謝りに伺います。今は早く行かないと、ほら、遅刻になっちゃいますから、失礼します」

2人の子どもと一緒にそそくさと校舎の中に入つて行つた。

昼、思いつきり叱られた。今度は校長室に俺1人、いや校長と2人きりだった。かなり怖かつた。

教育実習の単位、出るかなあ。きわどいなあ。

大学4年 5月21日

教育実習最後の日だ。子ビも達が歌を歌ってくれた。下手くそな歌だつた。悪魔の歌。

ありがとよ、みんな。立派な悪魔になりなさい。

大学4年 6月6日

恭子に会つた。いや、恭子を見かけた。友達らしき女の子と一緒に買い物をしていた。声はかけなかつた。3か月前に比べればずいぶん元気そうだつた。笑つっていた。安心したが、寂しさも感じた。彰子が亡くなつてから、俺には笑顔なんか見せてくれたことはなかつた。

もう、恭子は俺とは関係のない人になつたんだろうか。彰子の死と共に、恭子との関係も無くなつたんだろうか。

彰子を失つたのと同じく、つらい。

大学4年 7月3日

マリアから電話があつた。

「ヒロシさん、恭子がね、アメリカに行くことになつたの。わたしのいとこがボストンにいるんだけど、そこに行くのよ。8月の終わりには発つわ」

「いつまでですか？」

「わからない。1年かも知れないし、10年かも知れない。ずっと向こうにいるかも知れない」

「え、もつ日本には帰らない気なんですか？大学はどうするんですか？」

「大学はね、やめるの。せつかヒロシさんに入れてもらつたのに、ごめんなさいね。多分、向こうで入り直すとは思うんだけど」

「そう・・・・・ですか」

「ごめんなさいね、混乱させちゃつて。でも、あなたにはお知らせ

しておかないとね。それと、わたしもイギリスに帰ることにしたの。もひ、香山も彰子も恭子も日本にはいりませんの、日本にいる必要がなくなつちゃつたから

「何て言えばいいのかわかりません」

「ごめんなさい。でも、今はこうするしかないみたい。恭子にしても考えに考えた末に出した結論なのよ」

「・・・・・わかりました。でも、僕は・・・・・」

恭子が好きです、と言いたかったが、飲み込んだ。恭子の母親には言えても、彰子の母親には言つてはいけないような気がしたのだ。「あなたみたいな息子も1人産んでおけば良かつた。落ち着いたら手紙を書くわ。元気でね、ヒロシさん」

「あなたも、お元氣で」

恭子が俺の目の前から消えたら、俺は耐えられるだらうか？多分、耐えられる。彰子が死んだときと同じくらいには。

大学4年 8月2日

大学院に行くことにしていた。大学入学時から漠然と考えてはいたが、教育実習時にその思いは決定的になつていて。このまま教師になつてはいけない。何より俺に教えられる子どもが可哀想だ。景山教授のいるT大の大学院を受けることにした。また受験勉強だ。

しかし、その前に一応、教員採用試験も受けた。親がうるさいのだ。大学院のことはまだ話していない。まあ、大学までは出してもらう約束だつたから、大学院ということになると自分で学費を出すことになるだろう。多分、家にもおいてもらえないだろう。覚悟はしている。塾とか予備校でアルバイトしよう。

大学4年 8月9日

教員採用試験の1次試験が終わった。学科、実技、小論文、どれもそこそこだ。他の受験生と違いどうでもいいと思っていた分、力が抜けていて、かえってできたかも知れない。本当にどうでもいいけど。

大学4年 8月18日

彰子が死んでから今田じょうじ一年だ。さすがに1年経つと悲しみも随分和らいでいる。時間は偉大だ。だが、彰子はまだ俺の心中に生きている。恐らく、一生心の中に生きているだろう。ほかの誰かを好きになつても、恭子が好きでも、それは変わらない。

彰子の墓に行つた。見晴らしのいい場所だ。十字架が刻まれた灰色の墓石の前に白い花が置いてあつた。そして、恭子がいた。

「恭子、来てたのか」

「ええ、やっぱりヒロシも来たのね」

「1年経つたんだな」

「うん。でも、もうずっと昔のことみたい」

「ああ」

しばらく目を閉じて祈りを捧げた。色々な想い出があふれてきた。出会い、チョコレート、公園、告白、大学合格、お互いの留学、海、銀の指輪・・・・・。

恭子が話しかけてきた。

「ねえ、いっぱい想い出した?」

「ああ」

「わたしも。生まれてからずっと一緒にだから、多分ヒロシの10倍以上想い出があるわ」

街を眺めていると、恭子が近寄ってきた。俺の横に並んで、街の方に顔を向いた。2人とも街を眺めたまま話した。

「行くんだる。よく見ておけよ。これが俺達の街だ」

「そうね、わたし達の街」

「いつか帰つて来るのか?」

「わからない」

「そうか」

「あのね、今田に来ればヒロシを会えると想つた。ヒロシを待つてた」

「会つてどうしようつて思つたんだよ?」

「心に刻みつけるのよ」

「俺はどうじょうか迷つてる」

「何を?」

「恭子を心に刻みつけようか、よそうか、迷つてる」

「なぜ?」

「刻みつけたら忘れられなくなる。いなくなるお前を忘れられなかつたら、つらいだけだろ?」

「でも、きちんと刻みつけよ」

どちらからともなく顔を近付けた。俺と恭子はキスをした。初めての、そしてさよならのキスをした。

恭子がささやいた。

「あの夜は左を向いてくれなかつたのに、今やつとキスしてくれたわね。ありがとう、『灰色の星』」

「恭子・・・・・」

「ヒロシは姉さんだけの星じゃなかつた・・・・・。わようなら

「わようなら」

恭子は微笑み、そして背中を向けて歩き出した。

俺は、立つたままで、ゆっくりと小さくなつていく恭子の後ろ姿を見ていた。止められなかつた。また、大切な人がいなくなつた。

大学4年 9月20日

教員採用試験、1次試験の合否がわかつた。「合格」だった。親

は大喜びしてるが、俺は憂鬱だ。

大学4年 10月18日

2次試験を受けた。全くやる気はないのだが、スーッと終わってしまった。

大学4年 11月25日

教員採用試験に合格してしまった。教育委員会は、いったい、どこを見て採用してるんだ。ふざけてるぜ。

父親は笑ってる。母親は涙ぐんでる。あらま。どう責任取ってくれるんだよ。

大学院 4月8日

今日から丁度の大学院に通う。景山教授のところだ。

昨年、秋、教員採用試験に受かっていたが辞退した。親は激怒したが仕方ない。その日のうちに荷物をまとめて、とりあえず安達のところに転がり込んだ。学習塾でアルバイトしながら、卒論を書き、大学院の受験勉強をした。合格がわかつてからすぐにワンルームを借りた。挨拶をしに景山教授のところに行くと、こう言われた。

「やつと君から連れられたと思ったのにねえ、来ちゃいましたねえ」

研究の日々が始まる。金も稼がなきやならない。予備校・塾でのアルバイトをいくつか掛け持ちする。

安達は家電メーカーで営業をしている。本当は出版社に入りたかったのだが、就職試験を受けた2桁の出版社全てに振られて今の仕

事をしている。「いつかは出版社、いつかは編集長」といながらも、あちこちの小売店を飛び回っている。

せつは内科医になるために頑張っている。「2年後に国家試験、その後研修医として修行。一人前になるにはまだ何年もかかるわ。おばさんになっちゃう」と言いながらも、充実した日々を送っているのだろう。

それぞれの春。それぞれの道・・・・・。

大学院 4月10日

町の学習塾と大手予備校、2か所で講師をすることになった。学校とは違つてなかなか面白い。

大学院 9月7日

マリアから手紙が来た。イギリスで落ち着いたらしい。恭子はこの9月からアメリカの大学に通い始めたということだった。恭子。遠い名前。でも、決してなくならないであろう名前。黄昏ても仕方ない。俺は俺の闘いを続ける。

大学院終了 3月3日

論文が通り、はれて修士課程を修了。一応俺もマスターだ。4月からは私立の小学校で先生をする。

小学校教師 4月9日

異常だ。この小学校は。世間的に見ればお坊ちゃん、お嬢さんの学校かも知れないが、実際の子ども達はいたつて普通（普通に悪さ

もすれば、喧嘩もするし、泣くし、笑うというレベルでの普通（普通）なのだ。何が異常かと言つと、先生達なのだ。「この小学校は名門」なのだ「ウチは上流階級の子女をあずかっているのよ」という、どうでもいいプライドが見え隠れ、じゃない、見え見えしているのだ。

俺なんか本当にプライドが高いから何でもできる。必要があれば裸踊りだつてするし、頼まれれば靴だつて磨いてやるぜ。だつて、何をしようが俺は俺で、他人がどう思おうが俺という人間に変わりはないんだから。自分に自信を持つ、それが本当のプライドで、他人からどう思われるかはプライドの本質から外れている。そういう意思なんか？（誰に向かつて尋ねてゐるんだろう）

小学校教師 4月13日

掃除の時間に遊んでいる子どもを見つけたので叱つたら、他の先生がグチグチ言つてくれる。おいおい、どうなつてんだ。

「まあ、ウチはいいとこの子女が多いから、掃除なんてしたことないのよ。家政婦さんなんかがやつてくれてるから。掃除の必要性なんて感じてないのよ。実際必要ないしね」

「掃除なんて单なる作業はね、どうでもいいんですよ。勉強してくれば」

「何だよ、单なるサギョウつて？「サシスセソ」か？呆れてものが言えない。」

小学校教師 4月16日

昼食の時間、嫌いなものは全く食べない子どもがいた。もしや、と思い、様子を見ると、クラスの大半が食べ残している。理由を聞くと、「まずい」「嫌いなものが入つてゐる」「お腹がすいていな」からだそうだ。

嫌な予感はしていたが、同僚に話してみると、
「まあ、当たり前のことですね」
にべもない。

小学校教師 4月17日

ぶち切れた。食べ物を食べないのは本人の勝手だが、食べ物を投げておもちゃにするのは許せない。ありとあらゆる人、物に対しても失礼だ。叱りとばした。が、やはり、問題になつた。知るか。

大体、本当にいとこの子どもは食事のマナーくらい身につけてるぜ。はしもきちんと使えれば、好き嫌いは言わないし、最後まで残さずにきれいに食べる。もし、残すことがあつても申し訳なさそうにしてるぜ。食事中に立ち歩くなんてことはしない。ましてや、食べ物を投げるなんて真似は絶対にしない。

もし家で食事のマナーを教えていないのなら、気付いた大人が注意したり教えてやるべきだろ？それは教師や学校の問題ではなくて、社会として当然のことではなかろうか。

小学校教師 4月25日

親達と話していく気が狂いそうになつた。他人と話すときには、どうして自分の子どもを「マサノリちゃん」なんて言えるのだ？家では何とでも呼んでくれ。「マーちゃん」でも「マサノリさま」でも。しかし、他人に「マサノリちゃん」はあるまい。「愚息」とまでは言わなくとも「マサノリ」や「息子」くらいにしておけよ。

「ウチのマサノリちゃんが・・・・」「カナエちゃんはね・・・」
「・・・」「ツツクンは」「ゴリちゃんが」「ピーチちゃん」「マリマリ」
「・・・」。みんな母親、いや、馬鹿親の口から出でてくる言葉だ。話す相手は俺、つまり担任教師。
ふざけるな！

小学校教師 4月26日

親も親なら子も子だ。

「ウチのくそババアが」「はげ親父が」「サチコ（母親の名前）さんが」「ツトム（父親の名前）が」「あいつ（父親か母親）が」「ご兩人（父親と母親）が」……。

小学生だ、「父」「母」と言え、とまでは言わないが、いったい自分の親を何と思つてこいつ言い方ができるのだろうか。

小学校教師 5月7日

何が名門だ。何が一流だ。何が上流階級だ。

校長以下、教師が変だ。何か勘違いしてる。親が勘違いし、子ども本人が勘違いし、本来、その勘違いに気付かせてやるべき教師までが勘違いしてるんだからどうにもならないぜ。

小学校教師 5月10日

もうやめた。こんなろくでもない学校、辞めてやる。

校長室に辞表を出しに行つた。PTA会長もいたが構うものか。「校長、短い間でしたがお世話になりました。辞めさせていただきます。では」

辞表を机の上に置き、出て行こうとしたら、PTA会長が声をかけてきた。

「ちょっと、待ってください。お辞めになる理由は何なのですか？」
「一身上の都合です」

と答えると、

「いいんですよ、正直に言つてみてください」

景山教授みたいなことを言つ。校長はおろおろしているが、わか

つたよ、正直に話してやるつ。

「この小学校に通う子ども達は普通の子ども達です。でも、この学校の先生達は何か勘違いして、子ども達にちやほやして、子ども達を甘やかしています。だから、子ども達も自分達は何か特別なんだ勘違いをしているんです」

校長が口をはさむ。

「岸和田先生、それはないでしよう。ウチは実際に立派なご家庭のお子さんばかりおあずかりしてゐるんですから」

「は？」

「だから、ウチはね、イギリスの上流階級が子女を・・・・・イギリスの上流階級がどんな教育をしてるかわかつて口きいてんのか、この日本人は。彼らはまず、自分達には、恵まれた生まれの者には、「責任」があるってことを子どもに叩き込むんだぜ。もちろん、上流階級全てが立派とは言わないが、少なくとも、上辺だけ飾るような愚かなことはしない。マリアを見ていたらよくわかる。頭にきた。

「わたしはあるイギリスの貴族階級出身の『婦人を大変よく存じ上げております。わけあって日本にいらっしゃいましたが、彼女は、ご自分の2人の娘さんに、まず、日本の社会で守らなければならぬ義務をお教えになりました。もちろん日本語を第一とし、英語は後に勉強するように配慮なさいました。そして、他人に対する優しさ、気遣いがマナーの本質であると、愛情をもつて、それはそれは厳しく、優しくお教えになりました。そして、人間には果たすべき責任があることも。ウチの学校の先生達とは全く違う教育でした。」

「君、失礼じゃないのかね！」

いつの間にか校長と喧嘩してゐるぞ、俺は。

「いいえ、少なくともその方は『自分のお子様に『ちやん』はおつけになりません。悪いことをすればお叱りになり、良いことをすればお褒めになりました。目に余れば、よそのお子様でも注意をされました。お子様が大きくなりテーブルマナーを身に付けるまで

は、外食にお連れになることもありますでした。その方のお子様は、食べ物の好き嫌いは言いません。食べ物を粗末にはしません。挨拶もきちんとします。自分の親を馬鹿にするようなことは言いません。掃除も熱心にします。勉強も頑張ります。自分の主張はしますが、他人の話も聞きます。はい、いいえと返事も・・・・・・

「わかりました」

PTA会長が俺をとめた。

「岸和田先生、でしたね。いやあ、親としては耳が痛いことばかりです。おっしゃりたいことはわかりますよ。色々と考えてみなればいけませんねえ。自分で言うのもおかしなことですが、確かに、この学校には金持ちの家庭の子女は多くても、本当の意味で品のある家庭の子女は少ないかも知れませんね」

話のわかる会長だ。会長だけのことはある。この人のお子さんはマリアの娘達並みかも知れない。

「言い過ぎました。すみませんでした。失礼します」

出て行こうとすると、会長がまた尋ねてきた。

「岸和田先生、あなた、下のお名前は？」

「浩です」

「岸和田浩・・・・・・。さつきの、その、イギリスの『婦人は、もしかしたら、『香山』とこうお名前ではないですか？」

「はい。ご存知なんですか？」

「ええ、一番上の娘が中学から女子にお世話になつていましてね。同級生に『香山彰子』さんがいらっしゃいました。そうですか、あなたが香山さんの・・・・・・。岸和田浩という名前、娘から何度も聞いていますよ」

「はあ、わたしは存じ上げないのですが」

「ははは、そうでしょうね。でもね、吉村せつさんと香山彰子さんは娘の学年では有名でね、そのお2人と仲の良い、岸和田浩君の話もよく出ていましたよ」

「馬鹿なことばかりしていましたからね

「あなたがそうだとはね。娘に教えてやらなくては。ああ、彰子さんはお気の毒でしたね」

「いえ」

校長はわけがわからず、会長に尋ねた。

「何ですか、その香山さんとか娘さんとか？」

「いいんですよ、校長。こっちの話です」

思わずこうでマリアと彰子を知ってる人に出会ってしまった。

驚きだ。だが、ここは俺のいるべき場所ではない。

「それでは、ご迷惑をおかけいたしました。失礼いたします」

校長室を出た。せいせいした。

最後にあの会長に会えて良かつた。

さあ、これから何して生きていこうか。

無職 5月17日

塾の常勤講師を募集していたので履歴書を送つたらすぐに面接となつた。「栄明塾」という名の中堅の進学塾だ。

塾長が尋ねた。

「どうして小学校をひと用でお辞めになつたんですか？」

「うーん、答えにくいなあ。

「色々と合わなくて。校長とも喧嘩しましたし」

しまつた。言わなくともいいことを言つてしまつた。取り繕わねば。

「つまり、小学校 자체が僕には合わないんです」

「で、その合わない小学校にどうしてお入りになつたんですか？」

この人は割と追求してくるなあ。

「カラオケみたいなものです」

「カラオケ？それが小学校とどういう関係があるんですか？」

「話すと哲学的になりますからやめましょう」

「カラオケと小学校と哲学ねえ」

そりや、理解できないだろ? 俺と俺の「先生」以外には。

無職 5月20日

栄明塾に採用していただいた。6月から中学生、高校生の文系教科を担当することになった。

無職 5月27日

せつは医師の国家試験に受かり、研修医として母校の「医大の附属病院に勤めている。内科のお医者さんだ。

「俺は塾の先生、お前は病院の先生。同じ先生でも響きが全然違うよな」

「今更何言つてるのよ。研究者にも、普通の学校の先生にもなれたのに。それには、わたしは言ってみればどつか壊れちゃった人を『治す』先生だけど、ヒロシは人を『育てる』先生でしょ。どっちが創造的な先生かしら」

「そういう考え方もできるな」

「でもね、自分の思いをそのままぶつけたらダメよ」

「ああ、わかる。俺の持つてるものをそのままぶつけたら、たいていはつぶれるよな。受け取るだけの気力や能力がある生徒ならいいけど。だから、生徒に対しては自分をセーブすることは覚えた」

「生徒に対してはね。ほかのものもつぶさないようになさいよ」
「さあね。それはこれから覚えるよ。お前も患者さんをつぶさないよつにしろよ」

「患者をつぶすって、どうするの?」

「色々あるんじゃないか。ただの胃潰瘍なのに、『胃がんの疑いもあるのかな』ってわざとひとり言のよつにつぶやいて患者に聞かせるとか、何でもないのに、患者さんとカルテを見比べながら首を傾

「見てみるとか」

「よくそんなことすげに思ってられないわね。やつぱり性格に問題があるわね」

「治してみるか？」

「内科医の仕事じゃありません」

「何言つてんだよ。医療もトータルで考える時代だろ。精神科医でなくとも心のケアはするんだろ？」

「心のケアはしても、ねじ曲がった性格をまっすぐにするなんて、わたしには無理。どちらかと言つと教育の仕事でしょ」

「そうか。まあ、お互ひ頑張りうせ。病院の先生」

「そうね、塾の先生」

6月17日

せつは研修医の期間を終えてある総合病院に内科医として勤めている。

「ようやく本当の医者よ。でも、まだ一人前つて言つには早いわね。もつとしなきやならなにこことがあるわ」

相変わらず立派だ。

安達のアホは、家電メーカーを辞めてある出版社でアルバイトをしていた。で、何故か仕事ぶりが認められて、この度、正式に社員として採用された。奇跡だ。

「やっぱり、才能つてのは見る人が見ればわかるんだらうな」とは安達の弁だ。何の才能だよ。

だが、そのアホが恭子を・・・・・。

6月18日

せつが電話してきた。

「ちょっと、安達君から聞いたわよ。恭子さん帰つて来てるんだつて? ヒロシ、どうするのよ?」

「何をどうするんだよ?」

「知らないわよ。ヒロシ自身のことじよ

「そうだな」

「のんきね。会つへりて会つてみれば?」

「そりしてみようかな」

「あまり乗り気じゃないみたいね」

「ああ。今更つて気もするし」

「会わない勇気もないでしょ」

「どうかな」

「ヒロシ、大学4年のときと、大学院のとき、つき合つてた子がいたじゃない?」

「ああ」

「両方とも長続きしなかつたけどね」

「何が言いたいんだよ」

「心の奥底では恭子さんのことが好きなんだろうなって」

「よくわからない」

「わかつてゐくせに」

6月24日

安達に聞いた「M」の日本支社を訪ねてみた。本当に恭子がいた。少しなら時間が取れると言つ。

ロビーに恭子が現れた。俺の前の椅子に座つた。2人ともしばらく何も言わずに互いを見ていた。声にならない思いがこみ上げてきた。俺が先に沈黙を破つた。

「久しぶり。元気だつたか?」

「ええ、ヒロシは?」

「見ての通り、元気」

「よくここがわかつたわね」

「安達が見かけたつて教えてくれた」

恭子はアメリカで大学に入り直した。在学中に研修で受け入れてもらつたことが縁で「M」と契約しているという。アメリカでの仕事が一段落し、しばらくは日本で仕事をするのだという。状況にもよるが、数か月から1年でまたアメリカに戻るらしい。景気が良く

ても悪くても証券業界は忙しいみたいだ。

日本では、前に住んでいた家はもうないので部屋を借りているといつ。せつが勤めている総合病院の近くだった。

「ヒロシは塾の先生をしているのね。大学院に入つたつて聞いてたから、てつくり学者になる道を選んだと思つてた」

「色々やってみないとな」

「ミイラ取りがミイラって言つ言葉があるじゃない? そこそこしないと、本当にミイラになっちゃうよ」

「そうかもな」

最後に会つてから何年も経つてゐる。だが、恭子は変わつていない。少なくとも外見は。時間が後戻りしそうだつた。

受付の女の子が恭子を呼んだ。恭子は仕事に戻らなければならぬようだ。携帯電話の番号を教え合い、2人とも立ち上がつた。

「お前・・・・・・」

「何?」

「まあ、いいや」

つき合つてゐる人はいるのか? 好きな人はいないのか? 尋ねたかつたが、止した。

「じゃ、わたしが訊くね」

「ああ」

「結婚は?」

「してない」

「恋人はいるの?」

「いない」

「グズグズしてると、おじさんになっちゃうよ」

「大きなお世話だ」

「そうよね。じゃ、仕事があるから。ヒロシ、すいべ嬉しかつた。すごく懐かしかつた」

恭子が行こうとしている。

「恭子・・・・・」

恭子の名を呼ぶのはいつたい何時以来だらう。口が上手に動いていないような気がした。

「恭子、お前、幸せか？」

「少なくとも不幸じやないわね。だつて、ヒロシのことが懐かしく思えるんだもの」

6月27日

3時過ぎ、せつが血相を変えて塾に乗り込んで来た。

「ちょっと、恭子さん、結婚するの？」

「いや、初耳だ」

「今日、夜勤明けでお休みだつたのよ。でね、お昼食べに入った店で恭子さんに会つたのよ。すごくカッコイイ男の人と一緒にだつたのよ。背もあなたより10cm以上高いし、顔もいいし。同じ会社の人だつて。きっと給料もいいわよ。しかも、恭子さんのアメリカの大学時代からの知り合い。英語も日本語もペラペラ。どう考えてもあなたに勝ち目はないわよ」

ちょっとと落ち着けよ、せつ。俺だつてそいつより10cmもこじんまりまとまつてて、目も鼻も口もある。違う会社の人で、給料だつてもらつてる、一応。しかも、恭子の日本時代の知り合いだし、日本語はペラペラだぜ、多分そいつより上手い。・・・・・ああ、みじめだ。

「そいつはアメリカ人か？」

「国籍はね。でも日系の3世だとか」

「名前は？」

「山添、何だつけ。カードをもらつたんだ」

せつはバッグからコーリングカードを取り出した。

「えつとね、山添カズマだつて」

「ヤマゾエカズマか。画数は何画だ？」

「そんなことどうでもいいのよー。『恭子』、『カズマ』って呼び合

う仲よ。大体、この山添さんが日本に転勤になつたのを、恭子さんが追いかけて来たらしいじゃない」

「そんなこと知るか！俺も恭子とファーストネームで呼び合つし、恭子だつて俺がいるから日本に帰つたのかも知れないじゃないか。第一、何で2人が結婚するつてわかるんだよ」

「おめでたいわねえ。山添さん、『恭子には、そろそろ日本でいう、給料の3か月分つてヤツを贈ろうかなつて思つてるんです。僕もしばらく日本にいるし、祖先の国の習慣通りに『ゴールするのもいいかな』とか言つてたわよ。恭子さんも二コ二コしてたし。あれはどう考えたつて結婚前のカツブルよ』

「そういう会話をしたんなら、それを早く言えよ」

「いいの？ヒロシ』

「いいも悪いも、恭子がそいつを好きなら仕方ないよな

せつはいきなり冷静になつた。

「あなた達、離ればなれになつたとき、お互の思いは知らなかつたんだつけ？」

「いや、お互わかつてた』

「やつぱり、日本とアメリカに離れてた月日が大きかつたのかな。あなた達もそれには勝てなかつたか」

「時間なんて問題ではないと思つたが、敢えてこう答えた。

「まあね、人は変わる。人の心も変わる」

「ヒロシの心は変わつちやつたの？」

「どうだらう、でも・・・・・・」

「でも、何？」

「恭子は色んなこと考えたあげくアメリカに行つたんだ。これは恭子の望んだ結果じゃないのか。それに・・・・・・」

「それに？」

「俺も苦しんだ」

気分がむしゃくしゃするまま飲みに出た。酔いたかったので、ウォッカ、テキーラ、ウォッカ、テキーラ、ウォッカ・・・・と順番に飲み、フワフワしてきた。

店を出て歩いていると、向こう側から歩いて来た女人が俺のほうをじつと見てる。誰だ? もしかして俺に気があるのか? まあ、どうでもいいや、誘つてみよ!。

「あの、もしよろしければ一緒に飲みませんか?」

「うふふふふ、イヤですねえ」

「あ、イヤですか。僕は全然イヤじゃないんですけど」

「何をおっしゃるの? 酔つてらつしゃるんでしょ、先生」

「どうして僕の正体を?」

「うふふふふ、しつかりしてくださいよ。坂根ですよ。ほら、先生のところで世話になつてた坂根健志の母ですよ」

「お、か、あ、さ、ん? 何てことだ。よりによつて教え子の母親を誘おうとした。あ、もつ誘つた後だ。

「あ、健志君のお母さん。すみません、てつかり・・・・・・」

「てつかり、何ですの?」

「こんなとき何て言えばいいんだろうか?」

「てつかり、大学生さんかと」

「まあ、お上手、うふふふふ」

その、「うふふふふ」つって、やけに色っぽく笑うのやめてくれない。

「うふふふふ、先生、女子大生がお好みなんですか?」

「いえ、そうではなくて、若い女性の代名詞というか・・・・・・」

「それなら、女子高生つて言つてくださいよ、うふふふふ

それは何が何でも無理があるだろ。

「いえ、お母様はそこまで幼くないでしょ?」

「うふふふふ、ものは言いや様ね」

結局、坂根の母親の経営する店で何杯かただ酒を飲ませてもらつ

た。

「先生、今晚のことは秘密にしておきましょうね
だつて。別に誰に話してもいいけど。

6月29日

酔つて坂根の母親に声をかけた話を北にした。北はウケていた。
「僕も同じようなことがことがあるんですよ。あまり言いたくない
けど」

「何ですか？教えてください」

「僕もね、酔つてね、声かけてきた女の子をホテルまで引っ張つ
て行つたんですよ。だつて、向こうから声かけてきたんですからね」
確かに、北は、思考が結論に向かつて突つ走るタイプだ。酔つて
りやなおさりだらう。

「で、初めは笑つて『冗談はやめてください』とか言つてた女が、
ホテルに近付くと抵抗し始めたんですよ。僕にも意地がありますか
らね。力ずくでホテルに連れて入つたんですよ」

「どんな意地だよ。犯罪じゃないか。

「ホテルに入つたらひと安心じゃないですか。でね、落ち着いてよ
く聞くと『先生、やめてください』って言つてるんですよ、その女
が」

普通は落ち着く前にちゃんと聞くつて。

「顔をよく見たら、ウチの塾の、高2の市川だつたんですよ。ハハ
ハハハ」

笑い事じやないだらう。

「・・・・・それつて、ずいぶん氣まずくないですか？」

「別に。よくある勘違いですよ。ことには及んでいないし。今も市
川のクラスで授業があるけど、市川に気合が入つてないときには、『
一緒にホテルに入った仲だよな』ってさわやかと、やたら必死で問
題に取り組むんですよ」

この人の「勘違い」って、どこからどこまでを指すんだろう。
だが、何故か、この人だけは敵に回したくないと思つた。

6月30日

元塾生が亡くなった。19年の人生を終えた。

同僚の杉下と一緒に葬式に参列した。我慢していたが、耐え切れず泣いてしまつた。ご両親の心情、他の身内の方々の心情、友人の心情、そして恋人の心情、何より、本人のことを思うとダメだった。涙が勝手に出て來た。

一旦帰宅し、着替えて塾に行つたら、杉下が「岸和田先生が泣くなんて思わなかつた。びっくりした」なんて言つてるのが聞こえた。俺はどういう人間だと思われてゐるんだろうか。そういう人間だと思はれてるんだろうな。

だが、自分の教え子が犯罪者になることと、自分より先に逝くことが、先生として一番悲しいことだ。

安らかに眠れ。

7月1日

雨が降つてゐる。憂鬱だ。

恭子に会つべきではなかつたのかも知れない。過去のままにしておけば良かつたのかも知れない。

7月4日

おれは、やはり恭子が好きだ。ずっと好きだつた。その恭子がほかの男と結婚するかも知れない。それは仕方がないことだ。だが、

最後に自分の思いを伝えるべくこはじむじい。

恭子に会つた。

「恭子、今更つて気もするけど、言えるついで言つておく。お前が人妻になつてからじや言えないからな。俺はお前が好きだ」

「待つてよ。その『人妻』つて何よ」

「お前、山添つて人と結婚するんじゃないのかよ。山添さんを追いかけて日本に来たつて話も聞いたし」

「山添さんとつき合つてゐわけじゃないし、日本に来たのもたまたまよ。でも、山添さんはすこい人なんだもの、好きは好きよ。一番好きじやないけどね。幸せにはしてくれると思つ。だから、プロボーズされたらどうするかわからぬわ。受けけるかも」

「そんなの幸せじやないだろ」

「あなたにわかるの？ 未来がわかるの？ わかるわけないでしょ。もしかかるなら、姉さんの命を救えたでしょ」

「何も言えなかつた。

「ヒロシ、もうこれ以上苦しめないで」

恭子の言葉に打ちのめされた。

7月7日

恭子に電話した。打ちのめされようが嫌われようが伝えずにはいられなかつた。いきなり話した。

「恭子、俺とお前とはちょっと変わつた関係だ。それはよくわかってる。互いに悩んで、苦しんで、今はそれぞれ自分の道を歩いてる。でも、そんなことはどうでもいい。今の俺はお前が好きなんだ」「あなたにはどうでもいいことでも、わたしには大変なことなのよ」「お前、俺が嫌いなのか？」「いいえ」「いいえ」

「じゃ、山添さんが本当に好きなのか？」「わからない。でも、あなたを見てると、あなたと一緒にいると、

想い出すのよ

「何を？」

「あなたの心にも棲んでるでしょ」

7月8日

山添カズマさんが俺を尋ねてきた。勝利宣言でもかましに来たのか？会いたくないけど、会つた。挨拶の後、山添さんが話し始めた。「恭子にプロポーズしました。一週間以内に返事がもらえます。その前にあなたにお会いしておきたくて。恭子からよくお名前はうかがつていましたし」

「はあ、でも、僕に会つても仕方ないでしょ。僕は恭子に振られてるんですから」

「振られても、あなたは恭子が一番好きだった人なんでしょ？わかりますよ」

「どうでしょ？ 好きでも何でも振られちゃおしまいでしょ？ が。それとも、恭子があなたを一番好きでないとおイヤですか？」

「いいえ、何番目でも構いませんよ。僕の一番は恭子なんだから。僕には恭子を幸せにする自信があります。恭子がプロポーズを受けてくれさえしたらね」

「大丈夫でしょ」

「さあ、どうかな。もし、断られるにしても、その原因くらいは知りたいでしょ。だからこうしてあなたに会いに来たんです」

「でも、恭子はあなたにプロポーズされたら受けるかもって言いましたよ」

「それから気が変わつてなければいいけど。でもね、好きだからわかるんです。恭子は幸せになろうとしていません。心がないって言うか。まあ、僕は恭子を幸せにできたらどうでもいいんです。できれば、恭子と幸せになりたいけど」

「幸運を」

「あなたにそう言われるのもおかしな気分ですね。でも、ありがとうございます」

「う

7月14日

山添さんに会いたいと言わされた。夜、山添さんの行きつけの店で会つことになった。授業後に駆けつけると、山添さんはもう飲んでいた。

「すみません、呼び出しちゃつて」

「いえ、おひつてくれるんでしょう?」

「もちろん。今日ね、恭子の返事を聞きに指定された場所に行つたんです。どこだと思いますか?」

「わかりません」

「教会です」

「教会?」

「はい、教会。そこで式を挙げるんだなって思いました。いい感じの教会でした」

もう挙式の話かよ。山添さんが続ける。

「そこで、恭子が話をしてくれました。以前、クリスマス・イブに好きな人と2人でそこを訪れたこと。いつか、その人に思いが伝わるようになつたこと。でも、その同じ教会でお姉さんを葬送したこと。そのときに、好きな人への思いも封印したこと」

「・・・・・」

「そして、見事に断られました」

「そうですか。なんて言つていいのかわかりません。可哀想だなとも思つし、ザマニアロとも思つし」

「はつはつはつ、正直な人ですね」

「すみません」

「いえ。次はあなたの番ですね。でも、あなたは僕以上に大変ですよ。さつき言つたように、恭子は自分の心を封印しています」

「封印ですか？」

「そう。恭子は封印とは言わなかつたけれど、封印です。封印つて何のためにするかわかりますか？」

「いいえ」

「いつか誰かに解かれるために封印するんです。頑張つてください。幸運を」

この山添カズマは案外いい男かもしれない。いや、絶対いい男だ。俺が女なら、俺みたいな男よりこいつに惚れる。何か、あらゆる点で俺に勝つてる気がする。

「山添さん、今夜はやっぱり僕がおじります。飲みましょう」

山添さんと一晩中あちこち飲み歩いた。山添さんと別れた後、始発電車に乗り「教会」に行つた。門から続く煉瓦の小道、庭の木々、白い美しい建物。妙に懐かしかつた。

7月16日

恭子に会つた。

「山添さんのプロポーズを断つたんだつて？」

「ええ」

「あんなすごい男、滅多にいないぜ」

「山添さんが云々つて問題じやないの」

「何が問題なんだ」

「わたしの心」

「おまえ、その心が色んな人を振り回してるんだぜ」

「わかつてゐる」

「大体、お前の心の中には誰がいるんだよ？俺はいないのか？」

「いるわ。あなたは大好き。もしかしたらと思って、かすかに期待して日本に帰つて來たわ。でも、ダメだつた。時間が経てば変わると思つたけど、変わらなかつた。あなたにまた会えて、すごく嬉し

かつた。わたしはあなたが大好きなのよ。こんなに好きなのにね。・・・・・でもね、やつぱりダメなのよ。・・・・・どちらかが、心の中のどちらかが変わってくれればいいのにね。『めんなさい』

彰子よ、お前、恭子の心にきいるんだよな。変わらないまま。一
十歳のまま。

7月18日

高2の瀬川綾子が音楽に専念するために1学期いっぱいで退塾する。偏差値70をはじき出すトップクラスの生徒がいなくなるのは残念だが、「がんばれ」と快く送り出してやつた。塾長は例によつてブツブツ言つてゐる。まあいい。

瀬川のことに触れよう。すごい高校生なのだ。

彼女は勉強もすごいが、音楽、ピアノもすごいのだ。一度演奏を聴かせてもらつたことがある。モーツアルトの曲だつた。見栄や格好で弾いているのではなかつた。将来何かの役に立つから弾いてます、というレベルのものでもなかつた。鳥肌がたつほど見事だつた。「何故モーツアルトなのか」と尋ねると、「好きなんです」と答え、瀬川は続けた。

「でも、美しさぎます。ちょっと音楽を知つてる人なら嫌になるくらいに」

「お前は嫌にならなかつたのか?モーツアルトを聴いて」

「初めて聴いたときは理屈抜きにすごいと思いました。でも、幼かつたからそのすごさの意味はわかりませんでした。何となく意味がわかつた頃にはもう音楽にビックリでした」

「意味がわかつた今でも音楽の道を選ぶんだな?」

「はい。わたしの才能なんて知れてるから、新たな音楽を作れるなんて思つてはいません。でも、せつかくコンピュータがある時代に

生まれてきたんだから、もしかしたら新たなアレンジくらいはできるんじゃないかと思つて。だから、コンピュータに必須の数学や英語も勉強しなくちゃならないけど、今は演奏に力を入れておかないと。芸大に入れないと

「どうしてピアノなんだ？」

「それは、何故、琴やケーナなんかを選ばなかつたかといふことですか？」

例えにバイオリンやフルートでなく、琴やケーナを出してみるところがすごい。質問の意図を把握しているのだろう。

「そうだ」

と言つと、瀬川は笑つて答えた。

「多分、先生が空手じゃなくて陸上競技を選んだのと同じですね。体格や、向き不向きだけの問題じやないでしょ？」

音楽にもスポーツにも多種多様なものがあり、優劣はないと思つ。しかし、全てがメジャー（スタンダードと言つてもいい）なものではない。そして、メジャーでないもののほとんどは、民族のとか伝統的なとか郷土のとか呼ばれていなか？それをメジヤーにしようとする力をしている人もいるし、特殊な事情で一部のものにしておくべき儀式的なものもあるが、とにかく、世界中の皆が競おうと思うよりは保存しようと思うものだ。（それに価値がないと言つてはいるのではない。一流であれば何者をも感動させると思つ。誤解のないように）

瀬川は、音楽、それもピアノという超メジャーなものを、明確な自分の意志をもつて選んだ。どれくらいの人間がこの意志をもつて生きているのだろうか。瀬川はモーツアルトではないから苦労するだろうし、その苦労が報われないかも知れないが、とにかく、自分の意志で戦おうとしている。

瀬川の空手と陸上競技の例えに、俺はこう答えた。

「そりがとうござります。でも、先生は何故普通の学校や大学で教えないんですか？」

「確かに、今はそっちの方がメジャーだよな」

「何となくわかります。……この先、お互いどこにいるかわからないけど、わたしも先生を応援します。ピアノを聴いてもらって良かった」

瀬川は微笑んだ。

俺の目の前でブツブツ言つてゐる塾長に言つた。

「塾長も瀬川のピアノを聴いてみたらどうですか」

「ピアノの良し悪しはわからない」

「いや、瀬川のピアノは誰にでもわかりますよ」

「そうなのか」

「はい」

「どうか。じゃ、仕方ないな」

あつさりと引き下がつた。ウーン、もしかすると塾長は侮れない人なのかも知れない。

7月19日

ああ、忙しい。保護者との面談が組まれてゐる。95%母親が来塾する。内容は言つまでもなく、成績、進路だ。他人の子どものことまで知るか（もちろん、俺自身の子どもなどいないのだが）と言いたくなるが、俺もプロだ、キツチリ面談をこなしている。

具体的な個人のことは親の方がよくわかっているのは当然だ。「ウチの は××だ」というわけだ。しかし、全般的な中学生、高

校生のことなら俺の方がわかっている。中でも成績、進路のことなら、確実に俺の方がよくわかっている。だから、この面談は家庭と塾、双方の情報交換の場である。互いに得るものが多い。特に俺達には塾生の家庭での様子や思いがけない性格、行動がわかり、指導に活かせる。忙しいが大切な面談なのだ。

ところが、中には驚くような母親もいる。話そのものや言葉遣いがとんでもない母親や、格好がとんでもない、いや、ぶつ飛んでいる母親にはもう驚かないが、槙村の母親はすごかつた。

面談は分割みで入っているので、決まった時刻に相手が来ないと後の予定がずっと狂ってしまうのだ。しかし、槙村の母親は約束の時刻を15分過ぎても現れない。控え室を覗いてもいない。槙村家に電話したら母親はとっくに家を出たと言つ。おかしい。途中で何かあつたのだろうか？

仕方ない、ひとまずキャンセルだ、と、次の面談の資料を取りに職員室に戻つたら、杉下の机で誰かが突つ伏して眠つていた。いびきまでかいていた。槙村の母親だつた。

学生の時分から割と長い間塾の先生をしてるけど、面談に来て、勝手に職員室に入つて眠つちゃつた人はこの人だけだ。多分、この先もこの人だけだろうな。

後で杉下がぼやいていた。

「変だなあ。机の上に置いていたプリントが水でにじんでるんですよ。岸和田先生、意地悪してないですか？」
「していないよ。俺はね。」

7月22日

夏期講習が始まった。朝から晩まで忙しい。ああ、忙しい。
でも、忙しいと色んなこと考えなくて済むから、悪いことばかりじゃないよな。

7月25日

富本が3日ほど講習を休むという。何でも、放送コンクールで全国大会に出場することになったのだそうだ。

「お前にそんな才能があったのか」

「うん、汐里が丘高校の校内放送は僕が仕切ってる」

「うそだろ？」

「ホントだよ。だつて、放送部の部長なんだから」

意外だ。意外すぎる。

「僕の放送、評判いいよ。昼休みに放送するんだけど」

「お前がどんな評判を取つてるって言つんだよ」

「」の前なんか、お奨めの本のコーナーで、教えてもらつた『O嬢の物語』『新O嬢の物語』『家畜人ヤブー』の紹介したら、先生達から絶賛された

どんな先生達だよ、いつたい。頭が痛くなつてきた。

「そつそつ、『アムステルダムの小さな窓』がどうしても見つかんなくつて。学校の先生からも見つけろつてせかされてるんだ。見つけといでよ」

富本、お前は先生に恵まれたよな。塾でも学校でも。

8月2日

高2の三井が相談があるといつ。普段はめちゃめちゃ明るい三井が暗く沈んでいた。余程のことだ。

「どうした？」

「先生、わたしね・・・・・、赤ちゃんができたの」

「赤ちゃん？」

「うん」

うわあ、『りゅーベーだ。いや、ベビー（べだらない！）か。俺

に相談されても困るよな。俺の赤ちゃんならともかく。

「何て言つていいかわからないけど……」

本当に何て言つていいかわからないのだ。

「おめでとひ」

「…………？」

「どうしたんだ？」

「どうしたんだ？」

「つづん、『おめでとひ』なんて言われるつて思つてなかつたから

「そつか？新しい命が宿つたんだぜ、お前の中に。めでたくないか

？」

「変なの。何かおめでたい気がしてきた」

「だつて、好きな男の赤ちゃんなんだろ？」

「うん」

「相手はこのこと知つてるのか？」

「まだ」

「早く話せよ。俺よりもそいつに相談したまつがいいと思つぜ」

「だつて、まだ高校生なんだもの。受験もあるし」

「高3なのか？」

「うん。同じ学校の先輩」

「ありがちだな」

「悪かつたわね、ありがちで。でも、どうじよひ？」

「俺の赤ちゃんなら産んでもらひつけなあ

「もう、真面目に考えてよ」

「俺はカトリックじゃないけど、お腹の中にいる赤ちゃんも命に変

わりないと思つてる。だから、普通なら産んで欲しい。でも、お前

も相手もまだ高校生だ。普通じゃない」

「同じくらじの年で母親してる子もいるわよ」

「ああ、だけど、これから二十歳前後の時が、人生で一番面白い時、

俗に言つ『青春』の中心になる時だろ？そのときにお前は子育てをしなきやならない。同じ年齢の女の子達が、恋とかファッショングとか旅行とか楽しんでるのに、子育てだぞ」

「うん」

「そんな楽しみと引替えていつのじや、お腹の赤ちゃんも浮かばれないだろ？が、やはり、そんなこととも考へてしまつよな」「どうしようつ？」

「お前次第だ」

「彼の気持ちは？」

「彼には必ず話せよ。だけど、必ず、間違になつたえる「そうなのかな？」

「絶対。だが、その後だな、そいつの価値が本当に試されるのは」

「うん。親は？」

「相談したほうがいいと思う。いや、しなきゃダメだ」「怒られるわ」

「当たり前だ。それくらい覚悟しろ。だが、俺はお前の味方だ。お前が決めたことなら俺の考えと違つても絶対に尊重する」

「先生・・・・・」

「だから安心して結論を出せ」

8月5日

三井、一時休塾。

8月18日

夕方、恭子から電話があつた。

「今日、姉さんのどこに行つたの。チヨコレートがいっぱいお供えしてあつたわ。ヒロシでしょ？ ありがとつ」

彰子はチヨコレートが大好きだつた。彰子の声が甦る。

「太りたくないからあんまり食べられないの。だから、おいしいチヨコレートを少しだけでいいの」

そう、俺が供えたのだ。ほかの誰がチヨコレートなんか供えるか。

もつ太る心配などしなくていいから、いつぱい食べな。

授業と授業の合間に片桐さんがやって来た。

「ついたつさ、先生に会いに綺麗な人がいらっしゃいました。『今は授業中ですけど、もうすぐ終わりますよ』って申し上げたんですけど、『元気で授業してるならいいわ』って、お帰りになつたんです。お名前をうかがう間もなくて……。一応、お知らせしておこうと思つて」

「ありがとうございます。きっと、知り合いのお医者さんですよ」

仕事の後、安達が飲みに誘つてくれた。バーで安達がピアノを弾き始めた。

「最近弾いてないからな。もしかしたらお前より下手になっちゃつたかもしないけど、まあ聴いてくれ。今夜くらい、いいだろ」
Eric Claptonの"TERARS IN HEAVEN"だった。生徒に聴かせたら仮定法の勉強になるなあ、何てことを思いながら口ずさんだ。

安達の弾くピアノの音色は優しかつた。

俺は死んだら彰子に会えるんだろうか。しつかり生きてきたよと、胸を張つて会えるんだろうか。

今日は彰子の命日だ。

9月3日

生徒達が中学校で使つてゐる英語の教科書に、ある物語が出てゐる。『戦時中、幼い姉弟が傷つきながらも郊外に逃れて来る。弟は母親を恋しがつて泣くが、母親は死んじゃつてゐる。そこで、姉が健気にも母親代わりになり歌を歌つてやりながら弟を抱きしめる。そのうち弟は息絶えるが、姉はずつと歌い続ける。そして、姉も死ん

でしまつ」という内容だ。

英文を読みながら日本語訳を進めていく。

「I.IJは学校の試験じや単語くらいしか出ないんじやないのか?ただの読み物だし」

そう言つて、白井が代表して答えた。

「つりん、学校の先生は『感動的でしょ!先生はこのお話が大好きです。次の試験はこのお話を中心に出題します』って言つてたよ」何でこんなありふれた話に感動するんだよ、その先生は。感動するのは勝手だが、このレベルの感動を生徒に押し付けてもなあ、対処に困るぜ、生徒も。

(抗議されても困るのですが、平和に対する思いや祈りを茶化すつもりは毛頭じやいませんので。あらかじめお断りしておきます)

それで、よせばいいのにやつてしまつた。

「そつか。でも、どうして弟が死んだかわかるか?」

「戦争で傷ついたからでしょ」

と、白井。

「違うよ。戦争は関係ないんだよ。実は、お姉ちゃんが強く抱きしめすぎて窒息死しちゃつたんだよ、弟は」

「うそだあ」

「本当だよ。ほら、I.IJは書いてあるだろ? Head teacher

t.I yつて」

「あ、ホントだ」

「わかつたか。ザマリロ。学校の先生にも教えてやれ」

「うん、そうする」

(何度も申し訳ありませんが、決して平和への思いを茶化しているではありません)

9月5日

俺としたことが、先日の白井の日の異様な輝きを見落としていた。あの悪魔はホントに学校の先生に俺のくだらない解釈を教えてしまったのだ。「なんて塾なの！通うのはやめなさい！」と言われたらしい。更に「どういう名の先生なの？」と訊かれて、白井は俺の名前を言つてしまつたのだ。「岸和田」という名を聞いて引きつっていたそうだ。その先生の名は横川。またも、横川。向こうは「またも岸和田」つて思つてゐるだらうな絶対。

ま、あまりくだらないことは言わないようにしておこう。学校の先生だけじゃなく、最近は日本中に小うるさい人が多いから。

9月6日

授業が終わつて、生徒達を送り出して、してもしなくとも生徒達には何の影響もないけど、「しろ」つて塾長が言うから仕方なくしてた雑務が終わつたらもう11時前だ。帰ろうと思つたがまだ残つてゐる生徒がいるみたいだ。教室を覗いたら、数学の甲斐が高校生に何か教えていた。

11時を回つた頃に生徒達は帰つて行つた。

「じゃあ、甲斐先生、僕達も帰りましょうか」

帰り支度を始めると、さつき帰つて行つたはずの井上と富が走り込んできた。

「先生！大変！涼子が、変な人達に捕まっちゃつた！」

「何！どこだ！」

「そこのスーパーの駐車場」

そういうや、夜になると、たまにおかしな連中が車を止めてるよな。

「何人だ？変なのは」

「3人。いきなり声かけて来て、無視して行こうとしたら、抱きついてきて。私達は逃げられたけど、涼子が……」

うーん。この2人じゃなくて青山涼子を捕まえるとは、変な奴らも見る目がある。いかん、そんなこと考えてる場合じやない。

「車はあつたか？」

「うん」「

まずい、まず過ぎる。青山が危ない。

「わかつた。すぐに110番しろ」

スーパーの駐車場まで歩いて3分ほど、今から走つていけば間に会うか。が、車が走り出してたらアウトだ。

「先生、行きますよ」

甲斐に声をかけたが、

「僕はここで警察に連絡します。この子達も落ち着かせなきや」
「だそうだ。ええい、1人で行こう。甲斐のようなのはかえつて足手まといだ。入り口の傘立てから、忘れ物の傘を1本取つて走り出した。

駐車場が見えた。結構明るいじやないか。こんなところでよく拉致できるよなあ。でも、ほとんど人気がないな。どこだ?と、車が動き出した。アレか!「こっちに来い!」と祈つたが、遠ざかる方向に動いて行く。何とか車を止めなきや。そのまま走り続けた。あと、5m、4m、だが、追いつかない。俺は傘を投げつけた。当たつた。こら、大事な(はずの)車に何かぶつけられたんだぞ。怒つて車停めて出てこいよ。おつ、止まつた。やつた!早く傘を拾わなきや。
唯一の武器だ。

傘に手が触れたのと同時に、後部のドアが開き、男の足が出て來た。低い姿勢のまま傘をフルスイングして、男のすねを思いつきり打つてやつた。手ごたえがあつた。傘が折れたのがわかつた。何か叫んで、男は後部シートから体半分を出し、すねを押さえて前かがみになつていい。いい高さだ。そのあごに、これまた思いつきり右の正拳をくらわしてやつた。男はそのまま後部座席にのびた。俺の右手もムチャ痛いが。

そのとき、後頭部にすごい衝撃が走つた。ありもしない光が目に

見えた。やられた。すごく痛い。泣くほど痛い。が、まだいけそうだ。でも、これ以上食らうとまずい。後頭部を押されて転がつて逃げた。しかし、今度は背中が思いつきり痛かった。蹴られたんだ。こりや、まずいや。警察、早く来いよ。俺が車でちょっとスピード出したときや、自転車で傘さして一人乗りしてたときは追いかけてまで来てくれるじゃないか。だが、青山は連れて行かれずに済みそうだ。良かった。できれば今のうちに逃げて欲しいが。

怖そうなスキンヘッドの兄ちゃんが胸ぐらをつかんで立たせてくれた。が、腹を殴られた。効く。また、転がつてしまつた。すかさず棒状のものが飛んでくる。木刀だ。当たり所が悪けりや死ぬぜ。何とかしなきや。お、手に何か当たつた。傘の残骸だ。木刀を持ったデカイ奴に投げつけた。「デカイの」が瞬ひるんで後ろに下がつた。俺はその隙に立ち上がりて車を背にした。これで、後ろからやられることはない。正面に「デカイの」が、斜め左に細身の「スキンヘッド」がいる。ああ、後頭部が痛い。右手も痛い。早く病院に行きたいよ。普通ならここで逃げるところだけど、青山はまだ車の中だ。

「デカイの」が間合いを詰めてくる。が、「スキンヘッド」は動かない。下手に俺のそばに来ると自分が木刀を食らうかも知れないもんな。チャンスだ。木刀の動きだけ見ていれば良い。木刀持つてのに使わないお人好しなどいない。「デカイの」は木刀を右手にぶら下げたままだ。普通は構えてから間合いを探るものだが、余裕があるのか馬鹿なのか、先に間合いに入つて、その後木刀を動かし始めるつもりらしい。木刀が動き始める瞬間が勝負だ。・・・・・動いた！左の正拳を「デカイの」のみぞおちに打ち込んだ。一瞬遅れて左の肩に木刀をもつたが、次の瞬間に右の拳をあごに向かつて突き上げた。のけぞる「デカイの」の腹にすかさず右の前蹴り。「デカイの」は倒れて胎児のように体を丸めた。まだ木刀は持つたままだ。よほど好きなんだろうな、木刀が。でも、こんな奴に好かれちゃ、木刀も生まれて来た甲斐がない。あ、そういうや甲斐の奴、

何してんだよ。警察が来る気配もないじゃないか。

右手が痛い。後頭部はもつと痛い。もう、逃げてもいいだろ。だが、青山は車から出ようとしない。仕方がない。引っ張り出して一緒に逃げよう。車の方を向いたら、またしても「スキンヘッド」だ。俺の横腹に強烈なパンチが入った。吐きそうだ。間違いない、こいつはボクシングをやつてる。とつさに両手で頭を抱え込むようにガードした。頭部にパンチをもらうわけにはいかない。が、何発もパンチが飛んで来る。こいつは強いぜ。色々なところにパンチが入る。ボディに入ると思わず呻き声が出る。やられるのは時間の問題だ。

ええい、一か八かだ。両手を頭からはずし、右手を腰の高さに構え、左手は奴のパンチがよく見えるように両の高さに構えた。奴の右肩から二の腕にかけてがわざかに動いた（ような気がした）。来る！右足を左方向に一步踏み出す。顔への右ストレートをよけながらも、その右手を取つて、背負い投げ！のつもりだったが、パンチが速過ぎて捕らえられなかつた。どころか、捕らえてるはずの右手がないものだからバランスを崩して前につんのめつた。と、額に硬い物がぶつかつた。痛さと衝撃でその場に崩れ落ちた。許せ、青山、ダメかも知れない。が、何故か俺の下で「スキンヘッド」がうなつてる。そうか、俺の額がこいつの額があごに当たつたんだ。タイミングがずれて、フェイントになつたんだ、頭突きの。フェイント頭突きなんて初めてしたぜ。ザマミロ。

後部座席でのびてる男を外に出し、青山を見ると、ガムテープがぐるぐると両手、両足に巻いてある。こりや、逃げられないよな。

「青山！大丈夫か

「うん、先生も大丈夫？」

「ああ、あいつらがのびてるうちに行こ」

ガムテープをはがし終わりかけたとき、「デカイの」が立ち上がりのが見えた。残りのテープを急いではがし、2人で車外に出た。「スキンヘッド」も動き始めた。「デカイの」が行く手を遮るように立っている。木刀は手にぶら下げたままだ。学習能力がないのか

？だが、俺もボロボロだ。ここまでボロボロにされたのは久しぶりだ。

「先生」

青山が俺にしがみついてきた。

「よし、大丈夫だ」

言つてはみたが「スキンヘッド」もいるし、2人を1度に相手にはできない。だが、お前は逃がす。青山に力をやぐ。

「走れるか？」

「うん」

「俺が正面の奴に飛びかかったら、すぐにその脇を走つて逃げる。何があつても走れ。俺もすぐ行くから」

「こんなときにあれこれ考えさせてはダメだ。有無を言わざず行動させなくては、上手くいくものもいかなくなる。」

「イチッ、二ッ、サンッ、それっ！」

青山の背中を押し、思いつきりダッシュして体」と「デカイの」にぶつかつた。背中に痛みが走り、どっちが空でどっちが地面からなくなつたが、スカートが走つて行くのが見えた。良かつた。「デカイの」は転がつている。もう起きてくるなよ。

かろうじて立ち上がつた俺の前で「スキンヘッド」が構えた。強いよなあ、ボクサーつて。でも、ただの塾の先生だけ、俺も結構強いんだぜ。後頭部と額と背中と右手はどつても痛いけど、ふらふらだけど、青山は逃げたけど、こいつとは勝負しなけりやならない、いや、勝負したいんだ。

「スキンヘッド」が右ストレートを出したのと、俺が左の拳を突き出したのは、ほぼ同時だつた。が、頭に強い衝撃を受けた。負けだ。意識が遠のいていった。

田を開けたら、90度の角度に青山の泣き顔があつた。

「先生！ 気が付いたの！ 良かつた」

アスファルトに横になつていた。ただ、頭だけは青山のひざの上

だつた。

「おっ、青山のひざ枕だ。ラッキー」

「馬鹿！」そのまま目を開けなかつたらどうしようつて……
青山の泣き顔が、もつと泣き顔になつた。違うな。じゃ、比較級の泣き顔になつた。これも変だ。頭やられておかしくなつたか。

「奴等は？」

「2人は車で逃げたの。もう1人は倒れてる。あれからすぐ、井上さんと富さんが近所の人を連れて来ててくれたの」

頭を動かすと、井上と富が見えた。知らないおじちゃんも何人かいる。その足下に「スキンヘッド」が転がつてゐる。ダブルノックアウトか。だが、俺は女子高生のひざ枕、奴はおじちゃん達に囲まれておねんね。こりや、俺の勝ちだらう。

「こつちです。速く」

甲斐の声だ。警官を連れて来たらしい。遅いんだよ。

「岸和田先生、大丈夫ですか？」

甲斐が尋ねたが、どこをどう見たら大丈夫に見えるのだろうか。
「いいえ、大丈夫じゃありません。このザマです。警察が遅いから」「すみません。井上と富に状況をきしんと確認してから110番したもので」

確認だ？座つてる生徒相手に授業してるんじゃないんだぜ。

「はいはい。確認は大切でしうからね」

いつまでもひざ枕してもらつてゐるわけにもいかない。青山に肩を借りてゆつくり立ち上がつた。あちこち痛いが、特に後頭部が激しく痛い。それと、右手に全く力が入らない。

警官に両脇を支えられて「スキンヘッド」が立ち上がり、俺を見ると言つた。

「あんた、最初からカウンターを狙つてたのか？」

「そんな上等なものを狙うかよ。おまえのパンチなんてへらう予定じやなかつたよ」

「なんで左だつたんだ？右利きだろ？」

「お前が左にいたから。右だと間に合わなかつたさ。それに、右手は痛かつたんだよ」

「そつか

「引き分けだな」

「スキンヘッド」はニヤッと笑つた。その後連れて行かれた。知らないおじちゃんが話しかけてくる。

「でも、先生？ ですか、相手が3人いるのによく生徒さんを助けようと思いましたね。普通はここまでしませんよ」

俺はするんだよ。俺にとって、生徒は息子で、娘で、弟で、妹で、恋人（女子生徒に限る）なんだよ。場合によつちぢや命も賭ける。

「ええ、普通じやないもん」

そう答えると井上と富が笑いながら言つ。

「確かに普通じやないわね」

他人に言われると面白くない。

9月7日

昨夜、あれから、病院に連れて来られた。外傷の手当ての後、眠つた。今朝は早くから起こされと頭部の検査をされた。その後、午前中いっぱい警察の事情聴取があつた。警官が2人で根掘り葉掘り訊いてくる。何か俺の方が悪いことしたみたいだ。自分の生徒を助けて何が悪いのだろうか。気分が悪い。

塾長が来た。来なくていいって。治りが遅くなるから。「授業は心配しなくていいから、ゆつくり治せ」とありがた言葉を残して去つて行つた。仰せの通りにゆつくり治すから2度と来るなよ。

表向きは「病気で休み」ということにしてもらつていい。甲斐、青山、井上、宮には昨夜のうちに口止めしてある。悪いことしたわけじやないけど、塾の先生が乱闘の当事者というのも格好悪い。昼夜過ぎ、青山が母親と一緒に来た。やたら感謝されて恥ずかしかつた。しかも、2人して居座つて色々世話を焼いてくれた。ありが

たいが、そこまでしてもらつても困る。いいと叫うのに、青山が夕食まで食べさせてくれた。確かに右手が良く動かないのに助かつたが、「はい、アーンして」なんて言われたのはいつ以来だろう。照れてしまつた。

「なんか、新婚さんみたいだね」

青山が言つたので、ますます照れてしまつた。

9月8日

安達とせつが見舞いに現れた。病院では携帯電話が使えないから、安達にだけは「入院してるからかけてくるな」と言つていたのだ。せつまで連れて来るなよな。

安達が大笑いして言つた。

「ヒロシ、いいザマだな。お前、喧嘩はめつたことじや負けないからいい気になつてたんだろうが、世の中にはお前より強い奴もいるつてことだ。心を入れ替える」

「」の馬鹿は何を言つているんだろうか。無視、無視。せつが尋ねてきた。

「まさか頭じゃないでしようね？」

「その頭だよ。木刀でやられた」

「馬鹿ねえ、どうして。あなたらしくない」

「仕方ないよ。生徒を助けなきやならなかつたんだよ」

「せつさん、」については自分の生徒は恋人と同じくら」大切なですよ」

「安達、」いんだよ」

「だがな、お前ごときが体張つたつてどうにもならないこともある」

「そうよ、ヒロシ、大切な物のなら守りなさい。でも、だらしない」として守りきれないようなら下手なことせずに初めから警察に任せなさいよ」

「また道場にでも通つて修行しなおすか?」

「ここから、俺の怪我自体より、俺が乱闘で怪我したことの方が気になるらしい。俺が弱くなつたと思つてゐるのか。ああ、悔しい。普通の喧嘩ならこんなことにはなつてないや。少なくともやられの前に逃げてるぜ。」

「で、頭、どうなの？」

やつと体の心配か。

「まだわからない。検査の結果が出てない」

「せつさん、大丈夫ですよ。こいつにはよくあることだから

「大丈夫とは思うけど、結果が出たらすぐに知らせなさいよ」

「ああ、わかった」

「ところで、恭子さんは今度のこと知つてるの？」

「いや」

「え、どうして？」

「わざわざ知らせることもないだらつ」

「俺が知らせておいてやるよ」

「馬鹿、要らないことするな。」これ以上俺のことで苦しめるな

「思ひ上がるな。苦しむがどうかは恭子ちゃんの問題だ。それに、お前までひねくれてどうすんだよ。素直になれ」

「そりよ、ヒロシ。素直が一番」

「ここから、怪我で弱つてゐる俺に何を言つて来たんだ。」

9月9日

頭部の検査の結果が出た。中身に異常なし。外傷のみ。退院だ。

9月10日

恭子から電話があつた。怪我のことを見たらしい。もつ退院したと言つて、少し声が柔らかくなつた（よつて聞こえた）。

安達からも電話があった。退院祝いに「いかがなつてくれると喜ぶ。せつかくだからフランス料理にしようと書つたが、あつせいのくしたからびつくりした。

9月12日

約束したレストランに行つたら、安達はいなくて、何と恭子がいた。恭子はせつと待ち合わせだつたと言つ。やられた。が、「もう料金はいただいていますから」というウエイターの言葉に心が動いた。恭子も、

「やられたわね。もう、食前酒飲んでるからあきらめるわ」

ショリーらしき酒が入つたグラスを振つて見せた。俺も素直に好意に甘えることにした。が、恭子が酒飲んでる。知らないよ。

せつかくだからワインもちょっと奮発した。よせばいいのに恭子も「ただのお酒だと一段とおいしいわ」と勝手なことを言いながら飲んでいた。頼むから飲まないでくれと言つのに、飲んでいた。案の定、酔つて目がすわってきた。レストランを出て、恭子がわけのわからないことを言い出す前に退散しようと思つたが、まだ飲むと言い張る恭子を放つておけず、よく行く店に連れて行つた。

勝手にカクテルを何杯か注文して飲み、ますます目がすわってきた。あきらめよう。

いきなり恭子が叫んだ。

「わたしのこと、いつたいどう思つてるのよー好きなの？好きなんだつたらプロポーズしなさいよーわあー」

こいつだけは、今までさんざん好きだと言つても頑として聞き入れなかつたのに、自分からプロポーズしりとはどうこいつことだ？やっぱりわけがわかんなくなつてゐる。しかも、大声で叫んだものだから、他のお客さんも店の従業員もこちらに注目してゐる。いや、目じやないな。全身耳にしてこちらをつかがつてゐる。店中緊張しているのがわかる。

「ああ、早くしなさいよ。いつたい何年あなたのことを……。いつたいいつまで待たせるのよ……。」

恭子の声がつまる。俺の胸もつまる。

「わかったよ。恭子

「……」

「俺と結婚してくれ……。」

「イヤよ……。」

恭子がきつぱじと叫んだ。

はあ？ 何だつて？ 「イヤよ」 つて……。

店中の空気がゆるんだ。と言つより、店中がストンとすかされてしまつた。そのうち「クッククック」なんて忍び笑いが聞こえてくる。隣の席のカップルは必死で口を押さえてるが、肩が小刻みにふるえてる。ウエイトレスが俺達の横を通り過ぎるとき「ブツ」と吹き出した。なぜか恭子も笑つてゐる。

もうあの店には入れない。

9月13日

昨夜は悪酔いした。今も気分が悪い。何が「イヤよ！」だ。ああ、腹が立つ。

授業も何となく乱暴になつてゐる。公私混同するのが自分でもわかる。生徒も気付いてるに違ひない。白井が口を開く。

「先生、はつきり言って今日は荒れてるね。どうしたの？」

どうせまともな授業にはならないから、昨晩のことを聞かせてやつた。生徒達はウケていたが、残りの授業時間を使って楽しそうに俺と恭子の今後について討論してくれた。「先生も変わり者、恭子さんも変わり者、変わり者同士でうまくいくに違ひない」という結論をだしてくれた。ありがたいことだ。

9月15日

三井が会いたいと呟つので、指定の喫茶店に行つた。

「先生！」

「よお、久しぶり。連絡よけでなにからびつしたのかと思つてた

「ごめんね。色々あつて」

「で、どうした？」

「産むわ。高校生だけどママになる」

「そうか。おめでとう。俺より随分早く親になるんだな。何か感慨深い」

「うん。立派な子を産んで、立派に育てるわ」

何か泣けてきた。

「先生、泣かないでよ」

「悪いな。でもダメなんだよ、こいつのつて。すぐ涙腺がゆるむ」

「先生のおかげよ」

「俺は何もしていない。『金八先生』じゃないしよ」

「ううん。相談したとき、まず『おめでとう』って言つてくれた。それがすこい力になつた。本当につと、それまでは堕そうつて思つてたんだから」

「お前の親や相手は？」

「最初はみんな産むのには反対だつたわ。わたしも何度かそう思いかけたけど。やつぱり、先生の言つよう『好きな男の赤ちゃん』だもの、生まない後悔だけはしたくなかったの。最後にはみんなわかつてくれた。祝福してくれた」

「お前、本当にいい親を持つたな、いい男捕まえたな
涙がまた出でてきた。

「泣かないでよ。わたしまで泣けてきちゃつた
2人でじばらべ泣いていた。周りで見てたら「何事だ?」と思つだろうな。

「お前、高校はどうするんだ?」

「休学する。ひと段落ついたら、また2年からやり直す。どこかに

入り直してもいい

「相手は？」

「大学に行つてもううわ。この子のためにもしつかり勉強してもらわなくつちゃね」

三井はお腹を押さえた。

「大丈夫なのか、お金は？」

「ウチの親も、向こうの親も援助してくれるって。て言つたか、両方の親にべつたりよ」

「お前ら、親に一生頭が上がらないなあ

「イヤでも孝行するわよ」

「良かつた。本当に良かつた」

「ありがとう。先生、わたし達ね、わたしが高校卒業したら正式に結婚するんだ。何年先かわからんけど。そのときは絶対結婚式に来てね」

「ああ、お前達とお前達の子どもを見に、絶対行く。歌も歌つてやる。挨拶もしてやる。もちろん」祝儀は6桁持つていつてやる。それも、アメリカドルで」

「ありがと、ご祝儀以外は期待してるわ」

「おう、立派な赤ちゃんを産めよ」

そして、三井から退塾の届けを受け取つた。気持ちのいい退塾だ。

9月16日

せつが話があるという。お昼に、せつが勤めている病院近くにある公園で会つた。

「お前達、はめてくれたな

「いいじゃない。少しほ進展があつたようだし。恭子さんにプロポーズしたんだって？」

「何で知つてるんだよ」

「恭子さんから聞いたのよ。恭子さん、かなり酔つてしまつかりと

は覚えてないようだけど、ヒロシからプロポーズされたみたいって、真剣に悩んでたわよ」

「…………真剣にねえ。またあの「イヤよー」が耳に聞こえてきた。

「断られたんだよ。『イヤよー』ってね」

「酔ってる恭子さんが真面目に物事を考えるわけがないでしょ。普段とは天使と悪魔ほど差があるのに」

「そりゃそうだけど。大体あいつがプロポーズしろっていつからしたんだぜ」

「しろって言われてホイホイするあなたもあなたよ」

「すみません」

「謝んなくていいの。それより、どうするのよ、これから」

「これからって？」

「じれつたいわね、恭子さんと結婚するの？しないの？」

「あのね、俺はもう何回も自分の気持ちをあいつに伝えたよ。この前みたいに酒が入ってるときじゃなくて、あいつがまともなときこそそれで？」

「それで？」

「ダメ」

「そうなの」

「ああ、そうなの」

「恭子さんの気持ちを考えたことがあるの？」

「あるよ。毎日考てる」

「どうこう結論に達したの？」

「わかんない。ただ、俺は恭子が大好きだってことだけは確か」

「恭子さんもあなたのこと絶対好きよ」

「俺もそう思う。でもなあ」

「しつかりしなさいよ」

「どうしつかりしていいか見当がつかないんだ。それに、俺がしつかりする、しないの問題じゃないような気がするし」

「…………彰子？」

そうだ、彰子だ。彰子が、いや「彰子がいた」そして「彰子が死んだ」ということが、どうにもならない事実として存在する。

「やつぱりね。彰子か」

「仕方ないのかな?」

せつは問いかけには答えずじまいへ俺の顔を見ていた。そして、また話し始めた。

「あのね、いつか彰子が話してくれたことがあるの。馬鹿げてるつて思ったから、そのときは笑って済ませたんだけど……。彰子はこう言つたの、『ヒロシと恭子はいつか惹かれ合ひよがうな気がする』って」

「惹かれ合ひ……つて」

「『もし本当にやつになつたら…』って訊いたら、『最初は悲しいだらうけど許すと思つわ』って。何か、生きてるときから、自分の死も、ヒロシと恭子さんのことも全てわかつてたみたいな言葉だつた。そうだ、俺にもわかつてゐる。仮付いてる。

「そして、今のヒロシはわかつてゐる。もし彰子……」

「やめろー。」

俺はせつのは言葉を遮つた。

「それ以上聞きたくない」

せつはうなずいた。

「わかつてゐんならいいわ。でも、そこから始めないと何も進展しないわよ。残酷かも知れないけど。じゃあ、遅れるといけないから行くわね」

せつは歩き始めた。

病院へと続くイチヨウの並木道を歩くせつの後姿は絵になつていて。もし、せつが振り返つて俺を見たらどう思つただろうか。絵になつてゐるのだろうか。背景にしか過ぎないのだろうか。それとも、絵に付いた情けないシミなのだろうか。

深夜、せつを誘つて海までドライブした。尋ねたいことがあった。本当は答えはわかっているのだが、せつに「そうだ」と言つて欲しかったのだ。まるで、母親や友人の支持がないと何もできない甘えたガキみたいだと、自分でも思つていた。それでも、せつの言葉を聞きたかったのだ。車を降りて砂浜沿いの遊歩道を歩き、ベンチに腰を下ろした。辺りは暗かつた。夜の真っ黒な海。砂浜にも遊歩道にも、もちろん海の中にも、誰かがいる気配はなかつた。

俺は彰子との思い出をとりとめもなくせつに語つた。せつは黙つて聞いてくれた。

「一田惚れだつたんだ。俺は彰子のことが好きだつたんだ。本当に何度も田かの「本当に好きだつた」の後で、せつが口を開いた。

「ヒロシの彰子への思いはわかる。でもヒロシが今愛しているのは恭子さんよ」

「彰子は許してくれるかな?」

「許すと思つわ」

しばらく間をおいた後、俺は思い切つて尋ねた。

「もし、彰子が生きてても?」

「ええ」

「たとえ彰子が生きてても、俺はいつか恭子を好きになる。間違いないか?」

「間違いないわ」

遊歩道の端の方に人影が見える。もう、夜明けが近いのか。

「そうか」

「もう、いいんじゃない? 彰子は許してくれるよ。だつて生きてるときから許す準備をしてたんだもの。きっと願つてるよ、あなたと恭子さんが幸せになることを。でも、ちょっとだけ意地悪したかったのよ。今頃はペロリと舌を出してるわよ」

「意地悪か。当たり前だな。彰子も好きだつたし恭子も好きだつて言つんじや、意地悪のひとつもしたくなるよな」

遊歩道の人影が次第に大きくなる。かばんを提げた女子高生だ。すいぶん早いが通学途中なのだろう。辺りがかなり明るくなつた。

「せつ、いいんだよな、彰子と恭子が2人とも俺の心について」「いいのよ。彰子への思いがあるから恭子さんを愛せない、恭子さんを愛しているから彰子への思いがなくなる、なんていうのはやめてね。ヒロシには彰子への思いもあるし、恭子さんへの愛もある、それが真実よ。だつて彰子は死んじゃつたんだから。恭子さんは生きているんだから」「ひ

「彰子の死が俺を曖昧にしてるんだな」

「そうよ、彰子が生きてたら、あなたはこんなに迷わない。必ず恭子さんを選ぶわ。彰子が死んだからみんな苦しむのよ。悪いのはあなたでも恭子さんでもない、彰子よ。彰子の意地悪よ」

今までずつと海を向いていたせつの顔が俺に向いた。

「恭子さんを幸せにしてあげて」

ちようちよどそのとき、女子高生が俺達の前を通り過ぎた。岬の影から朝日が姿を現した。せつが女子高生の後ろ姿を見ながら言つた。

「あの子が朝を連れてきたみたい。まるで朝の使者ね」

「お前、やけに文学的な医者だな」

「褒め言葉だと受け取つておくわね。で、ヒロシ、あなたにも朝が来た?」

「まあな。ありがと」

「どういたしまして。わたし精神科医にならつかしら」

「無理」

「そうね、初めから答えがわかっている患者さんばかりじゃないからね。でもね、ヒロシ、大変なのはこれからよ。恭子さんはまだ闇の中よ」

夜、部屋の前で恭子を待つた。帰つて来た恭子はびっくりしてた。

近くの公園へ行つた。

「恭子、おれはやつぱつお前が好きだ

「こきなつづいたのよ

俺は無視して続けた。

「こじの気持ちはどうしようもないんだ。たとえ、彰子が生きてても、俺はきっとお前のことが好きだと思つ

「ヒロシ、こつたに何を言い出すの？」

「はつきりしたんだよ。彰子がお前の姉だつが他人だつが、彰子が生きてこようが死んでこようがどうでもいい。俺はお前が好きなんだ」

「ひどくない？姉さんまでつなるの？」

「どうにもならない」

「何よそれ。あなたは姉さんのことはもうびりでもここなの？」

「そうじやない、そうじやないんだ」

「それじや、どうだつて言つの。わたしは姉さんの代わりなんですよ。あなたと姉さんは出合つたの、愛し合つたの。そして姉さんが死んだ。あなたがわたしを好きだつて言つのは、姉さんが死んだからなのよ」

「違うんだ。俺は彰子のことは忘れない。だが、お前のことはそれとは別なんだ。俺とお前とは、どんな時代でも、どんな場所でも、どんな環境でも、絶対に出会つ。そして、俺はお前を好きになる」

「勝手なこと言つて苦しめないでよ」

恭子は歩いて行つた。

俺の正直な言葉は云わらなかつた。姉の死によつて結果的に自分が俺とつき合つのは許せないのだろうか。姉、彰子への思い、俺への思い、2つの思いの間で苦しんでいる。

恭子の心の中にも彰子がいる。かつて俺を苦しめた彰子が。そし

て、恭子を痛めつけていた。俺は初めて彰子を憎いと思った。

俺と恭子の関係は、彰子におまけのよしへ元ひこころの関係なのか。

俺は恭子の心の封印を解くことが出来るのだろうか。

9月20日

恭子と連絡が取れない。
電話をかけても出ない。もちろん、向こうからもかかってこない。

9月22日

夜、せつから電話があった。

「今日、偶然恭子さんに会ったの。すこく疲れた顔してた。眠れな
いんだって。うとうとしたかと思うと、彰子の顔が見えたり声が聞
こえたり、それで、ハツとして田が覚めて、朝までその繰り返しだ
って」

「それって、一種の精神病じゃないか」

「うん、病気とは言わないまでも、かなりストレスがたまってるみ
たい」

「まいづたなあ」

「あなたとはもう会わないって言ってたわよ。そんな馬鹿なこと言
わないで素直になりなさいって言つたけどね。『姉さんを死なせた
のはわたしよ』なんて言つのよ」

「彰子を死なせたって? どうこうことだ?」

「彰子が生きてるうちからヒロシのことが好きで、彰子がいたら自
分の気持ちが伝わらない。だから、彰子がどこかに行けばいいと心
のどこかで思つていた。そうしたら、本当に遠いところに行つちや
つたつてことでしょう」

俺はあの夏の日、恭子が言つたことを思い出していた。「どうち

かが死ねばいい。でも本当はどちらにも死んで欲しくない

「それほど自分を責めてるのか」

「うん。恭子さんには、専門家のカウンセリングを受けるように勧めておいたけどね。自分で解決方法はわかつてるって……」

「俺のこと忘れるつてことか」

「それも一つの方法だと思うわ。でも、できると頃つ? できないわよ」

「じゃ、どんな方法があるんだよ。まさか……」

「うん、自殺つてことも考えられるわよ。自殺とは言わないまでも、何かあつたらすんなり死を受け入れると思つ」

「俺がそんなことさせない」

「ヒロシがその気でも、本人があれじゃ」

「何とかするよ」

「約束よ。何とかしてあげてね。仕事がらみとはいえ思い切つて日本に戻つて来たのよ。心の奥底ではあなたに会いたかったのよ。あなたに救いを求めるのよ。救つてあげてね」「ずっと酒を飲ましておけばいいんだけどな」「そうね、できるひとなら酔つたままにしておいてあげたいわね」「彰子と恭子・・・・・」

9月23日

彰子の墓に行つた。街を一望できる丘の中腹に彰子は眠つている。

何をするということもなかつたのだが・・・・・。

「彰子、もういじめないでくれよ。俺も恭子も十分苦しんだよ」

「別にいじめてなんかいないわよ。2人で勝手に苦しんでるだけよ」

彰子の声が聞こえたような気がした。

十字架が刻まれた灰色の石の板は、後ろに澄み切つた青空を從えて飽くまで涼しそうにたたずんでいた。

少し肌寒い日だった。

9月25日

安達と酒を飲んだ。酔つてると安達はからみ始めた。俺と彰子、恭子との関係を説明してやるといった。そんなことできないと言つても「俺にはわかってるから、聞け」としつこい。

「ヒロシ、お前は昔からムカつく奴なんだよ。ピアノ弾かせりや生意気に俺にすぐ追いつぐ、走らせりやインターハイ、勉強させりや1年で国立大学、おまけに、塾で教えりや教え子は合格ときたもんだ。ああ、ムカつく」

「なんだよ、ただ、喧嘩売つてただけじゃないか。

「待てよ、俺だってそのときそのとき一生懸命努力してきたんだぜ。今もしてるし」

「当たり前だろ。努力あってこそ人間だ。だが、そこがムカつくんだよ。その努力ができるつてのが俺に言わせりや才能なのさ。べらぼうな才能さ」

「いつ、どこが俺達3人の関係なのさ。

「俺に言わせりや、努力するのが当たり前で、何もしない奴の方が変なの」

「そりだらうとも。だがよ、もう一人すういのがいたじゃないか」「誰だよ。絶対にお前じゃないし」

「わかんないのか。お前にはわかりづらいよな、同類だからな。彰子ちゃんだよ」

「彰子？」

「そうだよ。やっぱり気付いてなかつたのか」

「俺も彰子も普通だぜ」

「それもムカつくんだよ。気付いてないとこりによ。お前と彰子ちゃんのすうことは、大発明したとか、IQが200あるとか、百億円稼いだとか、そんなんじゃないんだよ。例えば、俺が、全てを犠牲にしてでもしなくちゃ、と決心してようやくできるような努力をよ

当たり前のようしちやつとこりなんだよ。その情熱なんだよ。彰子ちゃんはそんなお前を本能的に認めて受け入れた。お前もそつた、同じ魂の持ち主に惹かれた。そりや最初は見た目だったかも知れない。でも、見た目だけじゃすぐに終わっちゃってたさ

酔つてる割にはまともないと言ひじやないか。

「恭子ちゃんも姉と同じようなお前に興味を持った。そして、お前にとつては当たり前の、でも、普通の人ぐらつたらつぶれてしまうくらいの情熱の直撃をくらつたんだよ」

「事故みたいじやないか」

「一種の事故だよ。受験つていう目標があつたにしてもな。お前をしつかりと見据えて、応えようとしたんだよ。で、お前が恭子ちゃんに惹かれていつたのもわかる」

「俺自身にもはつきりしない心がお前にわかるのかよ」

「わかるよ。お前は、デタラメなんだよ」

「何だよ、それ」

「彰子ちゃんはな、ピッチャーベン和田浩が投げるんでもないボールをこともなく受けとめて、軽く投げ返すキャッチャーだった。お前を一番よく理解してるのが彰子ちゃんだった。お前自身ですら時々持て余すお前と、自然に、あれだけうまくやつていけたんだからな。最高の相性だよ。彰子ちゃんと一緒にいればこの上なく安らぐさ、普通なら。でも、お前は安らぎなんか求めちゃいない。どこのか、理解されるとかされないと、そんなこともどうでもいいのさ。デタラメだから。お前が求めてるのは、バッターなんだよ。お前が投げるボールを打ち返したり、空振りしたりするバッターなんだ。お前に向かつてくる激しさ、お前を打ちのめそうとする強さだ。戦い終えて初めて勝ち負けを越えて気持ちが通じる、そんな女だ。お前と勝負できる女だ。バッター香山恭子だ」

「ホント、デタラメな女性観だ」

「ああ、デタラメだ。でも、結構当たつてるだろ？彰子ちゃんはお前を理解し寄り添つた。恭子ちゃんはお前に負けなかつた。さあ、

時間が経てば「テタラメなヒロシ君はどちらを選ぶでしょう？」

「でも、『テタラメな俺に選ばれても困るだろ？』

「やうなんだよ。だから恭子ちゃんも『テタラメなんだ。恭子ちゃんは恭子ちゃんとは違うから、お前のことあんまり理解してないぜ。』たとえ理解したとしても、それはそれ、自分の生きたいように生きるはすだ。お前もそうだろ？つまり、相互理解なんて今のお前達にはあっても仕方がない。そんなもの突き抜けてテタラメに惹かれ合つてゐる。理解は一番最後にやつて来るんだ。どうだ、わかつたか？」

「ああ、よくわかつた。そうか、俺達は『テタラメだったんだ』

「そうや。でもよ、ヒロシ、『テタラメに惹かれ合つたとしても、『タラメなままじやダメだぜ。途中でリタイアして、お前につらい選択をさせなかつた恭子ちゃんのためにも、恭子ちゃんと一緒にマトモになれよ』

「安達……」

「おつと、香山恭子、バッターボックスに突つ立つてゐるだけでバットを振る気がないようです。マウンド上のピッチャー岸和田、困惑しています。腰に手を当てて香山を見ています

「なに、実況中継じつこをしてんだよ」

「あ、しかし、岸和田、プレートに足をかけました。投げるようです。岸和田は変化球は苦手です。いえ、投げられません。ストレート一本です。香山にぶつけてカツを入れるんでしょうが。棒球で打ち氣を誘うんでしょうか。それとも、遠慮なしに思いつきり投げ込むんでしょうか。ああ、振りかぶりました

「俺はどんなボールを投げたんだよ？」

「さあな、そこまではわかんない。でも、ピッチャーが投げなきや始まんないぜ。バッターはピッチャーの投げるボールに反応するんだから。いいか、バッターがどんな反応しようとも、マウンドにいる限りは投げ続けるよ」

話すだけ話して、安達はおぼつかない足取りで店から出で行つた。

「こら、金払えよ。

だが、あのスチャラカポンも言つてくれるよな。ありがとよ。

9月26日

安達の母親から電話あり。安達は、昨夜、ふりつと車道に出て車にはねられたらし。

9月27日

せつから電話があつた。安達はせつ勤めている病院に運び込まれていた。「病室にちょっと顔を出したけど、怪我人とは思えないほど元気だった。具合を尋ねるのも馬鹿らしくくらいに」だそうだ。見舞いに行くのはやめた。

9月28日

「おー、今、せつせんにほつき合ひてる人がいるのか?」

安達がいきなり電話で尋ねてきた。

「誰かいるだろ。よく知らないけど」

「誰だよ? 本庄か?」

「いつの話だよ。もうとっくの昔に別れてるよ。お前がケイコちゃんに振られるより前のことだぜ」

「じゃ、誰だよ?」

「知らないよ。せつの病院にいるんだから直接聞きに行けよ

「それもそうだな」

「だが、どうした、せつに惚れたか?」

「ああ、惚れた。前からいいなとは思つてたけど、職場のせつせんを見たら、もう、完全に惚れた」

「また病気がでたな。今度は白衣フェチにでもなったか。怪我の前に、その、すぐ女にちよつかい出す病気を治せ」

「大きなお世話だ。じゃな」

あの馬鹿、せつに手を出すとは。身の程知らずめ。

9月29日

授業後、富本が話しかけてくる。

「ねえねえ、『宦官』って本当にいっぱいいたの？」

確かに歴史に関する質問だが、頼むからともなこと訊いてくれ。と思いつつも、

「ああ、いっぱいいたさ。宦官が政治を仕切つてた時代だつてあるんだぜ」

「へえ、すごいね。宦官、見たことある？」

「ないよ、そんなもの。と思いつつも。」

「まあ、言つてみればオカマみたいなもんだからな。宦官っぽいものは見てるかもな」

「じゃ、オカマと一緒になんだ」

「うーん、色々違つけどな。まず、作り方が違つよ」「どう違うの？」

「アレをなくすのは同じだけど、オカマは、医学的な手術でチヨン切るだろ。だけどな、宦官つてのはまず、こいつ、紐でくくつてだな。・・・・・」

事細かに宦官の作り方を説明してやつた。途中からは北も加わり、「宦官の作り方」って本が書けるくらいの大講義になつた。受験まであと3か月あまり。可哀想な富本。

9月30日

恭子は心を閉ざしている。もしかしたら心を病んでいるのかも知れない。俺に再会してかえつて闇が濃くなつてしまつた。そして、俺から去ろうとしている。実際、そうするしかないのかも知れない。

俺は嫌だ。しかし、当の俺に何の力もない。恭子に何もしてやれない。恭子は失意のまま、闇を抱えたまま、またアメリカに行く。そして、俺達は全くの他人になっていく。俺は嫌だ。大切な人を失うのはもう嫌だ。

問題は恭子の中の彰子なのだ。俺の中の彰子とは違うのだろうか。優しく、可愛く、頭が良く、色々な修飾語が付くが、最終的には、二十歳の若さで亡くなった彰子。それ以外にどんな彰子がいるのだろう?「彰子」は「俺」だつたんだ。俺の知らない彰子などいるのだろうか。

・・・・・もしかしたらいるかも知れない!

10月1日

手紙を書いた。会いたいと。
絶対に会わなくてはならない。マリアに。

10月2日

せつに尋ねた。

「せつ、一つ教えてくれよ。俺と恭子がもしかしたら惹かれ合つかも知れない、彰子はそう予感してた、そうだったよな。そんな予感を持ちながら彰子は割り切つて俺とつき合つてたのか?」

「ヒロシ、彰子はそんなケチな女じやなかつたはずよ

「え?」

「予感は予感よ。彰子は先のこと考えて、自分の愛情をケチるような女じやなかつたわよ。その時その時を一生懸命に生きてた、幸せいっぱいに」

「幸せいっぱいに・・・・・・」

「ええ、見ていてこいつちまで幸せになるような幸せ。彰子のおかげ

で、幸せってほかの人にもうつるんだって理解できたわ。すぐ幸せだったのよ」

「…………わかった。恭子の心を開けるかもしれない。」

「せつ、ありがとう！」

「何よ、急に」

「とにかく、ありがとう」

10月4日

塾の生徒達の多くが通う中学校で中間試験が始まる。対策用の問題をどうぞ用意しておかなければならぬ。朝から出勤だ。普通は毎晩遅くに出勤だから、かれこれ6時間も早い。普通のサラリーマンなら午前9時始業として、午前3時に出社するようなもんだ、なんて考えて歩いてみると、制服を着た中学生か高校生の女の子が手を合わせて祈るようにポストの前に立っているのが見えた。祈る場所が違うだろ、とも思ったが気になつて見ていた。その子はかばんから手紙を取り出して見つめていた、かと思うと、手紙に「チュツ」とキスをしたのだ。もちろん音など聞こえはしなかつたが、完璧な「チュツ」だつた。そして、投函を済ませてその子は歩き出した。たまには朝から歩いてみるもんだ。久しぶりにいいものを見た。

因みに、ものを知らない生徒（子ども）だけではなく、普通の人でも平気で「ウチのポストに鍵を入れといて」とか「今日はポストに何もない」とか言うが、あんたらのウチは郵便局か？あんたらのウチにあるのは「郵便受け」だろ？違うか？

言葉は時代につれて変わるものなのだろうが、どうも耳について仕方がない。俺がおじさんになったといふことなんだらうか。

10月7日

中間試験の対策が終わった。俺はやるだけのことはやった。生徒達は自身のこともかかわらず、やるだけのこともしていないだろうが、そこそこ点数は取るだろう。何せ俺の教え子達だ。

期末試験前の忙しい時期になるまでに何としてもイギリスに行かなければならぬ。マリアに会わなければならぬ。マリアに教えてもらわなければならぬ。

時間がないんだ。恭子が俺の近くにいる間にけりをつけなければ。身内に危篤になつてもらおう。4、5日なら塾を空けても大丈夫だろう。

10月11日

塾の近くに新しいケーキ屋ができた。「レッカー」という名前だ。ドイツ語で「おいしい」つていう意味だが、あんまりケーキ屋では聞かない名前だ。知らないうちにどこかに強制的に移動させられてそうな名前だもんな。

早速、北がなにやら買つてきた。

「『レッカー』つて、ドイツ語で『おいしい』つて意味なんだそうです。店の親父さんに聞きました」

しばらくして、大久保も「レッカー」の包みを提げて現れた。

「『レッカー』つて、ドイツ語で『おいしい』つて意味なんだそうです。知りませんでした」

みんなきちんと聞いてくるもんだ。わかんないことは素直に尋ねた方がいいもんな。それなら俺も教えてもらつてこよ。『レッカー』の意味を。

「とにかく。そこはシュークリーム2つください」

「はい」

親父がシュークリームを箱に詰め始める。俺は笑いそうになるの

をこじらえて尋ねた。

「あ、それと『レッカー』って、どういう意味なんですか？」

「おいしい」

「何語なんですか？」

「ドイツ語」

親父は不機嫌そうだった。いや、腹の中では怒っていたに違いない。

ああ、面白かった。

つい買ってしまったシュークリームを片桐さんに持つて行つた。
「あ、これ『レッカー』ですね。ありがとうございます。ところ
で先生、『レッカー』ってどういう意味だかご存知ですか？『おい
しい』っていう意味なんだそうです、ドイツ語で。さつきね、お店
の主人に聞いたんですよ」

10月12日

レッカーの入り口に『レッカー』はドイツ語で『おいしい』と
いう意味です」という張り紙がしてあった。

10月21日

空港から塾へ電話した。片桐さんが出た。

「岸和田ですけど、塾長は？」

「今、いらっしゃいんんですけど」

「そうですか。良かつた

「どうかしたんですか？」

「ええ、ちょっとイギリスへ行くんですけど」

「は？イギリスって、あの、ヨーロッパの？お店の名前じゃないで
すよね」

「ええ、ヨーロッパのイギリスです。ちょっと私事で、3日ほど。
塾長には『父親が危篤』って言っておいてください」

「はあ、構いませんけど。いいんですか?」

「まあ、ばれたらばれたときのことです。お土産買つて来ますから、
よろしく」

「はあ、行つてらつしゃい」

「行つてきます」

10月22日

ブリストルという町にマリアは住んでいる。
久しぶりにマリアと会つた。マリアはチョコレートケーキを焼いて迎えてくれた。

俺はマリアに胸の内を正直に話した。

「僕は彰子とつき合つていて幸せでした。でも、彰子は二十歳の若さで死んでしまいました。それから、ずっと、彰子のことを不幸な可哀想な女としか思えませんでした。そして、その思いのためにずいぶん苦しみました。でも、今はちょっと違うんです。彰子は幸せだったんじゃないかと思うんです。『死』そのものは不幸でしたが、彰子は幸せなまでこの世を去つたのではないかと。勝手な解釈ですが。いま、僕には好きな人がいます。いえ、彰子が生きているときからその人は心の中にました。彰子への気持ちの方がまだ大きくて、そのときは彰子以外考えられませんでしたが、時が経てば、もしかしたら、その人の方が大きな存在になつていていたかも知れません。そうなる前に、まだ、2人が幸せでいるうちに、彰子は天に召されました。僕は、彰子のことは忘れません。でも、その人のことが好きで、大好きで、彰子と同じように幸せにしたいんです。そのためには、彰子は本当に幸せだったと言わなければならなんないです。僕の思い込みなんかじゃなくて、真実として。その人はかつての僕以上に苦しんでいます。幸せがあることに気付いていないんです。教

えてください。彰子は幸せだったんですね。その人に伝える幸せはあるんですか」

マリアは黙つて聞いていた。そして、俺のある部屋に案内してくれた。

「ヒロシさん、彰子は日記をつけていたのよ。わたしも知らなかつたんだけど、遺品を整理していたら出て来たのよ。いつか、あなたやその人に見せるときが来るかも知れないと思つてた。好きなだけみてちようだい。自分で確かめてね」

通された1室では、書籍類、ノート類、アルバム、洋服などが、まるで主を待つかのように整然と保たれていた。その中に何冊もの日記があつた。ふと見ると、テーブルの上に鳥の羽をモチーフにした銀の指輪があつた。あの指輪だ。何故、ここにあるんだ?彰子の言葉を思い出した。「わたしの幸せの象徴よ。いつまでも、死んだ後も幸せが続くのよ」手にとつてみた。もうダメだつた。涙があふれてきた。指輪をテーブルに戻し、よく見えない日で1冊目の日記のページを繰り始めた。

彰子・・・・・。

何時間経つただろうか。

部屋から出てリビングに入ると、マリアがソファから立ち上がりた。そつと歩いて来て、俺を柔らかく抱きしめてくれた。本当の母親のようだ。

「ヒロシさん、わかつたでしょ? 彰子はとっても幸せだったのよ。娘を幸せにしてくれてありがとう」

マリアが優しくささやいた。そして、こう続けた。

「ご存知でしようけど、わたしにはもう1人娘がいるの。意地つ張りで、自分からは幸せにならうとしないのよ。わたしが何を言つても聞かないのよ。あなたが幸せにしてやってください?」

同じ親からの頼みでも、塾生の親からのとはちょっと違うよなあ、

なんて思いながら、目の奥に、涙がいっぱい順番待ちをしているのを感じていた。

マリアが話してくれた。

「こんな風になるとは思っていなくて・・・・。彰子が死んだときにはわたしも悲しくて何をどうすればいいかわからなかつた。しばらくして、彰子は最期まで、死の瞬間まで本当に幸せだったことに気が付いたの。それはそれは幸せな人生だったのよ。でもね、そのとき、それをあなたや恭子に話しても無駄だつたでしょ。第一、あなたと恭子はすぐに気持ちが通じ合つと思っていたから。恭子は自分の気持ちに気付いてたし、彰子の幸せを素直に引き継いで欲しかつたんだけど、思うよにはならなかつたわね。恭子は傷ついた。彰子の死に傷ついたのではなく、自分の思いに傷ついたの。そうねえ、例えば、幸せな彰子をちょっと妬んだり、いなくなればいいと思つたり、不幸な目に遭えばいいと思つたり。姉妹の間ではよくあることでしょう。そして、本当に彰子がいなくなつた。自分の思いの通りに。もちろん、恭子と彰子の死は関係ないんだけど、恭子は自分を責めてたの。あんなこと思わなければ良かつた、彰子の死は自分の思いのせいかも知れない・・・・。理屈ではそんなことはないと理解してるはずよ。でも、心の奥で思つてた、『彰子を不幸にしたのはわたしだ』って。そんな恭子があなたと幸せにならうって思うわけがない。あなたをあきらめることで罪滅ぼしをしようと思つたのよ。わたしには何も言えなかつた。それでいいと思つたの。時間が経てば忘れてしまう、みんな過去になる。わたしはこの国で、恭子はアメリカで、あなたは日本で、それぞれの人生を生きるつて。でも、だめね。やっぱり、あなたと恭子とは強い絆で結ばれてる。神の決定よ。恭子を幸せにしてやつてね。彰子を幸せにしてくれたように。そして、香山洋平がわたしを幸せにしてくれたよ」

帰り際、マリアがあの指輪をくれた。あの日、彰子を送った日、恭子が彰子の指から無理矢理はずしてマリアに渡したのだそうだ。

10月24日

授業に間に合ひずに香港から塾に直行した。何とか授業1時間ほど前に塾に着いたかと思ひつと、片桐さんが走り寄つて来た。

「お帰りなさい。早速ですか、先生あてに吉村という方から何度か電話をいただきました。お急ぎのようでしたけど、『連絡の取りようがなくて』

「すみませんでした、『迷惑をおかけして』

「いえ、いいんですけど。つい先ほどもお電話があつて、先生がお帰りになつたらすぐここに番号にお電話いただきたいということでした」

「ありがとうございます。あ、これ、お土産です。塾長には内緒ですね」

お土産と引き換えるように片桐さんからメモ用紙を受け取つた。すぐにかけてみると、そこは病院だった。が、せつめの勤めている病院ではなかつた。少しだけ背筋が寒くなつた。もしや恭子が・・・。しかし、気を落ち着けて切り出した。

「岸和田と申します。吉村という者から、そちらに連絡するよう言われてお電話差し上げています」

「岸和田様ですね。少々お待ちいただけますか?」「『面倒をおかけいたします』

待つ間の長いこと。

「お待たせいたしました。いま、吉村先生と代わりますので
げつ、せつか。きつと叱られるぜ。」

「ヒロシーあなたどこに行つてたのよー。『やつぱり。』

「すみません・・・・。イギリストへひよつと

「イギリスですって。いい」身分ね

「いや、遊びじゃなくて……」

「当たり前よー。」つちじや恭子さんが大変なことになつてゐるんだからね！

やはり、そうか。

「恭子がどうしたんだ？ 生きてるんだろう？」

「何のんきなこと言つてるのー死んでも不思議はないわよー。」

「怪我か？ 病気か？」

「あのね、落ち着いて聞きなさいよ」

俺の方が今のせつより落ち着いていると思うが・・・・・。

「昨日の朝、会社のエスカレーターに乗つてゐるときに、急にフツと倒れて、何段か転げ落ちたのよ。そのまま意識不明になつちやつて」

「それで」

「会社の人人がすぐに救急車呼んでくれて、この病院に運び込まれたの。山添さんがわたしに知らせてくれたのよ」

「ありがとう。お前がいてくれて助かったよ」

「馬鹿！ ありがとうじやないわよ！ たまたま打ち所が悪くなかったからでしょ。たまたま会社のエスカレーターだったからでしょ。もし運転中だつたりしたらひどいことになつてたわよ！ ヒロシがしつかりしないからこんなことになるのよ！ 大体、わたしはもうアフリカに行くんだからね！ いつまでも当てにしないでね！」

「その、アフリカつて何だよ。初めて聞くぜ」

「ボランティアよ、ボランティア。今は話がややこしくなるからいいのよ」

お前がややこしくしてゐるんだろうが。まずは恭子のことだ。

「そつか、ボランティアか。で、恭子の様子は？」

「そつよ、ボランティアよ。で、恭子さんはね、頭も打つてゐるんだけど、幸い脳や骨に影響はなかつたのよ。これといった外傷もないわ。でも、体そのものが相当衰弱してたみたい」

「意識はもうしつかりしてゐるのか？」

「ええ、点滴も何本か打つて体力も回復したから、退院させようかつて担当の先生と相談してたとこ」

「退院はいいけど、1人にしておくのもまずいだろ」

「そうね、1人にはしておけないわね。落ち着くまではどうしてもあなたが様子を見ることになるわよ。わたしも自分の仕事があるし、日本にはほかに頼れる人なんていなし」

「それは構わないよ」

「来てくれるなら明日の朝にでも退院できるように話しておくわ」「わかった、そうしてくれ。今夜は俺がついてる。授業が終わったらすぐ行くから。それまでは悪いけどいてやってくれ」

「いいわよ。でもね、いつまでもわたしが日本にいると思つたら大間違いよ」

「アフリカか。何で急に」

「急じやないのよ。ずっと前から思つてたの。医療面で役に立ちたって。あんまり先送りしてると、体力も気力もなくなっちゃうから、今しかないの」

「どうして何も言つてくれなかつたんだよ」

「ヒロシに言つても仕方がないじゃない。わたしのことをわたしが決めたんだから。それとも、あなたも一緒に来て守つてくれる?」「そりや無理だよな」

「でしよう」

「で、いつ行くんだよ」

「年末よ」

「待てよ、年末って」

「もう色んな手続きも済ませてあるから。そんなことより、病院にちゃんと来てよね」

恭子は大変なことになつてゐし、せつはいなくなるなんて宣言するし、おまけに塾の仕事はこれでもかといふほど滞つてゐし。何をどうするか整理し切れない。が、まず、恭子のことだらう。

病室に入ったときには、恭子はもう眠っていた。せつにお礼をい、イギリスへ行つてきた理由をかいつまんで説明した。

ずっと、眠る恭子のそばにいた。可愛らしい寝顔だった。少し痩せたみたいだつたが、スヤスヤと安らかな寝息をたてる恭子を見て心身共に何とか回復するのではないかと思つた。しかし、明け方、恭子の口から漏れた言葉に慄然とした。

「・・・・・姉さん、すぐに行くから。待つてね」

10月25日

恭子が田を覚ました。俺の顔を見て素直に微笑んだ。

「田が覚めたな」

「いつからいってくれたの？」

「ゆうべから。せつと付き添いを代わつたんだ。それより、気分はどうだ？」

「いいわよ。ありがとう」

退院の手続き、挨拶をして、病院から恭子を連れて出た。恭子の部屋に着いたのは昼前だつた。

「恭子、しばらく仕事は休め。連絡しておいてやる」

「ええ、そうして」

「腹減つてないか？何か作つてやるうか？」

「うん、お願ひ。何でもいいから作つて」

「よし、ちょっと待つてろ」

冷蔵庫を覗き込みながら思つた。今朝から恭子が素直すぎる。明け方の言葉が思い出された。

「恭子、ゆうべ何か夢でも見てたのか？」

「ううん、別に。どうして？」

「いや、寝言を言つてたから」

「どんな？」

「なにかブツブツ言つてたけどよく聞き取れなかつた」

本当にことは言えなかつた。

「そうなの。覚えてないわ」

「もう少しいてね」

恭子が言つたのでびっくりした。素直びっくりが、甘えてくるなんてどうなつてんだろ。絶対変だ。

午後2時を回つた。もう行かないと溜まりに溜まつた仕事が片付かない。

「それじゃ、行くから。無理しないでおとなしくしてねよ」

「うん」

「明日の朝また来るよ。授業が終わつたら電話入れるけど、何かあつたらすぐに携帯を鳴らせ、飛んでくるから」

「うん」

部屋から出て向歩か歩いてふと振り返ると、恭子が微笑んだ。そして、言つた。

「ヒロシ、本当にありがと。てよつない」

生徒達はテキストの問題を解いている。わざかだが、考え方をする間ができてしまった。間髪入れず恭子のことが頭に浮かんできた。素直過ぎる。全く恭子らしくなかつた。「うん、お願ひ」「もう少しいてね」「ありがと」「てよつない」・・・・「やつがなら」「恭子からこの言葉を聞くのは3回目だ。これまでの2回はその後本当に俺の前から消えた。しかも「姉さん、すぐに行くから」・・・・・・まずいぜ!だが、絶対に行かせない!

「お前ら、悪い!自殺ー。」

いきなり叫んだので、生徒達がびっくりしてて。

「何?」

「ちょっと急用」

「どこ行くの？」

「秘密！」

教室を出て走って職員室に戻った。かばんを取り、職員室をでたところに塾長がいた。何で今日に限ってフラフラしてるんだよ。

「塾長、何やつてるんですか？」

「ああ、ちょっとトイレ」

「そうですか。じゃ」

「はい。・・・・ちょっと一岸和田先生、どこ行くんですか！」

「ええと、弟が危篤で早退します！」

走りながら、振り返りもせずに答えた。塾長が怒鳴った。

「父親の次は弟か！」

「それでーす！」

叫んだら、近くの教室から笑いが聞こえた。走りながらかばんから指輪を取り出した。指輪を強く握りしめて、タクシーを捕まえるために大通りまで更に走った。

恭子の部屋に着いた。入り口のドアは閉まっていたがロツクされていなかつた。靴を脱ぐのもどかしく、部屋の中に上がりこんだ。

「恭子！」

呼んだが返事がなかつた。キッチンにもリビングにも恭子はいなかつた。何か声が聞こえる。奥の寝室に入った。ベッドの上に座る恭子の後ろ姿があつた。窓に向かつて何かひとり言を言つていた。

「恭子」

声をかけると初めて俺に気付いたようだつた。俺の方に顔だけ向けた。ゾッとするほど白い顔だつた。力のない声が返つてきた。

「ヒロシ？」

「おい、どこか痛いのか？」

俺の問ひには答えず、恭子はまた窓の方を向き、いついつつた。

「姉さん、ヒロシが来たわよ」

胸が張り裂けそつだつた。声が出なかつた。たとえ出たとしても、

恭子にかける言葉は思いつかなかつた。恭子は見えない彰子と話していたのだ。

「姉さん、もう、そんな顔しないでよ。もうすぐよ」

頭の働きも体の感覚も鈍くなつてきた。自分とは関係の無い世界に迷い込んだようだつた。

「わかつたわよ。そんなにせかさなくとも、わたしはすぐそつちに行くから。・・・・・ヒロシ？」

「それ」は、ゆつくり振り返り俺を見ると、また「彰子」の方に向き直つた。

「ヒロシはまだ行けないのよ。」うちにこるのよ。残念でした。いいじやない、わたしがそばにいれば、一緒にヒロシを待つましょう

「う」

俺を待つ？

「でも、3人そろつなんて、本当に何年振りかしら。あ、姉さん、やつぱりヒロシがいると嬉しそう。顔がゆるんでるわよ。げんきんねえ」

「それ」は体ごと俺の方を向いた。

「ほら、ヒロシ、彰子姉さんよ」

「それ」は左腕を肩の高さまであげ、首から上を左に向けた。上向きになつた手のひらの先にいる「彰子」を俺に示すように。突破口ーーションの映像だつた。俺は田でゆつくりと細い手の動きを追い、白い横顔を見つめ、揺れる黒い髪を眺めた。

「2人ともどうしたの？ 何か話すことはないの？」

「それ」が不思議そうな声を出してこちらを向いた。続けて口を動かして何か音を発していた。

肩、腕、手のひら、首、横顔、髪、口。「それ」が、モノが、バラバラに動いていた。

音を聞き、モノを見ているしかなかつた。手を伸ばせば届くところで起きているはずなのに、俺がいるこの同じ時間に起きているはずなのに、俺とは何の接点もないただの現象が続いていた。その現

象が世界と切り離されているのか、俺が世界から遊離しているのかわからなくなってきた。

それでも、俺の目は何かを見つけようと動いていた。ようやく顔を探し当たた。本当に白い顔だった。その中に黒い大きな瞳があつた。瞳に視点が合つた。その瞳を中心に、部分ごとに切り離されたモノではない何かを認識しようとした。「それ」は恭子だった。このとき、俺は現実の世界に戻つて来た。

俺の中で何かが噴き出した。声が戻ってきた。

「恭子！ 彰子が見えるか！ おい、彰子が見えるのか！」

俺は恭子の両肩をつかんで揺すつた。

「今、何が見える！ 俺だろ、俺の顔だろ！」

恭子がゆっくりとうなずいた。

「彰子の声が聞こえるか？ 聞こえないだろ、俺の声しか聞こえないだろ」「恭子がまたうなずいた。

「そうだろ、彰子はもういないんだから」

恭子が口を開いた。

「わたしが姉さんを・・・・・・」

「恭子！」

言葉を遮つた。心を救わなければならぬ。力をくれ！ 言葉をくれ！ 指輪を握りしめた。

「恭子、死んでもいいぞ。死にたかつたら死ね」

恭子がびっくりしたように顔を俺に向けた。俺は続けた。

「だけど・・・・・・」

恭子が少し首をかしげ、俺を見た。

「俺のところで死ね！」

恭子の目から涙がこぼれ落ちた。

「いいか、確かに彰子は死んだ。だが、それはお前のせいじゃない」

恭子の泣き顔が俺を見つめた。

「人は病気や事故では死はない、ましてや他人のせいなんかで死ぬ

もんか。寿命で死ぬんだ、神の思し召しだ

一思し召し・・・・・

乾子ほどの偉いの仕事も済ませたんだ。その仕事がわかるか

1

恭子の首がゆるぎり左右に動いた。

一
俺をお前に会わせることだ

恭子の目が大きくなつた。また涙があふれてきた。

—そして、幸せをお前に手渡すことだ

- 幸せ? 「

俺は彰子と一緒にいて幸せだった。彰子も幸せだった。幸せなま

ま彰子は死んだ。これだけは確かだ。彰子は幸せだつたんだ」

「姉さん・・・・・・」

「恭子、お前がいて彰子は幸せだつたんだよ」

わたし、が、い、て、?

「そうだとお前がいたから幸せだった。恭子や俺やマリアが生きていた

囮まれて幸せだつたんだよ。俺にはわかる、彰子はこう言つてる
恭子、わたしと同じくらい幸せになつて『いりん』つて。だつて、彰

一
一
二
二

「……………」

「ああ、ハービー。マリアのところで確かめた

卷之三

前が受け取る『幸せ』だ

勝手の間が世論の主がれた。

「お前は幸せにならんだ。俺お前を幸せにすると、彰子以上だ。

か、「幸せなほど死なせる。約束する。お前は誰のためでもない、

お前と俺のために死ね。
2人が幸せだったその証に、俺のところで

死ね、俺のところで幸せに死ぬんだよ。それまでは一緒にいいか

約束しろ！」

恭子の泣き顔が、美しく、可愛らしい泣き顔がうなずいた。

俺は恭子を抱きしめた。耳元で泣きながらささやく恭子の声が聞こえた。

「あなたのところで死んでいいのね？」

答える代わりにもつと強く抱きしめた。今まで恭子を苦しめていたものを締め出すように。

10月26日

冷静になつてみると恥ずかしい。「幸せ」だの「死ぬ」だの、安っぽい歌謡曲でも聞かない。それを何度も繰り返すなんて。彰子が幸せだつたから恭子も幸せになれ、なんて、こじつけだよな。第一、これからつていうとさう、なんで「死ね」なんだろうか。よくわからない。何より、恭子より長生きしなくちゃならなくなつたぜ。無理だ。あいつ以上の生命力が俺にあるはずがない。とんでもないことを言つちやつたような気がする。

まあ、いいか！

せつに恭子とのことを報告した。本当に喜んでくれた。ありがとう、せつ、お前のおかげだよ。

一応、安達にも恭子とのことを報告した。ちょっと喜んでくれた。ありがと、安達、下手に首を突つ込まないでいてくれてよ。いや、本当に。

【安達が】

「やうか。ついに恭子ちゃんの心をこじ開けたか。よくやつたよ。褒めてやる。そういうや *Kim Carnes* っていう女性歌手の歌で”ROUGH EDGES”つてのがあるんだよ。割とグッときるんだけど、まるでその歌詞みたいなんだよ、お前と恭子ちゃんとは。まあ、聞いてみる。とにかくおめでとうよ。お前達、お似合いかもな。そうだなあ、キャベツと青虫へりこにまよ

早速、CDを買って、”ROUGH EDGES”ヒヤリを聞いてみた。いい歌だった。安達、ありがと。

当然のようすに減給処分をへらつた。今回せひすがにこひびく叱られた。授業放棄だもんな。でも、いい。

授業中、生徒達が問題を解いている間、つい”ROUGH ED GES”を口ずさんでしまつた。「機嫌が良さそうだ」と指摘された。「そうか」と、とぼけたが甘かつた。

「恭子さんとくまくいつたんだ」

井上が要らぬことを言つた。どうせひやかされるのだ、

「ああ、うまくいつた」

正直に答えた。「これで、もう授業にならない」と覚悟したが、生徒達は意外におとなしい。変だ。青山が口を開いた。

「先生、おめでとう」

拍手と歓声が湧き起つた。

何? こいつら、祝福してくれてるぜ。

「お前ら・・・・・。ありがと」

結局授業にならなかつた。生徒達は落ち着いてたが、俺が壊れてしまつた。

11月3日

アメリカ時代の友人、ブライアンから手紙が届いた。彼は現在、西海岸の大学で主に日本文化を教えているのだが、その大学で日本の社会や教育について教えないかという誘いだつた。研究も十分にさせてくれるし、論文次第だが将来のポストも考えてくれるという。すごい話だ。前向きに検討しよう。

11月5日

塾からの帰り、午後11時を回つてゐる。携帯が鳴つた。恭子か

らだった。酔つていいやつだ。ちょっとだけ。

「ヒロシーィ、お仕事終わつたんでしょー。」
「苦勞だつたねえ。焼

肉食べよー」

これが、つい先日まで、生きるの死ぬのと騒いでいた女のかけてくる電話か、いつたい。

結局、呼び出しに応じてしまった。ブライアンからの誘いについても相談してみたかったし。でもやめておけば良かつた。俺が焼肉屋に着いたとき、恭子はやっぱり酔つていた。それも、かなり。

「ヒロシーィーイ、おいですよ。食べよ」

恭子の席には何枚も皿がならんでいる。杯のビア・ジョッキも。

恭子の向かいに座つた。

「なによーお。何か言いたそうじゃない」

「いや、別に。遠慮なくいただきましょーか。誘つた方のおごりだらうから」

「おおう、遠慮なくいただいてくれー」

すでに恭子が頼んでいた肉などを網にのせて焼きながら、ブライアンの手紙の件を切り出した。

「ブライアン? 何それ? ブライアン? ブラ、イアン。ブラ、イアン。アハハハ。ブラ、取っちゃイヤーン。イヤよ、イヤよ、アメリカなんか行っちゃイヤーン。アハハハハ」

この女が酒飲んでるときに真剣に相談を持ちかけた俺が馬鹿だつた。話はあきらめて食べることに専念しようと思つたが、できるわけがなかつた。恭子は、箸で網から肉を取るまでは普通にするのだが、自分の手元のタレが入つた小皿に運ぶまでにポロポロと全て落としてしまうのだ。何もない箸にタレをつけて口に運び、何かに気付いて不思議そうに小皿を見つめる。俺は敢えて何も言わなかつた。同じ事を何度も繰り返した後、肉を網から直接口に持つていく行動に出た。しかし、やはり途中で落としてしまう。これも同じ事を何度も繰り返した。恭子の前は落とした肉でいっぱいだ。テーブルは肉と油でギトギトだ。見ていて恥ずかしい。近くの席の客や、店の

従業員も恭子を見て笑つてゐる。もう教えてやるうと呼びかけると、恭子はびっくりするほど真剣な表情で俺を見た。そして、これまた真剣な声でこう言つた。

「わたしの肉がないの。ねえ、ヒロシ、わたしの肉知らない？」

11月6日

昨夜の「わたしの肉がない」事件を、絵を描きながら生徒に話してやつたら喜んでいた。

11月8日

ブライアンからの誘いについてあれこれ考えてみた。

「英語」、何とかなる。「専門知識」、一応大学院で勉強したし、何とかする。「アメリカでの生活」、留学してたし、平氣。「お金」、詳しくは聞いてないけど、栄明塾より給料が安いことなど有り得ない。問題なし。「家族」、俺などいてもいなくとも関係ない。安心。「恭子」、そのうち仕事でアメリカだ。好都合。

なんだ、風はもうアメリカへアメリカへと向かつて吹いてるよ。でもなあ、教え子達がいるからなあ。

11月22日

恭子は来年の4月からロサンゼルスで仕事だそうだ。

「お前、俺のところにずっといるんじゃないのかよ」

「心はずつと一緒よ。置いておくわ」

「昔どつかのサッカー選手が代表をばずれるときによつたような言葉だな」

「ヒロシこそこそアメリカに来れば。あなたの1人くらい養つてあげるわよ」

「いっつは、ブライアンの件などこれっぽちも頭に残つていないんだ。見事なものだ。よくわかつた。こいつと何か交渉するときは、酒飲ませて、じきくさに紛れにサインなり捺印なり」させればいいんだな。

「ヒロシ、聞いてるの？」

「ああ、それ、いいね。俺が家事一切してやるよ」

「ふうん。本当にこの国が、生徒達が捨てられたらね」

「『捨てる』つてのは何かトゲのある言い方だな」

「でつて、そうでしょ。それにね、これまでずっと離ればなれだつたんだからね。別々の国に住むことが今更どうだつて言うのよ」

「そりやそうだ。だが、お前、俺と一緒にいるのが本当は嫌なんじやないか？」

「そんなことないわ。でもね、ヒロシにはヒロシの大切なものがあるでしょ？」

「恭子もずいぶん大切なんだけど」

「ありがとう。だけど、自分の生き方を捨ててまでわたしを大切にしてくれなくともいいのよ。わたしにだつて自分の生き方があるし」「何だよ。結局今までのままか」

「違うわよ

「わかってるよ」

12月1日

うーん。決めた。アメリカに行こう。

12月3日

休憩時間、ふと教室をのぞいて驚いた。大野（中2女子）が自分のおっぱいを机の上に乗せて安らいでいたのだ。この大野は、はつきり言うと太つている、並ではなく。おっぱいも並ではない。確かに

に普通の状態だと重からず、肩も凝るだらう、邪魔にもなるだらう。でも、普通するか？ 体をすりして、首は椅子の背もたれの上、おつぱいは机の上なんて。注意もできないよな。

「最近、おつぱいを机の上に乗せてくつろいでいる人がいますが、見苦しいのでやめるよう」

なんて、絶対言えない。

女子生徒だつて、そりや、何も言えないよな。男子生徒なんか見て見ぬ振りしてる。俺も見なかつたことにしよう。

恐るべし大野。

12月13日

珍しく仕事が早く終わったので、北と進藤、片桐さんと一緒に飲みに出た。鍋をつつきながら、ビールや日本酒を飲んだ。

隣では普通のサラリーマン達（俺達、少なくとも俺は普通ではない）が鍋を囲んでいる。子どもの学校や塾の話をしているから、苦笑しながらもつい耳を傾けてしまった。

「だけど課長、課長のところはもうすぐ中学受験じゃないんですか？」

「ああ、上の男の子がな。しなくともいいのになあ。女房が受けたば儲けものだつて」

「僕は中学受験なんて考えもしませんでしたよ

「僕も公立だつた。金なかつたし」

「課長、またまた」

「いや、本当なんだ。うちは、僕が小学生のとき、親父がよそに女作つて出て行つたからなあ

「え、なんですか？ 初耳だなあ

「うん、だから『モチヅキ』っていうのも母方の姓なんだ。小学校の途中で名前が変わっていじめられたら困るつて、中学に入るときには『モチヅキテツペイ』になつたんだよ」

「へえー。因みにそれまではどういう名前だったんですか？」

「『力ヤマテツペイ』だよ」

俺は思わずむせてしまつた。片桐さんが背中をさすってくれた。

「親父は単身赴任したイギリスで女作つて、会社も辞めちゃつて。日本に帰つて来るには来たらしけど。どうしているか。母親は何も言わないし、僕も聞いちやいけないつて思つてたし」

「全然音沙汰なしですか？」

「何でも、娘ができたとかちらつと聞いたことはあるけど。僕の妹だな」

「課長、親父さんのこと恨まなかつたんですか？」

「そりや恨んださ。母親が可哀想だつたし。だけど、今はなあ、親父の生き方もわからないでもない。そんな風に生きてみたいなあ、つて、たまには思う」

「浮氣したいつてことですか？課長もてるからなあ」

「からかうな。でも、浮氣じやないんだよ。親父は本当にその人を好きだつたんだよ。だから、母親も気持ちの区切りがついたんだろうなつて。いい加減な浮氣くらいで別れるような女じやないからな、うちの母親も。今は孫に囲まれて幸せそうにしてる」

「へえー、知らなかつたなあ。でも会いたくないですか、親父さんや妹さんに」

「あつてみたいなあ。親父はぶん殴つてから、その後一緒に酒でも飲みたい。妹には『初めまして、兄です』なんて挨拶して、照れたりしてなあ」

「妹さん、美人なんですかね？」

「僕の妹だよ、美人に決まつてる！」

「課長、是非紹介してくださいよ」

「もし会えてもお前にだけは紹介しない」

「ひどいなあ。でも、本当に会えたらいいですね」

「ああ、いつか会いたいなあ・・・・・。じゃ、行くか」

テツペイ課長は部下を連れて出て行つた。

俺は、テツペイさんのいた席に向かつてグラスを軽く上げ、会釀

して、ビールを一気に飲み干した。進藤が不思議そうに呟つた。

「岸和田先生、どうしたんですか？」

「いえ、ちょっとといい話を聞かせてもらつたもので」

「盗み聞きですか。僕もよくしますよ」

北が相変わらずとぼけたことを呟つ。

テツペイさん、お兄さん、あなたの親父さんはもうこの世にはいません。上の妹さんも親父さんのとこに行つちゃいました。下の妹さんは幸せにしていますよ。それと、あなたの妹さんは2人とも間違いなく美人ですよ。

俺は、思わず泣いてしまつた。いきなり泣き出したりで、皆、啞然とした。北が、

「泣きたいときは思いつきり泣かなくちゃね。僕は笑おうかな」なんて言いながら笑い始めた。皆、笑い始めた。俺も、泣きながら笑つた。

12月21日

今日で2学期の授業が終了。きりがいいので、塾長に、3月、公立高校の入試が終わつたら塾を辞めたいと申し出た。

「岸和田先生、それはちょっと困ります」

「別に、いいでしよう。塾長は常々、『講師の代わりはいくらでもいる』っておっしゃつてるじゃないですか。ましてや、僕みたいな問題ばかり起こす講師はいなくなつた方がいいでしょ」

意地悪な言い方をしてみた。案の定、塾長は言葉に詰まつてゐる。「・・・まあ、まだ時間があります。考え方させてください。でも、口ではなんと言おつと、何度減給しようつと、正直などいろ、あなたが惜しいんです」

「コノヤロ、今更何を言い出すんだ。

「もし、この塾を辞めたとして、その後は何をするつもりなんですか？」

「生徒を引き抜いて自分で塾を始めるとか、ライバル塾に移るなんてことはしませんから」「安心ください」

「それじゃ、何を？」

「言う必要も義務もないと思りますので」

「また、意地悪な言い方をしてみた」

しかし、俺もプロだ。公立高校入試まではきつちりと生徒達に近くしてやるぜ。

12月22日

恭子にアメリカに行くことを話した。向こうの大学で教えると言つたらびっくりしていたが、嬉しそうだった。本当は、もう、離れたくないのだ。俺だつてそうだ。

12月23日

ブライアンに電話し、アメリカに行くと告げた。変な日本語で喜んでくれた。

「Hi「roshi，SAMURAI，BANZAI！」

実家にも電話してみた。弟が出た。

「ああ、俺。言つておいてくれ。来年アメリカに行くから。向こうの大学で教えるつて。じゃね」

「待てよ、何か、見合いの話が来てるぜ。いい加減に落ち着いてもらわなきや困るつてさ。それに、いつまでも彰子さんのこと引きずつてるわけにもいかないだろつて」

「落ち着くような年かよ。それに、彰子のことは一生忘れないぜ」「

「そうか。でもよ、俺もお見合い写真見せてもらつたけど、美人だぜ」

「じゃ、会つだけ会つてみるか。お見合いつてのも話の種だ」

「親父にどやされるぜ、ふざけるなって」

「いいじゃないか。美人の顔見て、いい雰囲気のどいでお茶でも飲めりや」

「相手に失礼だらうが」

「なあに、嫌われるのは簡単さ」

「・・・・・相変わらずだな。俺が言つのも変だけど、大人になれよ」

「イヤだ。じゃな。伝言頼む。そのうち顔出す」

12月24日

冬期講習開始。気合が入り過ぎて自分が怖い。だが、忙しいぞ。

12月26日

昼休み、職員室で生徒達と馬鹿話をしていたら、「岸和田先生、お電話です」と片桐さんが知らせてくれた。受話器を取る。

「もしもし、岸和田です」

「ヒロシ、今、空港。今から日本を離れるの」

せつだつた。アフリカでの医療ボランティアに参加するのだ。

「悪いな、見送りに行けなくて。せめて年が明けて松が取れる頃ならな」

「見送りに来てもらつても困るもの」

「俺は邪魔者か」

「う女の正門で出会つたときからのね。3年ほど行って来るわ。それまでには恭子さんと幸せになつてるのよ。何しろ、彰子と・・・」

「・・・」

せつのが途切れる。泣いているのだらうか。

「彰子と何だよ?」

「何でもないわよ。彰子も恭子さんもあなたのどこが良かつたのか

「うう」

「さあね。せつも俺とつき合つてみればわかるんじゃないか」

「最後まで軽口たたくわね。馬鹿なこと言つてないでしつかりするのよ」

「じよひと思ひ。せつ、お前も向ひのひだりと役に立つて来いよ。

「元気でな」

田の前がかすみ始めた。彰子や恭子と関係なしにせつと田舎つていたら、きつと……。

「ありがとう。じゃ、行くわね」

「ありがとう。せつ！忘れないぜー！」

「そうよ、ずっと覚えていなさい。わたしも覚えてるわ。さよなら、

キ・シ・ワ・ダ・ヒ・ロ・シ」

プリンと電話が切れた。

せつ、吉村せつ、俺は一生お前に感謝し続ける。

「今度は『せつ』だつて『

恭子さんはどこにいちゃつたの』

白井と長崎の得意技、「相手に聞こえる内緒話」で我に返つた。しまつた、ここは塾だった。

12月27日

高3の原が授業中ずっとにやついていた。大学入試を田前にして、ついに気が触れたかあきらめたかどちらかだろ。可哀想に。授業後、一応理由を尋ねると、何と「彼女ができた」と言ひ。「1つ年上で、今、看護学校に通つてゐる人なんですよ。年上とは思えないくらい可愛らしいんすよ」

「将来は看護婦か。いいな」

「先生、自分の趣味に走つちゃダメですよ。僕の彼女なんですよから

「お前に俺の趣味が理解できるのかよ」

「できません。先生の相手はめちゃくちゃな人つて噂ですか？」

「当たりだ。だが、他人に言わるとあまり面白くない。」

「俺の趣味はいいから。ま、うまくやれ。だが、お前、今がどんな時かわかつてゐるだろ。勉強もきちんとしろよ。泣くことになるぜ」「はい、もちろん。何か、こう、全てにパワーがみなぎるっていうんですか？勉強もはかどるんですよ」

「勝手にしろ」

1月5日

授業後、富本が話しかけてくる。

「ねえねえ・・・・・」

「富本、もう『今年』だぜ。やめよう。俺が悪かった。謝る」「じゃなくて、中国の本読んでたひ、『宦官の息子』とかよく出でくるんだけど。何故？」

「どこが、『じゃなくて』だ。いつもの話になつてるじゃないか。色々あるんだろ、宦官になる前の子とか、養子とか」「へえ、そうか。それとね、宦官つて中国だけじゃないの？」「ヨーロッパ辺りにもいたんだぜ。元々はオリエントで・・・・・。やめよう、富本。頼むから試験に出る勉強して」

1月6日

安達が電話をかけてくる。

「せつさんの携帯に電話してもつながらないんだよ。お前、知らない？」

「そりいや、安達にはせつのこと誰つも忘れてた。」

「せつなら医療ボランティアでアフリカに行つたぜ、年末に。3年は帰つて来ないって」

「何いーお前、どうして早く教えてくれなかつたんだよ」

「悪い悪い。でも、お前とは関係ないじゃん」

「これから関係作るんだよ、俺とせつさんは」

「ひょっとして、せつのことが本氣で好きなのか?」

「ああ、好きだよ」

「早く言えよ。何とかしようもあつただひつ」

「何だとーお前は恭子ちゃんのことで屍になつてたから氣を使つてたんじやないかよ。それを、何?自分さえうまくこつたら、俺やせつさんはもうどうでもいいわけ?へえー、いつからそんな人になつちやつたの?」

「お前がどれだけの氣をつかつてくれたつて言つんだよ。でも、逆らつたらやせこじくなるだけだ。」

「スマン、スマン。だけど俺も連絡取れないんだよ。向こうで落ち着いたら連絡先を教えてくれるつて」

「なんでお前なんだよ!俺に知らせてくれよ。お前には恭子ちゃんがいるからいいじやないか。せつさんは俺こじつけ」

「わかつたよ。連絡先がわかつたら教えてやるから。その先は好きにしろ」

「俺もアフリカに行くぞ!」

安達はせつかく入つた出版社をどうするつもりなんだろ?。

「安達よ、ちよつと冷静になれよ。会社があるだろ?」

「つむれ。女のことで熱くなるのはお前だけの専売特許じやないんだよ。せつさんのことには比べりや、俺の入つた会社なんでどうでもいいことなんだよ」

「お前がせつを好きなのはよくわかつたけど、せつがお前をどう思つてゐるかくらいは確かめてからにしたらどうだ?会社辞めてアフリカに行くのは」

「おい、『せつ』『せつ』『ひつ』ってファーストネームを呼び捨てにするな

「はいはい、わかりました。せつさんの気持ちは確かめたんですか

？」

「いや、まだだ。行つてから直接確かめる。だから、せつせんの連絡先はすぐに教えろよ」

安達が本気でせつに惚れてるとは思わなかつた。

1月8日

3学期の授業開始。入試直前で、受験学年は気合いが入つていた。俺は冬期講習の疲れが出て、気力も体力も途切れそうだつた。しかも、いつの間にか冷たい雨が降つていて。傘を持って来ていない。こんな雨に打たれたら絶対に風邪を引いてしまう。まいつたなあ。授業終了後、塾の前は、我が子に傘を持って来たり、我が子を車で迎えに来たりした生徒の親達でいっぱいだ。生徒達がうらやましい。

10分ほどで生徒達も親達も帰つて行つた。と、1つ、こちらに近付いてくるベージュの傘があつた。その下はえんじのコートだ。ベージュとえんじの下で恭子の顔が微笑んだ。

「これ、傘、使って。持つて来てないんでしょ」

「ありがとう。わざわざ持つて来てくれたのか」

「ついでがあつたから。じゃあね、風邪引かないでね」

「ああ、助かつた。ありがとう」

「どういたしまして」

恭子は歩き始めた。俺はその後ろ姿に言った。

「おい、その色、相変わらずよく似合つた」

恭子は振り向くとこりこりと笑つた。天使の（少なくとも俺には）笑顔だつた。

「先生、今のが恭子さん？」

「ウオッ、ビビッた。いきなり話しかけてくるなよ。誰だ？・長崎だつた。

「ああ、酔っぱらいの恭子さん」

「ふつん、まともな人じやん。て言つか、すゞくカワイイ
こいつらの褒め言葉は「カワイイ」しかないのだろうか。まあ、
いいや。

「長崎、だまされちゃダメだよ。あいつはいつでも悪魔になれるん
だから」

「先生、その悪魔にまいつたんでしょ」

1月13日

書店で立ち読みをしていると、近くで誰かが「ダディー！ダディー！」
と叫んだ。そちらを見ると、どうしたって英語が母語には思えない
顔をした4、5歳くらいの小汚いガキだった。何が「ダディー」だ。
お前は「父ちゃん」って言わなきやだめだよ。リアリティがゼロな
んだよ。まだ「ダディー、こっちだよ」なんて言つてやがる。不釣合
いな言葉を発する口でもつねつて泣かせてやりたくなつた。

イヤ、待て。ここは日本だ、子どもが自然に「ダディー」なんて言
うわけがないじゃないか。親がそう言わせているのだ。ウン？もし
かしたら父親が英語圏の人か、一部の芸能人のように「ダディー」と
いう呼び名が似合う人かもしれない。と、思い直し、「ダディー」が
現れるのを待つていた。

出たぜ。どこが「ダディー」だ。てめえ、「亀吉」つて名前（こ）の
名前の人のがいたら「めんなさい。飽くまでイメージの問題です。他
意はありません）がピッタリのどこからどう見ても由緒正しい2千
年来の農耕民族の顔して何が「ダディー」だ。「おつとう」、譲歩し
ても「父ちゃん」じゃないか。「父ちゃん」が嫌なら「お父さん」
とか、アチラの言葉がよければ日本でも市民権を得ている「パパ」
とか、いくらでも呼ばせ方はあるだろうが。そりや、どう呼び合お
うが親子の勝手だが、家庭内だけにしてくれ。現実と大きく乖離し
た呼称を人様に聞かせるのは迷惑つてものだ。各自治体は、こうい
う親子を取り締まる迷惑防止条例を作れよ。

よほど注意してやるうかと思つたができなかつた。母親が来たからだ。その「父ちゃん」、「母ちゃん」に向かつて「ハニー」って呼びかけたのだ。笑つてしまつて注意するどころではなくつてしまつた。「母ちゃん」は「父ちゃん」を「ダーリン」とか呼ぶんだろつた。迷惑家族は笑つてる俺をにらみながら通り過ぎた。あいつらが「ダディ」で「ハニー」なら、塾長だつて「リチャード」で、塾長の奥さんなんか立派に「ベアトリス」や「エリザベス」だぜ。腹も立つたが、笑わせてもらつた。

1月17日

夜の10時を余裕で過ぎてゐる。中2の渡辺が授業中にうまくいかなかつた英単語のテストを受けてゐる。再テストなら普通にあるが、渡辺は再々々々々々々々々々テストくらいなのだろうか。かなり多めに用意しておいたテスト用紙がなくなるつとしている。またしても失敗した渡辺がノートに英単語を書きながら言つて。

「僕、頭が悪いから・・・・・・」

これだよ。できない理由に「頭が悪い」つてすぐ言つもんな。

「たかが単語を覚えるのに、頭の良し悪しが関係あるもんか。ただ、覚えるか覚えないかの違いだ」

「なかなか覚えられないのは頭が悪いからでしょ」

「違うよ。覚えるのに少しの時間で済むか、長い時間かかるかの違いだ」

「そりかな、やつぱり頭の差だよ。尾崎なんかテスト前に1分ほど眺めたら満点取つちゃうんだから」

「尾崎は確かにすごいよな。でも、覚えてしまえば尾崎もお前も同じだろつが」

「そり・・・・・・?」

「100mを10秒内で走るか17秒で走るかくらいの違いだ。10秒以内で走る奴はオリンピックなんかに出て名が売れるけど、

17秒の奴も、その7秒後にはやつぱり100m走っちゃってるんだぜ。10秒を切る奴はそりゃとってもすごいけど、100m走ることには変わりはない。どんな体でもありさえそりゃ100mくらいなんとかなる。脚がなくつたって車椅子でそこそこの速さで走れるんだぜ。人間の能力差なんてせいぜいそんなもんだろ。頭も同じさ」

「そうなんだ」

「そうだ。だから頭がいいとか悪いとかグダグダ考えずに、時間がかかるつてもいいから覚えりやいいんだよ」

「ごめんね、いつも遅くまで」

「謝つてどうする。俺はいいんだよ。人のこと気にするより覚えてしまえ」

1月19日

恭子がふとつぶやいた。

「先生つて何なのかなあ

「は?」

「何となくね。ヒロシが先生してるのか、先生がヒロシしてるのか、どっちがだろつて」

「何だよそれ

「だから、何となくだつて。言つてみただけなの」

1月20日

原、彼女に振られる。彼女の最後の言葉は「あなたを好きだと思つたのは、錯覚だつたの」だそつだ。

1月23日

授業中、佐伯の手袋が田に付いた。

「おい、佐伯、ちょっと手袋貸してくれよ」

「いいよ」

「ありがと」

手にはつけずに足に履いてみた。無茶苦茶気に入った！なんか、昔の映画に出てくる怪獣の足みたいだ。見方によつては可愛いじゃないか。

佐伯はおとなしくテキストの問題を解いている。今のうちだ、とばかりに、教室中歩き回つてみた。いい。すくい。

誰も気付いてくれないと寂しいので白井をつづいて見せてやつた。

「カワイイ！」

白井が叫んだ。それ以後は授業にならなかつた。ただ1人、佐伯がブルーになつていた。

1月25日

白井が話しかけてきた。

「家でね、みんなにね、手袋を履いて歩いて見せてあげたの」
やめてくれよ。塾であつたことをいちいち家や学校で報告するんじやない。

「え？ やつちやつたの」

「うん、お母さんなんか気に入つちやつて、わたしと一緒に手袋履いて歩き回つたよ。お父さんに『うつとうじ』って言われたけど」
「お茶目なお母さんだな」

「うん。でもね、ふと気付いたようにわたしを見てね、『あんた、塾で誰に何教えてもらつてるの？』って

「で、どう答えたんだ？」

「うん。『岸和田先生に英語よ』って
うわあ。

今日はテレビの音楽番組に、Kという女性歌手が出演する。見た
い。番組は夜8時から、授業の真っ最中だ。しかし、見たい。この
上なく見たい。仕方がないのでその授業の生徒全員を強制的にテレ
ビのある教室に連れて行って、見せた。おとなしく見てるから不思
議だ。授業（テレビ鑑賞も授業の一環だが）より静かにしてるから
ムシとなつた。Kが歌つているときに歌詞を口ずさんでやつたら、
「ヒーフ！」とたしなめられた。とりつかれたように見入つていて
特に女子生徒。こいつらがみんなK憧れでいるとしたら、嬉しいよ
うな、とんでもないことのようだ。KがサマになるのはKだからで、
こいつらが一斉にくと同じ格好をしようつと、Kと同じ口調でしゃべ
りうつと、やつぱりこいつらはこいつらなんだうな。何を書いて
るんだれつ、俺は。うーん、自分に附加価値をつけることを教えて
やらねば。いや、先に自分を客観的に見つめる強さを持つてもらわ
なくては。勉強教えている場合じゃないかも知れない。

1月29日

もういや、昨日テレビでKが映つたら、女子生徒ほぼ全員が「カ
ワイイ」とか言つてたぞ。俺の考える「カワイイ」とはほど遠いメ
イクをしてたが、何でも「カワイイ」んだな、自分の気に入つたも
のは。そのうち世の中は「カワイイ」ものと「カワイクナイ」もの
の2種類だけで成り立つようになるんだろうな。あいつら「的」に
は。

塾長に呼び出された。やつぱり。

「昨日は授業中生徒にテレビ、しかも音楽番組を見せたそつだが、
どうこいつことだ？」
「やつぱりこいつことです」

「・・・・・」

普通なら「ザマミロ」、腹の中で言つてゐるが、今日は口から意外な言葉が出て來た。

「すみませんでした。以後氣をつけます」

「え・・・・・・・あ・・・・・・・」

塾長がびつくりしている。

「いや・・・・・・・、これから氣をつけてくれればいいんだよ」

すぐに解放された。

たまには謝つてみるもんだな。ザマミロ。

しかし、減給処分。

1月30日

授業が終わつて職員室に戻ると、北が質問に来た生徒に何か教える。何度説明しても生徒には理解できないようだ。北の説明が悪いわけではない。北は当たり前のことを最初から順を追つて丁寧に説明しているのだ。

「・・・・・といつことだ。わかつたか？」

「うーん・・・・・・・。まだ」

「よし、それなら・・・・・・」

結局、生徒が納得して帰つたのはそれから1時間ほどしてからだつた。大久保が北に声をかけた。

「北先生、よくあそこまで根気強く教えられますね。僕には無理かな」

北が答えた。

「さつきのは勝つたとは言えないけど負けてもないかな。じゃ、次の勝負に備えて帰ります。おつと、命の水も補給しなくちゃねえ、あかねちゃんどこで」

北は帰つて行つた。大久保はポカンとしたアホ面を数秒さらした

後尋ねてきた。

「勝ち負けって……。何なんですか？」

「さあね」

大久保にはわかるまい。俺も北の言う勝ち負けがわかっているのではない。だが、同じような基準はある。

生徒が、俺の教えたことを100%理解してくれりや確かに嬉しい。10か20言えば100まで理解してくれりや嬉しい上に楽だ。出来のいい生徒だけ集めてすごくレベルの高い授業もしてみたい。でも、今、ここにある現実に取り組まないとな。多くの普通人に理解してもらうことを放棄したら、それは俺の負けなんだ。そして、負けないだけで精一杯。勝つなんてことがあるのだろうか、先生といふ職業に。

1月31日

授業を始めようと思つたら高橋がいない。高橋と仲の良い城之内に尋ねてみた。

「ああ、高橋、今頃は彼とデートしてるよ」

「彼だあ。その彼つていうのは人間なのか？」

「そんなこと言つて。先生知らないの、スッッッゴイかっこいい人なんだよ」

「知るか。好きにしろよ。でも、高橋がよくそんないい男を捕まえられたな」

「そうよね、いい男とブス、美人とブサイクな男の組み合わせって結構多いよね」

「俺はそんなこと言つてないぜ。高橋がブスだなんて「

「言つてるじゃない。言いつけてやろ」

「構わないぜ。高橋の1人や2人、何とでも言いくるめてやる」

「でも、どうして釣り合わない組み合わせができるやうのかな？」

「そうだなあ、人間は自分の外見が他人に比べてどの程度のものか

なんて、結構よくわかるからなあ。で、外見が普通、あるいは普通以下の人はそれがよくわかつてゐるから、連れてる相手でその「コンプレックスを埋めようとする。つまり、つき合つ相手が美男・美女なら、自分もいい男・いい女に見られる。少なくとも、美男・美女を連れてるんだから、何かすゞいところがあるんだろうなと、みんなに思つてもらえる

「そうかもね」

「でも、美男・美女は誰がどう見たつて美男・美女なんだからつき合つ相手にそんなもの求めなくていい。まあ、好みの外見はあるだろうけど。だから、目に見えない内面とか、努力して獲得したものとか、努力そのものに惹かれることが多いんだと思う。で、そういう組み合わせが結構あるんだろつ」

「へえ、それじゃ、先生と恭子さんもそうなの

「どういう意味だ」

「だつて、恭子さんは美人なんじょ」

「ちょっと頭にきた。

「俺達は運命の出会いをしたの。それで、神様のはからいで付き合い始めたの」

言つた後の城之内のため息が少し耳に痛かつた。

2月1日

安達から電話があつた。

「おい、恭子ちゃんがおかしなこと訊いてきたぞ」

「何て?」

「『ヒロシは何が嬉しくて塾の先生なんてやつてたのかしら』ってで、お前はどう答えたんだ?」

「『多分、生徒が志望校に合格したり、夢に近付いたりしたかられしんじやないか』って答えておいたけど。実際はどうなんだ?」

「うーん、ちょこちょこ嬉しいことはあるけど、結果として目に見

えるのはそんなところだよな。だが、俺が生徒の夢を叶えるわけじゃないし、生徒と同じ夢も見られない」「そりや、そうだ。でも、恭子ちゃんは向でお前に直接訊かないんだ？」

「今、忙しいし、まともに答えないと思つたんだ」「そうなのか？」

「多分な」

「ふうーん。といひで、せつさんからまだ連絡はないのか？」

「ない」

「いいな、すぐに教えるよ」

恭子、俺は教えたいたから教えてたんだよ、教えるんだよ。そして、教えてても教えるても無力感を味わつてきた。それでも教える。俺は先生なんだから。先生である限り教えるよ。

2月2日

毎日が戦争。この業界の常とはいって、入試前のこの時期は毎年凄まじい。

しかし、推薦入試で孝行に受かった生徒や、早めに合否を出す一部の私立高校・大学へ受かった生徒もちらちら出てくる。お前達、よめやつた！

2月3日

せつから手紙が届く。住所と近況報告だけの簡単なものだった。早速、安達に教えてやつた。

2月4日

昼過ぎ、安達の母親から電話があつた。

「智宏が、会社を辞めてしばらく旅に出るつて言つんですよ。馬鹿なことは止めなさいって言つても、『今アフリカに行かなきや一生後悔する』とかわけのわからないこと言つて、全然聞かないんです。お願いします。智宏を止めてください」

「今回だけは僕にも止められないと思います」

「岸和田さん、何か知つてるんですか?」

好きな女を追いかけて行くんです、なんて本当のこと言つたら、とんでもないことになりそうだしなあ。ええい、ウソも方便だぜ。『はい。実は智宏君は飢えや貧困で苦しんでいるアフリカの人々のことをずっと前から考えていたんです。苦しみを和らげる方法はないか、自分に出来る事はないかって。それは真剣に』

「そうなんですか?」

「ええ。せつかく入った会社はどうするんだ、冷静になれって言つても、『アフリカの人のこと比べりや、俺の入った会社なんてどうでもいいことなんだよ』って叱られたんです。止むに止まれぬ思いなんですよ。きっと、智宏君にとって、『アフリカの人』は人生をかけて悔いのないものなんでしょう。彼の熱い想いは僕には止められません」

「智宏がそこまで考えていたなんて・・・・・・」

「立派でしよう?でも、お母さんには照れくさくて言えなかつたんだだと思います。ほら、男の子つていうのはそんなところがあるじゃないですか?」

「そうですねえ、女親には、男の子つてよくわからないんですよ。でも、フラフラしてた智宏がねえ、そんなこと考えてたなんて。ありがとうございます。よく話し合つてみます」

「何とかごまかした。

安達の携帯を鳴らして塾まで呼び出す。

「・・・・・というわけで安達よ、お前は『アフリカの人』に人生をかける立派な人になっちゃつたから。まあ、親がどう言おうが

行くんだろうけど、大義名分は立ておいてやつたから、少しほ話
し合つてみるよ」

安達は何も言わずに両手で俺の右手をしつかり握り、何度も上下
に揺すつて、その後やつぱり何も言わずに出て行った。

良かつたんだうづか。

3月3日

恭子がドキッとするようなことを言つた。

「ヒロシ、人の気持ちを確かめる、つていうか、試したことある？」
結構最近確かめたぜ、お前を口説くために。わざわざイギリスまで行つた。

「何だよ、それ」

「よくあるじやない。子どもがどうってことないってわかってるの
に、母親の気を引こうと、わざと大げさに痛がつたり、泣いたり
ちょっと安心した。

「うん、子どもの頃はしたかも知れない。けど、泣いたりわめいた
りしてるうちに本当に痛くなつたり熱が出たりするから不思議だよ
な。で、母親が心配してくれると、やけに安心して幸せな気分にな
つたりして」

「じゃあ、あるんだ、人の気持ちを試したことが」

「それは試すというより、何だろう、子どもなりにバランスを取る
のに必要なことなんじゃないかな」

「必要なのか・・・・。わたしもバランス取つてみようかな」

「絶対止める！」

「どうして？」

「お前はとんでもないバランスの取り方するような気がする
「しないわよ。わたしは子どもじやないから」

3月4日

明日は公立高校入試。中学3年生に最後の授業をした。
何でもいいから頑張ってくれ。

3月5日

「受験の朝、先生の顔が見たい、声が聞きたい」というかわいげのある奴などいないのだが、「魔除け」をしてやるつもりで、教え子に声をかけに毎年どこかの高校に行くことにしてる。今年は美園北高校だ。丘の上にある。最寄の駅から続く坂道を300mほど登ると、まず、通用門がある。さらに10mほど奥が正門になってる。俺は通用門のところで朝早くから待機していた。

試験開始時刻の1時間30分前くらいから、ぼちぼち受験生が姿を見せ始める。坂を歩いて登つて来る者がほとんどだが、親に車で送つてもらう者や、タクシーで来る者もいる。しかし、誰もが一応は通用門の前を通るから、教え子を見逃すことはない。それにしてもかれこれ1時間前だつていうのに、俺の教え子は1人も姿を現さない。この高校を受ける奴は20人ほどいるのだが・・・・。

「受験の朝は余裕をもつて行動しろ」という俺の言葉を、ある意味では守っているのだろう。余裕違いだよ。

他塾の先生達は、校庭や校舎の前で生徒達に使い捨てカイロを渡したり、何かプリントを見せたりしている。何故か生徒と握手している先生もいる。いいよな、することがあって。ああ、ヒマだ。

ほかにすることがないから、坂を登つてまず目に付く通用門から入ろうとするほとんど全ての受験生に声をかけることにした。もちろん知らない奴らだけど。

「君、君、ここは通用門だよ。正門はあっちだから。受験のときくらい、堂々と正門から入った方が気分がいいよ」

「ここは通用門だからね、言つてみれば裏口。縁起が悪いよ。正門から入つたほうがいいんじゃない?」

なんて、交通整理の警官みたいに、手で正門を示して受験生達に親切に教えてやる。受験生達も、

「そうですか。ありがとうございます」

「わかりました」

と、やけに礼儀正しく返事をして正門に向かう。

さすが受験の朝だ。普段なら礼儀の「れ」の字にも縁がなさそうな連中も、緊張して礼儀正しくなつてゐるんだろうな。そのうち、何を思ったのか「お早うございます」と俺に挨拶する者まで現れた。すると、それを見ていた他の受験生達も何か勘違いして俺に挨拶する。挨拶されれば、俺にも「ああ、お早う。頑張つてね」と言葉を返すくらいの常識はある。むらに、「正門はあつちだよ」と教えてやる。ほぼ全員の受験生が「お早うございます」と俺に挨拶して、俺の示す正門へと向かう。引率のどこかの先生や、子どもを送つて来た親までもが、「お早うございます」「お疲れ様です」と挨拶してくれるもんだから、それはそれは気分がいい。受験の朝の人の流れを見事なまでに仕切つている、仕切り続ける。ああ、忙しい。

それから20分後、やつと教え子達が現れた。

「お早う。やつと来たか」

「お早うございます。先生、何やつてるんですか」

「ああ、みんなに正門を教えてやつてるんだ」

師弟の会話を交わす間も、俺の知らない受験生達が次々「お早うございます」と挨拶して行く。

「先生、今の誰なんですか?」

「知らない」

「・・・・・・。先生、わたし達の受験のときくらい、おとなしくしておいてください。頼みますから」

「ああ、悪いわるい。つい調子に乗っちゃつて」

教え子達と一緒に正門から入り、一応は先生らしへ、自信のなさそうな奴を、

「自信を持て。お前はすごい。カエルよりすげい。バッタよりすげい」

い。もしかしたらネコよりすごいかも知れない」

と、励ましたり、この期に及んでダラダラとしまりのない奴には、「ロンドン市街地の中心部、『シティ』から北北西に35kmほど」とこりにある「コータウンの名は?出るぞ」

と、問題を出して緊張感をもてせてやつたりした。

お前達、がんばれよ。顔は見られなかつたけど、他校を受ける「お前達」もがんばれよ。

3月6日

大学入試はほぼ結果が出てる。

・・・・・弘中、神垣、堀が合格。松下が不合格。大田、岡田が合格。宮本は浪人決定、当たり前だ。乾、井上、松山、後藤が合格。原も合格、これは錯覚ではない。橋本、福島、何と宮城まで合格。浜田は第2志望に合格、しかし、浪人。宮、高瀬、中井が合格。吉岡は不合格。高梨も不合格、今から間に合つところに出願。青山が合格、高羽が合格、しかし、高校の単位不足で留年。平野が合格。・・・・・。

みんな、よくがんばった。誰が知らなくとも、俺が知つてる。

さよなら。

3月8日

今日は朝から塾に来て私物の整理をした。

そして、最後の授業だ。「さよなら」を言いたい気持ちを抑え

て授業を進める。

あと5分だ。あと5分でこの塾での授業が終わる。

「何か質問はないか？授業以外のことでもいいぞ」

「先生、いつか自分の命より大切な命があると言つてたけど、何
？」

「地球？」

「地球も大切だけどな。人間なら本来誰でも持つてると思つ
」

「体？」

「違う」

「家だ、財産だ、子どもだ、色々な答えが出るが違う。

「見えないものだ」

「心、精神、愛。近い、表現の違いだけだ。

「魂」

「魂？それって命や心と同じじゃないの？」

「違う。なんて言えばいいのかわからないけど、魂ってのは色々な
形で遺伝するんだ。しかも、血のつながりを越えて」

「ふうん。よくわからない」

「いつかわかる、かも知れない。わかつた奴は俺の魂が遺伝したん
だぜ、きっと」

生徒達は「気持ち悪い」「わかりたくない」とさんざんなことを
言つていた。しかし、お前達は確実に俺の魂に触れた俺の教え子達
だ。どんでもない魂で悪かつたけどよ。

さよなら。

3月10日

せつから手紙が届いた。

「変な日本人がいきなり現れて、診療所の隣にほつたて小屋を作つ
たかと思うと、子ども達に算数やアルファベットを教え始めた。何

日かして政府軍に連れて行かれたけど、すぐに戻つて来て本当にほつたて小屋臨時学校の先生になつちゃつた。政府の公認つていうより政府の黙認だけど、今じゃ結構慕われてる。その安達先生はおかしなことばかりするからわたしも楽しめる

「安達、やるじやん！」

3月1-1日

午後、早い時間、生徒達が来る前に、塾長や先生方、片桐さんに挨拶をした。そして、塾を後にした。

さよなら、栄明塾。

塾を去るのはどうでもいいが、生徒達と別れるのがつらい。これまで実際に教えた生徒達はもちろん、これから出会つはずだつた生徒達と別れるのも。まだ出会つていないので普通は「別れる」とは言わないかもしれないが、俺の中では何の不思議もないことだ。まあ、また新しい人々に出会つからいいけどね。

3月1-2日

明日、いよいよ恭子が俺より一足早く渡米する。向こうでは一緒に暮らすんだから2人で行けばいいのだが仕事では仕方がない。まあ、先に行つて色々と整えておいてもらえば楽でいいよな。

恭子から電話があり、空港へ行く前に食事をすることになった。正午に汐里が丘駅に来いと書つ。

「何で、汐里が丘駅なんだよ」

「すごくおいしい天ぷら屋さんがあるのよ。じょろくおいしい天ぷらも食べられないから」

「なんていう店だよ」

「名前は忘れたわ。でも、駅から歩いて5分くらいよ。道は覚えて

るのよ」

「ふーん、そうか」

「そう言えばヒロシ、明日は汐里が丘高校の合格発表でしょ？」

「ああ、でも、もう関係ないからな」

「せっかく汐里が丘まで行くんだから、ついでに合格発表も見れば？」

「いいよ、塾からも誰か見に行くわ」

「そう言わずに。ヒロシの最後の教え子達でしょ。合格くらい見届けてあげなさいよ。バチは当たらないわよ」

俺はこの教え子つて言葉には弱い。「最後の」って修飾語がつければなおさらだ。

「それもそうだな」

「何時に発表なの？」

「正午のはずだけど」

「それなら、ちょっと早めに11時30分に汐里が丘高校で会いましょう」

結局、汐里が丘の合格発表を見に行くことになった。ここいら辺では最難関の高校だ。生徒が一番多く受験したのも汐里が丘だし、毎年合格発表を見に行つてのも汐里が丘だし、いいか。生徒の受験番号リストを探しておかなきやならない。しかし、あの辺りにおいしい天ぷら屋があるとは知らなかつた。

3月13日

11時25分に汐里が丘高校に着いた。受験生や親達、学校や塾の先生らしき人達がもうかなりの数集まつていた。同僚、いや、元同僚の杉下の姿も見える。お互い軽く礼をする。ちょっと気まずいが、来てしまつたものは仕方ない。恭子も来ていた。たわいない話をしながら正午を待つた。教え子達の姿も見える。手を振る子、ニッと笑つてガツツポーズをする子、見て見ぬふりをする子。色々がいる。いていいのだ。いるのが当たり前ののだ。

武市が挨拶してきた。

「先生、恭子さん、こんにちは」

「こんにちは。いよいよだな。大丈夫さ、お前なら」

「そりだといいけど。じゃ、友達が待ってるから行くよ

恭子が不思議そうに尋ねた。

「どうしてあの子がわたしの名前を知ってるの？」

恭子を話のネタにしてたなんて言えないしな。

「名人だつたんだよ。ウチの塾じや」

「そうなの」

それ以上の追求はなかつた。いい女だ。

正午が近付いてきた。ドキドキしてきた。胸が締めつけられていた。毎年のことだがこの時間は体に良くない。ああ、今年は何人泣くのだろう、違う、何人笑うのだろう。吉田は、藤谷は、本原は・・・・・。ああ、もっとキツチリ教えとくんだつた。武市と長崎はまず大丈夫だろうが・・・・・。授業後残してでも鍛え上げておけば良かつた、特に森川と神田は・・・・・。

人がますます多くなつた。何か向こうが騒がしい。正午まで後5分、高校の先生が現れたようだ。いよいよ合格者の番号掲示だ。

「ぼちぼち見てくる。ここで待つてくれ」

「ええ、待つてるわ。でも・・・・・・」

「でも、何だよ？」

「わたしのR大の合格発表のときは、一緒に掲示板の前まで見に行つたなつて思ったの」

「そうだ。あのとき、恭子が俺の手を握りしめたとき、俺は初めて気付いたのだ。自分の中に恭子を愛おしいと思つもう1人の自分がいたことに。」

「じゃ、また手をつないで一緒に行くか？」

「わたしが一緒に行つても仕方がないでしょ。早く行つた方がいい

んじやない

人混みをかき分けて掲示板の前に出ると、高校の先生が腕時計に視線を落としている。そして、おもむろに顔をあげると、ざわめきがおさまった。

「えー、では、時間になりましたので合格者の番号を掲示いたします。くれぐれもお怪我のなによつにお願いいたします」

さあ、教え子達よ、神よ。

紙が貼られる。後ろから押されるように前に出る。手にしたリストの番号を探す。・・・・・あつた、全員あつた。信じられない。もう一度確かめよう。・・・・・ある、やつぱり全員ある。

「やつたぜ！ ザマミロー！」

何に対してもマミロなのかわからんないが、思わず叫んでしまった。

「……」「だぜ。

掲示板前の人混みから出ると、教え子達が走り寄つて来た。やっぱりこいつらは俺の教え子だ。何か言つてる、何て言つてるかわからない。叫んてる奴もいる、もちろんわからない。男子が飛びついてくる。1人、2人・・・・支え切れない。倒れる。でも、もういい。俺の支えなどいらない。俺なんかぶつ倒して先へ進め。立ち上がる。改めて顔を見ると、みんな言い顔をしてる。いい男、いい女ばかりだ。このいい男、いい女はこれからも自分の人生を歩み続ける。俺にしてやれることば、もう、ない。

歓喜の時はすぐに終わる。合格した喜びでいっぱいの教え子達は気付くわけないが、もう2度と会えない奴もいるのだ。今このときは別れの時もある。

よくやつたな。おめでとう。お前らを待ってる人はいっぱいいる

から、もう行け。」そこからお前らの姿を見るからしつかり歩め。さようなら。

俺は教え子達の後ろ姿に向かつて深々と頭を下げる。頭を元に戻し、今度は空を見上げた。少しだけ優しく震んだ早春の青空だった。

教え子達が行つてしまつてから、恭子が歩み寄つて来た。

「立つてゐるだけでなかなか来ないからどうしたのかなつて思つて」

「奴等が行くのを見てたんだ」

「やけにしんみりしてゐるわね。落ちた子がいたの？」

「いや、全員合格した」

「そう、良かつたわね」

「ああ、行こうか」

「本当に行つてもいいの？」

「いいや」

何も話さずに2人肩を並べて正門まで歩いた。そこで自然に足が止まつた。母校でもなんでもないのだが、こつして正門を出て行くことは2度とないと思うと名残惜しかつた。振り返つた。校庭の手前に体育館が、奥に4階建ての校舎が見える。校舎の前に掲示板がある。受験生を歓喜させたり落胆させたりしてきた掲示板。もう見に来ることもない。と、何故か恭子の後ろ姿が視界に入つて來た。いつたい何なんだ。恭子は校庭を歩いて突つ切ると、掲示板の前で止まりこちらを振り向いた。

「ヒロシ、おいでよ！」

恭子が叫ぶ。恭子のとつて歩き始める。恭子が掲示板の紙上の番号を指でたどつてゐる。恭子の横に立つ。

「ヒロシ、この中に教え子の番号がいっぱいあるんでしょ？」

「ああ」

「ただの数字だけど、あなたにとつては、とっても大切な数字なの

・・・・・ そりなのよね？塾の先生

恭子、俺は

「いいわよ、何も言わなくて。もしかしたらと思つてたけど、いいえ、本当はわかつてたの。あなたとあの子達が一緒にいたとき、わたくしの入る余地なんて全然なかつた。あなたが『先生』のとき、わたしはとてもじやないけどあなたの教え子にはかなわないなつて・・・・・。生徒と一緒にだと、あなたは何から何まで『先生』なんだなつて」

卷之三

「それに、やつ校門のところから振り返ったときのあなた、無防備で、懐かしさや思い出がいっぱい、全部を受けとめるような、全部を心にしまごむような、やびしそうで、やせしそうで、そうよ、やせしそれに溢れてて・・・・・、溶けちやこやうな振り返り方だった」

恭子は続ける。

「姉さんのこととは振り返るしかないけど、ここにはまた来ることができるんだから、無理して今日振り返らなくてもいいのよ。きっとあなたは来年も、その次も、ずっと、こうしてここに来るのよ。大切な数字を見に。そしてこの掲示板の前で教え子達を見送るのよ。」

恭子は畠に涙をためて いる。

「せっかくのチャンスをみすみす棒に振って、そうやって一生安月給の塾の先生してればいいわよ。年に一度の数字だけを楽しみにして。わたしには理解できないけど」

いきなり恭子が飛びついてくる。不意を突かれて思わず抱きとめてしまう。目の前に恭子の泣き顔がある。

「でも、わたしは塾の先生大好きよ」

恭子の顔が斜めに傾き、見えなくなつた。俺の口は柔らかい唇で

ふさがれた。

こんなまつ昼間、高校の掲示板の前でキスするのは初めてだ。普通そんなことしないよな。しかも今日は合格発表の日だ、知り合いが見てるかも。いいんだろうか。ああ、もう、いい。涙の味がする。恭子の涙だ。俺はやつぱり恭子が好きだ！

どれくらいキスをしていたかわからない。目の前に恭子の顔が見える。

「ずっと待ってるからな。帰つて来いよ、俺のところに」

「当たり前よ、いついまででも待つてなさい」

「『いつまでも』ってどういうことだよ」

「そういうことよ。でも、まず履歴書用紙買いに行きなさいよ。どこかの塾に拾つてもらわないとね、先生！」

「そうだな、うん、まずは履歴書だ。ついでに求人誌も。どつかの塾で先生しないとな。恭子の好きな塾の先生を」

そして、何より、俺自身が好きな塾の先生を。

「・・・・・わたし、あなたのところで死ぬから。絶対に」

恭子の顔が、今度は泣き笑いの顔が斜めに傾き、また見えなくなつた。

3月14日

昨日はまいった。この俺が人前でキスをしてしまつとは思わなかつたぜ。さめると恥ずかしかつた。逃げるよう高校を後にした。その後食事に行つた。駅から歩いて5分のはずの天ぷら屋を30分歩き続けて探すが見つからず、結局、味も値段も界隈で一番という寿司屋に入つた。もちろん支払いは俺だつた。

ありがとう、恭子。

それから空港へ行つた。あつさりした別れだつた。

「じゃあね、彰子姉さんにおちんと報告しておいてね

恭子はニコッと笑って、サッときびすを返して消えていった。振り返りもしなかった。

まあ、いいか。もうお互い、気持ちが伝えられず、伝えてもらえず、伝わらず、つらい思いをすることはないんだ。

帰宅途中、コンビニで求人誌を買つた。フルタイムの塾講師の募集は思ったより少ない。しかも、この春の大学卒業者なんとの募集が多い。

「俺はこんな競争率が高い職業に就いてたんだな。一種のヒリートじゃないか」

自分で言つて笑つてしまつた。

ウン？「常勤講師募集。大卒以上年齢不問。中・高生の英語・国語・社会を教える方。受験学年の指導の経験ある方優遇」まるで俺のためにあるような求人じゃないか。決まりだな。どこの塾だ？

・・・・・「栄明塾」だつて。

3月15日

「栄明塾」様に履歴書を送らせていただいた。

3月16日

ブライアンに断りの電話を入れた。彼は俺の説明を聞くと言つた。

「Crazy, but fantastic ! Hiroshi, SAMURAI, HAKAKIRI, BANZAI !」
相変わらず変な奴だ。

3月18日

ありがたいことに、「栄明塾」様に採用していただけた。恭子にそのことを報告したら、

「またヒロシを使おうなんて、懐が深いと言つか、腹が据わつてゐると言つか。でも、あの塾だからヒロシにも務まるのよ。まあ、いい塾なんじやない」

という返事だった。

3月19日

チョココレートを二つぱい持つて彰子の墓に行く。恭子とのことを報告する。

「…………と言つた。彰子、お前に会えて良かつた、お前を好きで良かつたよ。で、幸せでいてくれて本当にありがとうございます。お前に負けないくらい幸せになるよ、俺も恭子も。今度は恭子と一緒に来るからな。やきもち焼くなよ」

灰色の石の板が、心なしか柔らかく見えた。

「それと、『言葉』をありがとつ

ポケットから指輪を取り出した。

「彰子、この指輪、恭子に渡すの忘れてた。しばらく俺が持つてゐから

供えたチョココレートがやけにおいしそうで、一つくべすねて食べた。何の憂いもない甘さだった。

3月20日

早速、栄明塾から呼び出しがかかった。塾長が他の講師にわざわざ紹介してくれた。ありがたいことだ。

「ええ、皆さん、どういうわけだか、また、新しく入つて来られた岸和田浩先生です。文系教科を担当してもらいます。ちょっと変わった方ですが仕方ありません。皆さんよろしくお願ひします」

変な紹介をしやがって。相変わらずイヤな奴だ。

「岸和田です。なさらないとは思いますが、お気遣いなく」

進藤が話しかけてきた。

「岸和田先生、また一緒に頑張りましょう。あ、指輪。これまで指輪なんてしてなかつたでしょ。はは、彼女からですか？」

俺からだよ。元々俺が買つたんだ。で、自分で買つた指輪を自分でしてる。かつこ悪いな。

「いいえ、違いますよ」

「またまた、とぼけちゃつて。でも、普通は薬指ですよね？…じつして小指なんですか？」

薬指が太くて小指にしか入らないからだよ。あー、色々ひとつひとつ。普段ははずしておこう。

「何となく小指なんですよ。これはね、ある人に上手に渡らなくつてね、僕から渡すことになつたんです」

それまでに俺の祈りもこめておこうと思つて……。

「先生！」

誰かが呼んでる。

「先生、岸和田先生！」

誰かじゃない、生徒だ。俺の生徒だ。

そして、俺は先生だ。教えても教えて、伝えて伝えて、まだ教え足りない、伝え切れない先生だ。だから、いつまでも教える、伝える。生徒に教えてもらいながら、伝えてもらいながら。

「どうした？」

「ちょっと来て、チヨウ口あげるー。」

20××年 4月20日

この日、恭子は俺との約束を果たした。

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798a/>

塾の先生

2011年10月1日03時21分発行